

# 過去と未来のSTRATOSPHERE

尾河七国

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この度、私尾河七国はハーメルンから身を引くことになりました。今年から社会人として働くことになったのですが、勤務状況と時間のなさからこれ以上物語を継続するのは困難であるため、苦渋の決断としてこのような判断を下させていただきました。

すぐに削除はせず、4月30日をもって本アカウントを削除させていただきます。数ある作品の中から私の作品を読んでくださって、本当にありがとうございます。

IS——インフィットストラトスの登場により、第二の激動の時代を迎えた世界。

夢を貪り、欲にまみれた者達の手によって支配されたその世に、勇氣ある六人の若者が未来からやって来た。

IS学園を巣立ち、その後様々な方面で飛躍的な活躍と貢献をした者達を先祖に持った彼らは、未来と現代の今を守るために奔走する。

「「「時空転装（ディメンションスリップ）！」「」」

時を越え、今を越え、その先の未来を掴み取れ！

# 目次

## 第1章 『未来からの使者』

File. 01	《泡沫》	1
File. 02	《ドラゴンエマージェンシー》	7
File. member. 1	《主人公チーム紹介》	17
File. 03	《異常事態》	21
File. 04	《アクシデント》	31
File. 05	《100年前の過去へ》	42
File. 06	《招かれざる未来人》	51
File. 07	《スプリング アンド ウィンター》	64
File. 08	《セカンドコンタクト》	74
File. 09	《ユニバース・ラグナロク》	85
File. 10	《Category-TPS》	95
File. 11	《襲撃の生徒会長》	102
File. 12	《未来人の小休止》	114
File. 13	《影差す模擬戦》	129
File. 14	《冒険者、特命を帯びて》	143
File. 15	《炸裂！ 虎の拳と警衛の弾丸》	157

## 第1章 『未来からの使者』

### File. 01 《泡沫》

——眼前に広がるのは、地獄絵図と見間違うくらいの荒れた光景だった。

赤黒く染まった空。廃墟となった何処かの街。路面にはコンクリートの塊や廃車と化した車やバスが雑魚寝しており、不気味な風切り音が辺りに空しく響く。

「……………」

少年は怪訝な様子で、廃墟の町並みを歩いてゆく。これといった目的もなくなぜ自分がこんなところにいるかさえわからない。ただこの先の何かに呼ばれている気がしてならない。彼は姿の見えぬ存在に呼ばれるがまま、足を向けた。

……どのくらい進んだのだろうか。彼は巨大なスクランブル交差点に差し掛かった。かつて多くの人々が往来したのであるうごこちも、今ではその面影すらない。ただ風ばかりがそこを通ってゆく。

すると青年が何かに気が付き、上を見上げた。見上げた空にはまるで硝子窓が割れたような穴があき、その中は異様な歪みが顔を覗かせている。

「何だ？　ありや……」

この異様な環境と空は何か関わりでもあるのだろうか。そう彼が考えたその時、

(ゴオオオオオオツツ!!)

「!?」

空の穴が突如強烈な吸引をし始め、地上の瓦礫や廃墟を吸い込み始めたのだ。それは無差別に狙い、当然その魔の手は青年の身にも迫り来る。

「うつ…! くっ、あああつ……!!」

曲がった街灯や錆びた信号機に必死の形相で掴まり、何とか吸い込まれまいと抵抗する青年。しかし、

「! イテツ……!!」

背後から飛んできた看板に気が回らず、背中にそれが直撃。不意を突かれた彼は一瞬掴む力を弱めてしまった。

「うおおっ!? あっ、わわっ、わああああああつっ!!」

その結果彼は引き込む力に負けて宙へと舞い上がってしまう。無論今の彼には空中で対応できる術など持ち合わせておらず、ただただ割れた空へと向かっていくのみ。

尾を引く叫び声を最後に、青年の姿は割れた空へと消えていった

……

……



「ッ！ ちよつと、ッ！」

……。

(起きな——こ——つての!!)

……………。

「起きろつつつてんでしょうがこの阿保兄ツ!!」

「ドムツ!？」

……次にその意識を呼び覚ましたのは、後頭部に走った激痛と少女の声だった。反射的に身を起こして辺りを確認すると、そこはあの廃墟の街：ではなく、数分前に訪れたラウンジルームだった。窓から見える空も雲一つない快晴である。そして吸い込まれた筈の自分の身体も傷一つない。突然の場面の切り替わりに青年……ミハル・オリムラは呆然とする。

「やっと起きた……早く学校が終わって仮眠するのはいいけど、もうそろそろ召集の時間よ。さっさと準備して行こっ」

「……………」

呆れた口調で移動を促す声の主。未だ呆然とするミハルの視界にひよこつと彼に似た顔のポニーテールの少女が映る。暫くフリーズした後、ミハルは漸く状況を把握し、ついでに大事な事も思い出した。

「……………ああああアアアツツ！ そうだったアア——  
——ッ!!」

「!?」

突然の覚醒に一瞬驚く少女。それを尻目にミハルは大慌てで卓上に展開された私物を鞆に突っ込んでゆく。

「ヤベエヤベエヤベエツ！ そうじゃん次定例会議じゃねえか寝てるバヤイじゃねえっ!! 早く行かねえと司令にヌツ殺されるうう!!」

「いやミハル兄あのね…」

「何処だ！ 俺の纏めた資料何処だあ!? ああああとライセンスライセンス!! どこどこどこっ!」

「いやだから…」

「マツリ！ なにボサツとしてんだよ!! 早くしねーて」

「人の話を聞かんかいこのアワビがアツ!!」

(ドガアツ!!)

「ザンジバルツ!?」

セルフパニックに陥る兄を制止するために、「マツリ」と呼ばれた少女がその背中目掛けてぼう遣唐使ばりのドロップキックを炸裂。食らったミハルは全身をきりもみさせながらラウンジルームの強化ガラスへ。そして熱烈キッスをかましてズルズルと落下した。

「どーせミハル兄が遅刻するのはわかりきっていたから、本当の集合時間より早く伝えておいたの。因みに司令を含め全員把握済み。あと資料とライセンスは目の前よ」

「あ、ありがと……」

そういえばすぐ定例会議に行けるようにと、あらかじめテーブルの上に出していたことを思い出した。小走りで元の場所に戻り、今度は冷静に荷物をまとめ始める。

ただ準備をするその一方で、彼は一つ気になることがあった。

(……夢を見ていたのなら、あの妙に現実味のある夢は何だったんだ？ 夢の内容も背中の中の痛みもちやんと覚えている……さっぱり意味がわかんねえ)

直前まで見ていた奇妙な内容の夢。それはいつも夜寝る時に見るようなものとは全く異なるものだった。何処か現実に近い感覚があり、簡単に夢の一文字で片付けるには言い様のない違和感が残ってしまふ。

「用意できた？ ほら、行こっ」

「お、おう……」

しかし今は夢のことよりも定例会議の方が先である。少女に急かされ、ミハルは一旦目の前の事に意識を向ける事にした。

---

【次回予告】

---

……えっ!? 初回の担当俺なの!? 嘘でしょ!?

(仕方ないでしょ! 一応主人公扱いなんだから!)

えー!! 何言えばいいんだよこれ!? エ○シーズとか式神纏って竜になればいいの!?

(いいわけないでしょうが阿保兄ツ。 いいからカンペ読みなさい!!)

カ、カンペ? ……ああこれか、これ言えばいいのか。

え、えーつと、次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は主人公ミハルとマツリの仲間達が登場! 加えて上司も出て来てさあ大変! 果たして大食い大会の結末や如何に!? ……なんじやこりや。

次回、File. 02 『ドラゴンエマージェンシー』。



カンペ読んだぞー、これでいいのかー？  
(袖に話し掛けた袖に！)

## File. 02 《ドラゴンエマージェンシー》

この物語の舞台から、およそ100年前に登場したマルチフォームスーツ・IS。あらゆる既存兵器を凌駕するスペックと性能を兼ね備えたそれは多くの欠陥を抱えたまま日の下に晒された。宇宙を目指した翼は地に縛られ、さらに私利私欲のために利用しようとするハイエナ達の餌食となってしまう。そんな散々な扱いを受けることを予測していた人は少なからずいたことであろう。

しかしいい意味でISは人類の科学技術に飛躍的な発破をかけた。例えばパソコンやスマートフォンにISの装甲製作技術を応用して衝撃に備えたり、ロボットの構成する素材や可動するためのシステムにIS技術を使つて構築する……等々、日々新たな開発や発明が世界の片隅で着々と進んでいたのである。まさに明治時代に続く第二の激動の時代でもあった。

そしてISの欠陥が徐々に修復されつつあった時、遂に人類科学の夢ともいえる発明が世に出された。

その名も『タイムスリップ時間転移』である。

ISの出せる飛行速度、イグニッション・ブースト瞬間加速の研究を重ねていった結果、ある一定のスピードで音速の壁を突き抜けることで、時間の流れに突入することが可能になったのだ。それにより過去の世界や未来の世界へ行き来することが可能になり、あらゆる歴史の謎や迷宮入りの事件の全容等、これまでに不明瞭で解決することがなかった事柄を解明することが出来るまでに、人類科学は壮絶な進化を遂げたのである。

時は流れ、物語の舞台である西暦2146年の日本国首都・東京。時間転移が一般化し、ツアーや旅行のように馴染んだこの世界では、その手軽さから勝手な歴史改竄を目論む犯罪者が急増していた。そこで各国の政府はこれまでの歴史を守るために『時間転移保護法案』を制定。加えて時間転移を統率する時間保護組織『TPS（タイ

ムパトロールステーション』を設置。未来の今を守るために日夜活動を続けているのだ。

話を戻して、ミハルと隣の少女……マツリ・オリムラはそのTPSに所属するチーム『ドラゴンエマーゼンシー』の学生隊員であり、学業と平行して活動に参加している。因みにTPSには所属年齢制限はなく、年に一度開かれる厳しい試験と適性検査をクリアしたものだ。だけが所属を認められる。

「しっかしここ最近になって違反者がかなり増えたよな。纏めた資料ざっと見てみるとさ」

「この前なんか、大手企業の立ち入り検査したら過去の販売物とそのデータを抹消して、新たに自社の商品として売り出そうとした計画書が見つかってエライことになったしね。違反だつてわかっているのにどうして裏でそんな小細工するのかしら？」

「今も昔も、変わるののは周りの景観だけで人の心までは変わらないのかもな」

「お？ ミハル兄にしては中々詩人みたいな意見だね」「うっせ」

手元の資料を流し読みしつつ、ミハルはため息をついた。そこには様々な統計グラフにデータの一覧が記載されており、マツリの手にも似たようなものがある。

今回二人が参加する定例会議とは企業の実態調査報告で、先日TPSが摘発した企業の違反事案を受けて、この際不透明な企業の実態を探ろうという話が上層部の間で持ち上がったのだ。そこでTPSに所属する隊員達がそれぞれ企業に立ち入り調査を行い、定例会議で情報を共有し合うというのが会議の目的である。最も二人が調査した企業は特にめばしい収穫もなく、異常も違反も見られなかったが。

「俺達が調べた企業はそーでもなかったけどさ、エドやファン姉とかは絶対当たり引いてそうだよな」

「多分ねえ。あの二人に至っては私達よりも経験豊富だし、ともすれば私達が調べた企業を再調査させたら変なボロとか見抜きそうだし」  
「流石、チームリーダーと技術班経由入隊者つてどこか。観察眼が俺らとは比べ物にならねえ」

そんな雑談を交わしつつ、ミハルとマツリは定例会議がある司令室へ到着。巨大な扉の前に立つと、二人は手にしたライセンスをそれぞれ黒い円状のモニターにかざした。すると扉の上部に取りつけられたクリスタルから光線が放たれ、二人の頭から爪先までを照射。暫くして

『登録データ、認証完了。該当登録者 ミハル・オリムラ、マツリ・オリムラ、入室を許可します』

女性の電子音声と共に、扉が油圧音をたてて開いた。

司令室は広く、周囲を囲むように色々な機器やディスプレイが並んでいる。そして中央には一際大きいモニター、円卓状のテーブルと椅子が真ん中に置かれている。ミハルとマツリが中へ入ると、既に二人の男女が司令室にいた。

「お、エドとファン姉！ もう来てたんだ」

「やあ、ミハル君にマツリさん。こんにちは」

「やくはろく。お先やでく」

「とりあえず先にミハル兄連れてきました。協力ありがとうございます、二人共」

金髪に眼鏡を掛けた青年……エドワード・オルコットがご丁寧に立ち上がって挨拶をし、ロングヘアのおっとりとした女性……メイラン・ファンがゆらゆらと体ごと手を振る。ミハルとマツリは階段を降りて二人にかけ寄り、ハイタッチしたりハグしたりと、各々仲良しのシルシを交わした。

「前日ジャン君とゲオルクさんから連絡があつて、本国の諸事情により遅れるそうです。会議の時間までには到着するそうなので、それまで気長に待ちましょう」

エドは左耳のイヤークラスを軽くつつき、顔前に投影型ディスプレイを映し出した。三人に見えるように反転してあるそれには、用事で遅れるといった内容の文面が二通、映し出されている。

「ジャンもゲオルクも俺らより所属先が一個多いからな」

「まあ、仕方ないよね」

「せやなく」

三人は納得した様子で頷く。

「そういえば腹が減ったなあ。二人とも、お菓子食べへん？」

「食べる食べる！ サンキューファン姉！」

「いいんですか？ それじゃあ頂きます」

……  
そういつてメイランはゆつくりとした動作で足元に手を伸ばすと

「よっころしよつと」ドンツ！

巨大な段ボール箱に入った菓子の山を取り出した。

「いやどつから取り出したんですかそれ!?!」

「わははっ！ こりや食いきれるかどうか試せそうだな!!」

「ほんならミハミハ、ここは一つ競いまひよか？ ウチ勝てる自信があんねんよ？」

「よっしやあツ！ それじゃあ会議前の腹拵えついでに勝負だ！

ファン姉！」

「しなくていいです（せんでええ）っ!!」

勃発しそうになる菓子大食い選手権を防ぐために、マツリはハリセンで兄の頭を張り倒し、エドは段ボールを急いで撤去。二者二例の「ああくっ!!」という空しい声が司令室内に響く。

と、その時

『登録データ、認証完了。該当登録者 アキナ・オリムラ、入室を許可します』

「!!」

認証した人物の名前を聞いた途端、エドとマツリ、菓子を取り返そうとしたメイラン、悶絶していたミハルが即座に整列。入室してきた人物に敬礼をとった。

「うむ。先に来ていたのは君らだったか」

「司令、おはようございます」

「解いてもらって構わない。会議前くらいはゆっくりしていてもいいだろう」

肩までかかるウェーブがかった黒髪。切れ長の黒い瞳からは、ただならぬオーラがひしひしと感じられる。ミハル達と似た白い制服に身を包んだ彼女は、四人の前に歩み寄って敬礼を解くよう促した。

「承知の事かと思うが、ジャンとゲオルクの両名は本国の諸事情で会議に途中参加という形で合流する。念のため前日に二人から調査資料を受け取っているし、報告の順番は自動的に後半へまわしている。君らにとっては少々酷だと思うが理解してもらいたい」

「まあ個人の都合もありますし、仕方がありませんよね」

手にしていた調査資料を卓上に置き、エドと同じようにカフスを作する司令……アキナ・オリムラ。展開されたディスプレイには報告の順番が表示されており、メイラン、エド、マツリ、ミハル、ジャン、ゲオルクの順繰りになっていた。

「けど今日は早いねアキナさん。いつもなら集合時間と一緒にやってくるのに」

「なに、ただ単に仕事が早く片付いたのさ。それよりも珍しいのは、集合時間に毎回遅れてやってくるミハルが既にここにいることじゃないのか？」

「前回でスタンプがリーチになったから焦ってるだよ……次遅れたらアキ姉直々の瞬○殺とか洒落にならねえって……」

アキナのニヤニヤした指摘に答えるように、ミハルは返答の代わりに黒いスタンプカードを取り出した。その表面には不気味な赤い文字で『瞬○殺カウントダウンスタンプ』とある。

「ただでさえマツリのツツコミだけでも痛エのに、瞬○殺なんて食らったら死んじゃうって」

「あら？　なら今度からツツコミの仕方変えようか？　丁度今アキナさんから瞬○殺習ってるし、自主連ついでにさ」

「やめれ！　というかアキ姉までマツリに何仕込んでるんだよ!!」

「お前がこのチームに加入してからというものの混沌勢が増えたもんでな。こうでもしないと抑制が効かないのさ」

「人を病気の症状扱いしないでくれよ……」

「アハハ……」

「モゴモゴ……？」

テーブルに突っ伏して項垂れるミハルにエドは苦笑いするしかなく、メイランに至ってはハムスターよろしく菓子を頬張る。なんとも微笑ましい(?) 光景だった。

さて上記のやりとりや名字を見て察している方も多いと思うが、ミハルとマツリ、アキナの三人はチーム内の関係だけでなく、甥姪と叔母の関係でもある。仕事面ではちゃんと司令と隊員の立場を弁えているのだが、一旦プライベートに切り替わると一変してフリーダム状態に。当初エドや他のメンバ―達も冷静なアキナの変わり様に戸惑っていたものの、今ではすっかり受け入れて馴染んでいた。すると笑っていたアキナがエドの方に顔を向ける。

「エド、その足下の段ボール箱はなんだ？」

「えっ？ ああこれですか。これは……」

「うちが持ってきたお菓子やで。司令も食べまっか？」

「ふむ……」

顎に手を添えて、アキナは段ボール箱の菓子を見つめて思考に入る。そして数秒後に彼女が出した結論は……

「……よし、誰か私と菓子の大吃い勝負だ！ 開封して食べ終わった菓子の梱包数が一番多かったものを勝ちとする!!」

「いざ尋常に勝負!!」

「二会議前に（しないで下さい）（すな）っ!!」

………案外アキナにもミハル並のポケ要素があったりする。

▽△▽△▽△▽

以上の一悶着から数分後。

『登録データ、認証完了。該当登録者 ジャン・デユノア、ゲオルク・ボーデヴィツヒ、入室を許可します』

「いやーなんとか間に……ってええっ!!? しっ、司令!?!」

「む、もう会議は始まっていたのか？」



「安心しろ。まだ始まっていない」

「とりあえず集合時間には間に合っていますよ、二人共」

入室してきたのは二人の男性だった。小柄な体格で金髪の少年と、もう一人はスラツとした長身に束ねた銀髪の青年。二人は既にいたメンバーを見るや否や、それぞれ二者二例の反応を見せる。

「なんだあびつくりしたっス…というか、メイラン先輩いなくないっスか？ ミハっちはいつものことだけど」

「ああ、二人ならあそこにいるぞ」

金髪の少年……ジャン・デュノアの疑問にアキナが壁際に目を向けた。するとそこにはソフトボール大のたんこぶを作つてうずくまるミハルとメイランの姿が。

「…自分らが来る前に何があつたんスか？」

「会議前にお菓子の大食い勝負をしようとしたから、その制裁」

「何で会議前にやろうとしたんスか…」

因みにアキナは司令のためお咎め無しである。

「それにしてもジャン君やゲオルクさんはどうして遅れたんですか？」

「自分はちよつとデュノアコーポレーションに呼び出されちゃつて、一時帰国してたんスよ。それでゲオルク先輩が…」

「本国の考古学研究所から依頼が入つて、ドイツ西部の森林の奥地で発見された古代遺跡の調査団に同伴していた。貴重な体験が出来て中々楽しかったぞ」

「なんで会議の前日まで遺跡探検してたんですか……」

「仕方がないだろう。急な依頼だったのだから」

小走りでテーブルに向かい、ジャンとゲオルクは前もって提出していた調査資料を受け取った。時間もそろそろ満ちてきたため、彼らの表情にも徐々に真剣の色に変わり始める。

「二人ともー、大丈夫っスかー？ そろそろ会議始まるっスよー？」

「お、おー…」

「いや〜中々効いたわ〜」

ジャンの呼び掛けに、ミハルとメイランがたんこぶを擦りながら復帰。手持ちの資料を用意して着席する。

「さて、時間になりましたね。それでは司令、号令の方をお願い致します」

「うむ。それでは総員、起立っ！」

アキナの掛け声で全員が立ち上がり、それを視認した彼女が朗々とした声で会議の始まりを告げた。

「これより、先の不正企業摘発事案を受けて、TPSが実施した企業の実態調査報告会議を行う！」

---

【次回予告】

---

えー、はい。主人公妹のマツリ・オリムラです。次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は、緊急事態発生を受けて、遂に私達ドラゴンエマーゼンシーが出勤します。

(なんか普通過ぎるな。面白い事言えって、マツリ！)

(歌ってやマツリン〜！ い〜まここっ、い〜まここっ！)

発生した事態に隠れた奇妙な謎。調査に乗り出すべく、私達は時間転移船『ラズリフライヤー』に乗り込んで時空間へ向かいます。乞うご期待！

次回、File. 03 『異常事態』。

(きつとこの声は世界を駆け抜ける！)

さつきから喧しい！ あとそれは違う曲だアツ!!

(ギャー!?)

## File member. 1 《主人公チーム紹介》

▽ミハル・オリムラ（織斑 三春）

年齢：15歳

所属：時間保護組織『TPS』実行部隊・緊急事態処理班『ドラゴンエマーゼンシー』

専用機：タイムトラベラー

血筋：織斑一夏と篠ノ之箒の子孫

イメージCV：入野 自由さん

概要：本作品主人公。世界で初めてISを動かした男・織斑一夏と篠ノ之箒の子孫。TPS実行部隊の緊急事態処理班『ドラゴンエマーゼンシー』のメンバーで、ムードメーカー的な立ち位置にいる。基本ボケ担当ですぐテンパる癖がある。また色仕掛けに弱く、調子に乗りやすいが、やらなくてはいけない事には意外に勤勉。また家族思いな一面もあり、職場でも一緒にいる妹のマツリには特に気にかけている。

戦闘面においては慎重かつ、攻める時はとことん攻めるタイプ。篠ノ之流剣術を独自に発展させた流派『ミハル流二双剣術』を主な格闘スタイルとしている。

▽マツリ・オリムラ（織斑 祭）

年齢：13歳

所属：時間保護組織『TPS』実行部隊・緊急事態処理班『ドラゴンエマーゼンシー』

専用機：真剣皇

血筋：織斑一夏と篠ノ之箒の子孫

イメージCV：東山 奈央さん

概要：ミハルの妹。彼と同じ織斑一夏と篠ノ之箒の子孫であり、『ドラゴンエマーゼンシー』の最年少メンバー。

兄よりもしつかりした真面目な性格で、チーム内では作戦参謀を務めている。また数少ないツツコミ役でもあり、ボケの根源である兄や

それに乗っかるメイランやゲオルクにも容赦なくツッコむ。そのため若くしてストレス性胃炎の傾向があると最近の健康診断で言われたという。(本人曰く、唯一の悩み)

今代まで続く篠ノ之流剣術の師範代の肩書きもあり、剣道大会では優勝した経験も複数持つ。またミハルの事は心から信頼しており、「おつちよこちよいだが頼れる兄」と苦言混じりに高く評価している。

▽エドワード・オルコット

年齢：15歳

所属：時間保護組織『TPS』実行部隊・緊急事態処理班『ドラゴンエマーゼンシー』

専用機：メトロパトロール

血筋：セシリア・オルコットの子孫

イメージCV：関 智一さん

概要：イギリス出身のドラゴンエマーゼンシーリーダー。愛称はエド。

誰に対しても丁寧な口調で話す英国紳士だが、一度銃を握ると寡黙になり、ボソボソと短い単語しか口にしなくなる。彼曰く「周りの音を出るだけ察知するために黙っているだけ」だそう。

チームリーダーを勤める傍ら、名門であるオルコットの名を汚さぬよう努力している若き当主。そのせいか誰かに頼ることをよく忘れてしまいがちで、一人で背負い込み過ぎると指摘されたこともある。

▽メイラン・ファン (鳳 美蘭)

年齢：16歳

所属：時間保護組織『TPS』実行部隊・緊急事態処理班『ドラゴンエマーゼンシー』

専用機：闘白虎

血筋：鳳鈴音の子孫

イメージCV：巽 悠衣子さん

概要：TPS特殊技術班からドラゴンエマーゼンシーに移籍した16歳。中国出身で大阪育ち。ドラゴンエマーゼンシー問題児第二号。

鳳鈴音の子孫で、その身体と性格は明らかに子孫とは思えぬナイスバディ。大の菓子好きでいつも持ち歩いている。細目でおっとりとした関西弁口調で話す。また中国出身ということで拳法も一通り出来、特殊技術班にいた経験から機械類の知識が豊富。

武器はあまり好まず、肉弾戦で勝負するタイプ。そして見掛けの割に力持ちで、IS一機は軽々運搬可能。

彼女の母・レンファは既に他界しており、その形見として専用機の仕様と無名の髪飾りをいつも持ち歩いている。

▽ジャン・デュノア

年齢：15歳

所属：時間保護組織『TPS』実行部隊・緊急事態処理班『ドラゴンエマーゼンシー』

専用機：ミツシヨン・エグゼキューション

血筋：シャルロット・デュノアの子孫

イメージCV：下野 弘さん

概要：フランスからの編入隊者。15歳。シャルロット・デュノアの子孫で、TPSと共同連携をとるIS大手企業デュノアコーポレーションの御曹司。社会勉強と後学のためにTPSに移った。前の所属先での経験からパソコンやシステム面に強く、ハッキングも易々とやってのける。またゲオルクとゲームやアニメといった趣味が合致していることから、共に行動することが多い。

基本ツッコミ担当だが、時と場合によつては悪乗りする場面もしばしば。口癖は語尾に「〜ッス(〇〇)」。

▽ゲオルク・ボーデヴィツヒ

年齢：18歳

所属：時間保護組織『TPS』実行部隊・緊急事態処理班『ドラゴンエマージェンシー』

専用機：アーベントイヤー

血筋：ラウラ・ボーデヴィツヒの子孫

イメージCV：杉田 智和さん

概要：ラウラ・ボーデヴィツヒの子孫にあたる問題児第三号。チーム内最年長の18歳。

TPSで働く傍ら、本国ドイツの考古学研究所数件とパイプを持っており、度々帰国しては遺跡発掘に顔を出している。彼曰く「未知の領域に魅力を感じているから」だそう。

元々メタイ中の話だけしか問題視されていなかったが、ミハルと美蘭の影響を受けてかそれに乗。問題児として嫌なランクアップを遂げた。趣味は遺跡発掘や博物館巡り、ゲームやアニメ等。

## File. 03 《異常事態》

「――以上で、私が調査した企業の内部状況についての報告を終わります」

「ご苦労。席に戻ってくれ」

投影ディスプレイをオフにして、報告を終えたゲオルクは席につく。

メンバーのそれぞれの調査報告には対象企業にこれといった目立つ箇所は見られない。廊下でミハルとマツリが予想していたエドやメイランの調査報告にも然程気にかかる点はなかった。

「皆の調査報告を聞く限り、特によからぬ画策を企てている企業はないようだな。だからといって気を抜いては駄目だ。現時点では何も動きを見せてはいないが、今後裏で暗躍しないとは限らない。引き続き警戒を怠らないよう各自注意してほしい」

「「了解！」「」」

アキナの締めくくりに一同は敬礼で返し、それを視認した彼女はイヤークラスを操作。何処かと連絡をとり始める。

「アキナです。例の企業報告についてですが、つい今しがた報告が終わりました。今から調査した報告書をそちらに転送するので、データベースへの登録と更新等をお願いします」

『了解。そちらに転送ゲートを開きますので、ゲートに報告書を置いて下さい』

「わかりました」

通信が終わると、司令室のテーブル中央のリングが発光。ゆっくりとした速度の光の渦が現れた。ミハル達は自分の報告書を渦の上に置き、全員が置き終わったことを視認したアキナが手元の転送スイッチ



チを押す。

輝きが強まった渦は置かれた報告書を包み込むように消滅し、再びアキナのカフスに通信が入った。

『オリムラ司令、無事報告書を受け取りました。後はこちらで対処しますのでお任せ下さい』

「了解しました。お願いします」

どうやら転送は無事完了したらしい。

因みにミハル達が纏めた報告書はTPS本部地下に設立された”情報統括管理センター”に送られ、後々の調査や参考資料に用いるためのデータとして記録・保存される。時代や世の中が移り変わろうとも、情報はあらゆる面で重宝される物なのだ。

「結局、調べた企業に変なところはなかったな。赤字の泥沼にドツブリ浸かってる事以外は」

「それは別にいいんじゃない？ 今も昔も経営が難しいことは事実だし、そもそも今始まったことじゃないでしょ？」

「自分が調べたところは言っちゃあなんすけど、もう殆ど首の皮一枚状態だったツスね」

「今多いよなー。そういう崖っぷち企業」

会議のピリピリとした空気から解放されたのか、配布された資料を纏めつつ井戸端会議と洒落混むミハル、ジャン、マツリ。その対面ではお互いの不備がないかどうか論じ合うエド、メイラン、ゲオルクの三人。会議後の方向性が垣間見える光景だった。

すると通信を行っていたアキナのカフスに、別の場所からの連絡が舞い込む。

「…？ はい…はい…。わかりました。現状の方を確認しますの  
で、すぐそちらに向かいます」

急に声のトーンが低くなり、険しい表情を見せるアキナ。それにミハルが気付き、怪訝な様子で尋ねた。

「司令、どうかされました?」

「ああ。どうかしている状況が起きているらしいと連絡があった。：総員、整列ッ!」

アキナの号令で全員が各々の手を休め、彼女の前に立つ。

「これより異常調査のため、時空間制御管理室へ向かう。総員、直ちに移動せよ!」

「「「了解!」」」」

アキナの命令を受けたメンバーは司令室の壁側に並んだ複数の柱へ走った。柱には”Teleport Shooter”と白文字で書かれた扉があり、それを開いて二人ずつ中の空間に入る。アキナも空いている柱に進出し、扉を閉めて中のモニターにライセンスをかざした。

(ブウン…:キュイイイイインツ!)

すると柱の内部が先程と同じく淡く輝きだし、光が搭乗したメンバーを頭のとっぺんから爪先の先まで包み込んでゆく。そしてその全身が光に包まれたその瞬間、一際大きく輝いてミハル達と共にその場から消え去った。

▽△▽△▽△▽

(キュイイイイイインツ! バシユウウン!)

ミハル達が司令室から消えたその直後。TPSの別施設に設けられた重要機関の一つ・時空間制御管理室では室内隅に設置された柱から光が迸り、扉が開いた。そこからミハル達が姿を現し、アキナを先頭に作業中の職員の間をすり抜けて歩を進める。

「まずは私についてこい。調査概要はそこで伝える。行くぞ！」  
「「「了解!!」」」

ここ時空間制御管理室は、時空転移する人々の安全や時空間の状態を常に監視しているTPSの要である。ミハル達ドラゴンエマージェンシーやその他チームも任務の際に必ず通る道のため、各司令室とここは先程の柱：物質転送装置”テレポルトシユーター”で直結している。司令室の入室同様、ライセンスをかざすことで転移できる。

話を戻して、本題が告げられぬままアキナの指示でついでいくと、一層職員が集まっている場所が見えてきた。それを掻き分けつつ向かっていくと、投影ディスプレイを前に唸る一人の男性の姿が見えてきた。

「ヤマダ所長。ドラゴンエマージェンシー、只今到着しました」

「おお、オリムラ司令。お忙しい所お呼び立てしてしまい申し訳ありません」

「構いません。それで異常検知が出たというのは本当ですか？」

「ええ。このスキャン画像を見て頂きたいのですが……」

アキナに恭しく対応する大柄な男：トウキ・ヤマダは、アキナやミハル達に目の前の投影ディスプレイを見るよう促す。そこにはサーモグラフィでスキャンしたと思われる画像が写し出されていたのだが、全体が赤く、隣に表示されているメーターも定まっていないう尋常ではない状態だというのが見てとれる。これを見た彼女も唸る他なかった。

「これは……」

「ご覧の通り、普段であれば平常値を保っている時空間内の温度が急激に上昇しているのです。ここまで全体が赤く表示され、尚且メーターが平常値を軽く越すことなどあり得ません」

「確か時空間内の温度上昇の主な原因は、時空間内へ突入・脱出する時に基準速度を超過した際の残響で時空間の壁が傷つき、それを修補するためにエネルギーが集中。傷ついた箇所温度が上昇する……でしたよね？」

「うむ、ゲオルク君の言うとおりだ。しかし今回はそれが全体にブワツと広がっているんだよ。仮にエネルギー集中が原因であれば、傷をつけた大元は何なのかという話になってくる。こんなことはこの職に就いて始めてだ」

ゲオルクの言葉に、トウキは否定とも肯定ともとれる返事をする。

「うーん、あれっスかね？ 全体に残響が残せるくらいの速度が出せる何かが進入したとか」

「それだったら入った瞬間すぐ引つ掛かるだろ。俺達を呼びつける程のことでもないわけだし」

「付け加えてく、陸空海と違って時空間はデリケートなんや。法でもそないな速度出せるようなもん作ったらアカンし、作つとつたとしてもすぐ検挙されるのがオチやで〜？」

「そーっスよねえ……」

「いずれにしろ、訳がわからなさすぎて頭がパンクしそうね……」

様々な見解が飛び交うが、原因はわからない。

「司令、どう思われます？」

「……いや、私でも原因が思いつかん。ジャンの違法な速度を出せる乗り物のことも否定しきれんし、違うからといって他の要因も思い当た

らない。全くの謎だ」

アキナも瞑目して首を横に振る。彼女もメンバー同様推論を立てて原因を探っていたのだが、どうやら結果は同じだったようだ。

ここで考えても拉致が明かない。そう踏んだアキナはミハル達に向き直り、漸く彼らに調査概要を告げた。

「諸君。現状は極めて不明な点が多く、どこに危険が潜んでいるかわからない。各自十分警戒し、この異常事態の原因を突き止めよ！ ドラゴンエマージェンシー、出動ッ!!」

「了解！了解！」

ミハル達は一齐にその場から駆け出し、行きとは違う別のテレポーターへ搭乗。それぞれライセンスをかざして作動し、別の場所へジャンプした。

一方のアキナはトウキと数名の職員と共に制御管理室を出て隣接した時空転移管制室へ。カフスの投影ディスプレイとインカムを装着し、全員で室内のパソコン数台を相手に何かの操作をこなしてゆく。

そしてテレポーターでミハル達が向かった先は、天井と壁が一面ガラス張りになった通路前。彼らは迷うことなく通路を駆け抜け、その先のポールに飛びついて降りてゆく。通路の下は大小様々な乗り物が仕舞われた格納庫らしく、彼らの目的地はここのようなのだ。

「クツワギのじっちゃん！ ラズリフライヤーの調子どお？」

「おっ、ミハル君か！ ご覧の通り万全に整えてあるわい！ 気を付けて行ってこい！」

「サンキュー！ 心からありがとう!!」

奥に止められていた、一見すると翼を広げたドラゴンのような型の

時空転移船『ラズリフライヤー』。そこへ全員が乗り込み、最後にミハルが作業中の整備班班長：コゴロウ・クツワギにラズリフライヤーの整備状況を確認。万全の言葉を聞いて颯爽と乗り込んだ。

機体前方の操縦室に入ると、中は階段上になった六人分の操縦桿が備え付けられていた。まずメイラン、ジャン、ゲオルクが奥の三人掛けの操縦桿へ。マツリ、エドは手前左右に、そしてミハルが手前中央の操縦桿を握る。

「システム起動。全エンジン正常稼働したっス！」

「エネルギー循環システム異常なし。データ数値は？」

「もうまんたいやで〜！」

手前と上部パネルを手早く操作し、ラズリフライヤーをいつでも出撃可能な状態へ移行させてゆく三人。

「ハッチ閉じます。ブースターのエネルギー供給回路、開きました」

「エネルギー充填度80：90：100%、フルを切りました」

マツリとエドも正常稼働を確認。五人それぞれの報告を受けたミハルがカフスを通してアキナに報告する。

「ラズリフライヤー、スタンバイオールクリア！」

『了解。格納庫、ゲートオープン！ 出撃準備用意！』

『『『『了解！』』』』

管制室では複数の職員が忙しなく機器の操作を行い、指示を受けたトウキが足元のレバーを倒す。

その頃格納庫では避難放送を受けて退避した整備班達が庫内脇の別室に移動。管制室同様に機器を動かす、格納庫のシャッター展開とラズリフライヤーを乗せた巨大な回転板を旋回させて出入り口へと向ける。

鈍い音を立てて、上下斜めにシャッターが開く。その先には屋外まで伸びるレールと射出シューターがあり、移動したラズリフライヤーはサイドのロボットアームに掴まれ、射出シューターの天板に置かれて外へ出された。

「ラズリフライヤー、射出シューター上に乗りました」

「了解、シューター起動。レールサイド・オープン！」

レールに被せられたカバーが左右に大きくスライドし、一定間隔で並べられたライトが顔を出す。

「時空間ゲート、解放！」

管制室内の職員がクリアカバーを開けてダイヤルを捻ると、レール上に設けられた巨大な四角いモニメント内に、中央から広がるようにして虹色の渦が出現。モニター越しにそれを確認したアキナがミハルに指示。

「こちら管制室。時空間ゲートの解放完了！ 総員、対閃光、対シヨック防御用意！」

『『『『了解！』』』』』

ミハル達は一斉に手元のゴーグルとシートベルトを装着。そしてマツリとエドは手元のレバーを同時に下げた。

「左翼ブースター始動、正常値キープ！」

「右翼ブースター始動、正常値キープ！」

「よし、主軸ブースター始動、正常値キープ！ いつでも発進可能です！」

『了解！ カウントに入る！』

ラズリフライヤーのブースターから気流が吹き出し、ミハルは操縦桿を握る力をより一層強める。

『8…7…6…』

カウントが刻まれるごとに、一同は顔を強張らせる。

『3…2…1…0！ ブルーフライヤー、発進！』

「発ッ進!!」

アキナの掛け声と共にミハルが操縦桿を力一杯引っ張り、連動したブースターが勢いを増して機体を一気に加速させる。甲高い音を立てながらグングン加速する機体はモニメント内に一直線。刹那

(カツ！ ギュオオオオオンツツ!!)

ゲートにラズリフライヤーが突っ込み、その瞬間周囲一帯を光が包み込んだ。直後に光は止んだが、ゲートに突入したラズリフライヤーも一緒に消え失せていた。

---

【次回予告】

---

皆様、お初にお目にかかります。時間保護組織TPSの実行部隊・緊急事態処理班ドラゴンエマージエンシーのリーダーを努めさせて頂いておりま……

(エド！ エド！ 次回予告なんで自己紹介は短めに頼むっス！)

あつ、そうでした。えー、リーダーのエドワード・オルコットです。次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』、File. 04はどうか僕達が大変な目に遭うようです。恐ろしい内容ですねえ。



でもメンバーの一人がこのピンチを凌ぐ決断を下すそうですよ。は  
てさて、ドラゴンエマージェンシーは無事調査を終えることができる  
のでしょうか？

次回、File. 04 『アクシデント』。

(あれが本当の次回予告の仕方よ。わかった？ ミハル兄)

(えっ？ あれじゃ駄目だったの？)

(駄目に決まってるでしょうがこのスカタン！)

(ブラウ・ブロッ!?)

アハハ…… (僕の次回予告に関する絡みはしてくれないんですね  
……)

## File. 04 《アクション》

管制室内は静寂に包まれている。トウキとその他の職員はモニターを食い入るようにつめ、アキナは瞑目してカフスに手を当てて通信を待つ。暫くして

『…いま…。こちらラズリフライヤー。管制室応答願います』

少量のノイズと共にカフスからミハルの声がかかった。それに反応したアキナがカフスをスピーカーに接続して応答。管制室の人間に内容がわかるように施した。

「こちら管制室。ラズリフライヤー、現状の報告を」

『了解。先程時空間内に突入しました。機体、時空間の壁共に残響はありません』

ミハルの落ち着いた報告に職員達が安堵の溜め息をつく。どうやらラズリフライヤーは無事時空間へ行くことが出来たようだ。

「検知では時空間内全体の温度が異常な程上昇している。何か肉眼で確認できるような異変は起こっていないか？」

『コックピットから見える景色は……いつもどおりです。特にこれといった変化は見られません』

ラズリフライヤーは時空間内をゆったりとした速度で飛行。時空間はパステルカラーで彩られており、その色彩をマール上に変化させながら揺らめいている。何とも幻想的な光景であった。

ミハルは一時アキナとの通信を切り、外部カメラを操作するジャン、メイラン、ゲオルクの三名にその映像を管制室に送るよう指示。三人は手元のディスプレイを操作して外部カメラのウィンドウを立ち上げ、管制室のコンピュータに接続した。

「今映像をそちらに繋ぎました。ご覧の通り肉眼やカメラを通して確認できるような異常はありません。残響による傷痕もありませんし、リーダーにも引掛かるようなものもないです。……そっちどう？」

「いや、全然問題ないっス」

「ただ制御室のシステムが間違っているわけではないみたいです。ミハル君、フライヤーのサーモスキャン結果を展開しますので管制室に転送してください」

「了解。司令、管制室にサーモスキャン結果を転送します」

トウキが転送された温度センサーのグラフをモニターに表示する。やはり標準値をはるかに越えており、異常であることが浮き彫りであった。

しかしミハル達の目の前の光景はいつも通りの時空間の揺らめきである。どこにも異常な箇所が見当たらない。一体どういう事なのか。

「……やはりシステムの誤差ではなかったか。とすると別の要因……。これは単なる事象で片付くような話ではないな」

「ですな。秀でた上昇箇所といってもこの有り様では……。原因らしいところも見られませんし、謎が深まるばかりで見当が付きません」

念のためアキナ達の方でも数名の職員が調査にあたっている。最もすぐ停滞するだけで一向に進展はないが。

さらにアキナはもう一つ、別の問題を気にしていた。

『総員、これ以上の調査は危険が及ぶ。時空間内の温度上昇は時空間突風を引き起こす要因になりかねん。速やかに帰還せよ』

「了解、ラズリフライヤーは現時点をもって調査を切り上げ、旋回して帰還します」

時空突風。

時空間内における急速な気流の乱れで、時空間内の温度が上昇すると余剰エネルギーを放出しようとする働きによって強い気流が発生する現象である。時空間は前後に大きく広がってはいるが、その分左右上下の空間が狭い。

そのため強い時空突風が発生した場合弱まりが遅いまま広がる。これに巻き込まれると大抵の時空船はコントロール不能に陥ってしまう。運が良ければ目的地ではない時代へ飛ばされてしまうが、そうでなければ延々と時空間内を漂流し続けることになる。まあ飛ばされたとしても、TPSの時空救護支援班『タートルエイド』が出動する流れになるので事なきを得ることが多いのだが。

話を戻して、調査続行は危険と判断したアキナの指示に従い、ミハル達は本部へ戻ることに。全体の温度が上昇しているということは、無論放出される余剰エネルギーも多く気流も強くなる。そうなれば機体の耐久性よりも強力になって機体がバラバラになる恐れがあるのだ。

「皆、これ以上の調査は難しいから帰還しろって」

「わかった。エドさん、左翼前方スラスターの出力調整お願いします」  
「了解です」

エドとマツリの操作でラズリフライヤーの前後が逆転し始める。これなら来た道に戻って脱出が可能となる。

だが機体が90度程回転したその時だった。

(ガコン、ギョオオオオオオオツツ!!)

「うおッ!? なになになにな!? 何だ!?!」

「まさか……時空突風か!?!」

突如、何かを叩きつけたような鈍い音と共に機体が小刻みに震え始める。更に操縦室内に赤ランプとアラームが鳴り響き、次々と『ERROR』と表記された投影ディスプレイが立ち上がる。

「大変っス！ エネルギー供給率がどんどん低下してるっス！」  
「アカン！ 機体安定軸が荒ぶつとる！ このままやと腹が上を向くで！」

ジャン達のディスプレイにも異常内容を通知する表示が写し出され、次の瞬間ラズリフライヤーが大きく傾いた。

「ミハル！ 操縦桿を左に回せ！ 軸を平行にするんだ！」  
「りよりよりよ了解っ！ 機体、左へ旋回!!」

ゲオルクの指示に操縦桿を力一杯回す。しかし傾いた機体は早々に戻らず、右へどんどん角度を上げていく。

『どうした!?! ラズリフライヤー応答しろ！ 何があつた!』  
「こつ、こちらラズリフライヤー！ 緊急事態発生！ 現在時空突風に巻き込まれてコントロール不能！ エネルギー供給率が大幅に低下して危険な状態です!!」  
『なんだと…!?! 了解、直ちにラズリフライヤーを自動操縦へ切り替え、システムの応急処置にあたれ!』  
「了解!」

人の力での軌道修正は不可能と判断したアキナは指示を飛ばす。直ぐ様ミハルは自動操縦に切り替え、システムウインドウを立ち上げて修正作業に入った。

「ミハル兄、あたしも手伝う！」

「ウチも手エ貸すぞ〜！」

「サンキュー二人とも！ 残りのメンバーは引き続き機体の軌道修正を頼む!!」

「了解（っス）（です）!!」

そこへハツリとメイランも加わり、それぞれ半数に別れて作業に移る。

「時空間内の全監視カメラでラズリフライヤーを探し出せ！ 発見次第、ターゲットエイドを時空間内へ出動させろ！」

「了解!!」

一方管制室でも、トウキの指示に管制室内や制御室内の職員が慌ただしく動く。監視カメラ全機のモニターを立ち上げて操作し、時空突風に巻き込まれたラズリフライヤーを搜索する。程なくして

『ヤマダ室長、SC287号カメラがラズリフライヤーを発見しました！ モニターを表示します！』

職員の一人がラズリフライヤーを発見し、管制室にそれと関連したカメラのモニターを転送した。そこには時空突風の影響なのか、多少のノイズと共に物凄いスピードで流されるラズリフライヤーの機影が。

「なんてことだ……このスピードではターゲットエイドも二の舞を食らってしまう！」

トウキは投影キーボードを叩いてカフスを起動し、ミハル達に呼び掛ける。

「こちら管制室！ 時空突風の力があまりにも強いため、ターゲットエ

イドの出動が困難！ ラズリフライヤーの発信装置を作動させて万一の墜落に備えろ!!」

『ラズリフライヤー、了解!』

手元の機器のレーダーに青い点が落ちる。これで万が一の墜落にもある程度の対処が可能となった。

「オリムラ司令。時空突風の威力は凄まじく、我々の手ではどうにもなりません!!」

「そんなことはわかっている！ ええい、どうすればこの危機を脱することが出来るんだ……!?!」

タートルエイドの出動不可能となった以上、もうラズリフライヤー自体が何とかするしか道がなくなってしまった。しかも機体自体にも問題が起きており、八方塞がりとは正にこの事だ。

「ジャン、軌道はどうだ!？」

「何とか主軸近くを保つので精一杯っス！」

「駄目か……! こっちも全く進展がない！ これだけの威力は隊に入って始めてだ!!」

「時空間内の熱量のせいかもしれません。放出するエネルギーがあまりにも膨大すぎて、時空突風の威力に拍車をかけているかと……現に数値も見たことない程振り切っています！」

「それじゃあ通常の回避行動じゃ絶対無理じゃないっスかあ!!」

軌道を任された三人は必死に操作して機軸を戻そうとするが、時空突風の力には敵わず全く動いてくれない。そしてシステム修復にあたっていた三人にも問題が発生していた。

「ウソ……! これ不味いよ！ ひよつとしたらケーブルとか機器とか、色々やられちゃってるかもしれない！」

「なんやって!? それならなんぼここで動かしてもどないもならへんよ〜! 八方塞がりや〜!」  
「……………」

ラズリフライヤーに残された道がどんどん断たれてゆく。メンバーが操作する機器もそろそろ限界が近いのか煙が立ち上る。このままドラゴンエマージェンシーは時空間の藻屑となってしまうのだろうか。

その時、あることに気が付いたミハルが一か八かの勝負に出た。

「……………ッ!」

「…? えっ!? ちよ、ちよつとミハル兄! 自動操縦が解除されるじゃない! 何やってんの!!」

「……………これでいい!」

なんと自動操縦を解除したのだ。そのまま操縦桿をしっかりと握り締めると、アキナにある要請を超越す。

「司令…………このままじゃメンバー全員の命が危険です。よって…………他時間への緊急突入を要請します!!」

『なんだと!?!』

「……………」

「き、緊急突入ですって!?!」

一同の動揺を他所にミハルは言葉を繋ぐ。

「システム検証の結果、後方推進スラスターは両方とも破損して使える状態ではありません。ですが前方減速スラスターは両方とも無事でした! この二つのスラスターを最大出力にし、時空間脱出基準速度まで減速して突入すれば!」



「……！　そうか、その手があったか!!」

本来時空間から目的の時間へ向かうには制御管理室が割り出したポイント目掛けて突入するのが一般的である。同じ時間であっても必ずその入口がそこに留まるわけではないからだ。むやみやたらと突っ込めば、どの時間へ行き着くかわからなくなってしまふ。

そのためTPSでは原則として禁止しているわけなのだが、ミハルは一刻も早く脱出することが先決と判断。却下と処罰覚悟で要請したのである。

「でも！　そんなことしたら何処に出るか……!!」

「ヤマダ室長の指示で発信装置はつけてある。だから俺たちの居場所はきつと司令達が見つ付けてくれる筈だ！　司令、許可を!!」

その要請に、アキナの下した決断は……

『……了解。本件事案のみ他時間への緊急突入を許可する。前方減速スラスタを最大出力に設定し、基準速度を保ちながら時空間を脱出せよ！』

「了解！　エド、マツリは前方減速スラスタの出力を最大にまわしてくれ！」

「了解（です）！」

彼女はミハルの決断を信じ、自らの権限を使って他時間への突入を許可。それを受けたエドとマツリが前方減速スラスタを操作して速度を落とした。すると

「あれ、主軸が安定し始めた……」

「減速スラスタの効果で、時空突風の追い風に反し始めたのだろう。この間に出来ることはやっておくぞ。ジャン！」

「了解っス！」

それまで不安定だった機体のバランスが徐々に回復し始めたのだ。ジャンとゲオルクがここぞとばかりに機体両翼を操作して安定させ、ミハルがそれを視認しつつ操縦桿を動かす。

「ミハル君！ スラスタの出力があと少ししか持ちません！」

「一発勝負か……了解。総員シートベルト装着！ 対閃光、対シヨック防御用意！」

全員が素早くシートベルトとゴーグルを装着し、ミハルも足を踏ん張って衝撃に耐える準備を整える。ディスプレイを凝視しながら操縦桿を握る力を強めて突入のタイミングを狙う。ラズリフライヤーとメンバーの命運は彼の手に委ねられた。

「機首を下げつつ……スピードにも注意して……！ 慎重に……慎重に……！」

ミハルの手から滴り落ちる汗は大粒で、いかに緊迫した状態であることが伺える。時空間脱出の突入は訓練でも腐るほど経験済みだ。だがポイント以外へ突入する事は流石になかった。初の試みを自ら勝手出でしまったわけである。緊張のボルテージが振り切るのも無理はない。

「速度……60……50……40……」

エド達も全力でサポートにまわる。そして、運命の時がやってきた。

「30切った！ ミハル兄！」

「ラズリフライヤー、脱出ツ!!」

おもいつきり操縦悍を一気に引き、時空間の壁へ突入した。

☆☆☆

(ミハル…！ マツリ…！ 皆、帰ってこい……！)

緊急突入したラズリフライヤーからの通信を待ち望む管制室の職員達。中央制御管理室が重苦しい空気に包まれており、アキナとトウキは集中してカフスに耳を澄ます。カフスからは未だにノイズ音しか流れない。

するとピピツという音と共にノイズ音が収まった。この時誰もが、ドラゴンエマージェンシーの無事な声を聞けると喜んだ。

だがカフスから響いたのは…

『(ガシヤアアアアンツ、ドガガガガガツ———プツ)』  
「！！！！！！」

何かにぶつかって座礁する音と、通信が切れた音だった。

中央制御管理室内が、絶望と最悪の事態に静まり返る。

「……………ああ…」

「！ オ、オリムラ司令！ 気を確認に！」

アキナが脳裏に過ったものに体を崩され、慌ててトウキが彼女を介抱する。

「だ、大丈夫…軽くめまいを起こしただけだから……」  
「司令……おい誰か！ オリムラ司令を医務室へお連れしろ！」

二人の職員がアキナの両肩を持ち、医務室へと向かう。残されたトウキは砂嵐が流れるモニターの前に立って、心配そうな面持ちで咳く。

「……皆、死ぬなよ」

モニター越しに、トウキの願いは届くのだろうか。

---

【次回予告】

---

おい、次はうちの出番か。

(大丈夫かな……)

(信じるしかないっスね……もう)

今回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は、緊急突入した先での新たなトラブルが起きるみたいやで。さらにミハミハがとんでもない目に遭うみたいや、大変やね。

(まともっスけど、棒読み感がひどいっスね……)

次回、File. 05『100年前の過去へ』。

それにしても更新頻度がまばらやの。作者はやる気あるんかいな。

(最後の最後でメタい突っ込み!?)

File. 05 《100年前の過去へ》

(カツ、ギョオオオオンツ！)

「よしやった！ 時空間脱出成功だ！」

一方、ラズリフライヤーにて。

ミハルの咄嗟の機転によって見事時空突風から脱することが出来た一同。彼等が辿り着いた先はどこかの時代の海上であった。

「や……やったっス……！ 助かったんスよね!? 自分達！」

「まだそうとは言い切れへんで〜? 既にラズリフライヤーは満身創痍やし、ここがどこかもわからへん」

「タイムカウンターには……2046年とあります。おそらく僕らの時代から100年前の時代にやって来たようですね。あくまで時空突風によってタイムカウンターが破損していなければの話ですが……」

エドの判断を裏づけるように、水平線上の向こうにはうっすらとビル郡が確認できる。比較的近代に近い世界へ辿り着いたようだ。

「2046年っていうと……確か世界で初めてISを起動した男性、織斑一夏さんが世間に知られた年ですよね？」

「ああ。つまり俺達は第二の激動の時代に足を踏み入れたという訳だ」

この場にはかつて世界に大きな影響をもたらした人物——織斑一夏と、その影響を受けた同期の子孫がいる。彼等からしてみれば、この2046年という時代は色んな意味で特別な環境なのであろう。

とりあえず危機的状況が去ったことにほっとする一同。……だが

(ピーッ！ ピーッ！ ピーッ！)

また一難訪れた。

「！ おい、今度はなんだ!?!」

「大変！ もう燃料がない！ システムも低下傾向です!」

「さっきの時空間脱出に燃料を大量に使っちゃまったのか……皆、もう一踏ん張りだ!」

「「了解 (ツス) (です) (やで) !」」」

今度はラズリフライヤーの燃料が底をつきそうになり、コックピット内に警告を示すアラームが鳴り響く。システムにも再び不具合が起き始め、一同は操縦モニターに向き合って対処し始める。しかし思うように回復せず、ゲオルクが打開策を出した。

「ミハル、もう機体が限界だ！ やむを得ないが近くにある広い場所を探してそこに緊急着陸しよう!」

「了解！ そこまで持ちこたえてくれよおツ!」

ゲオルクの提案を採択し、緊急着陸を執行することに。

ミハルが操縦桿を握り締めてコントロールする中、エドは素早くレーダーで探知を開始し、程無くして着陸できるポイントを告げた。

「ミハル君！ 前方2キロ先に着陸可能な施設があります。ミラー ジュスキンを展開しますので、そこへ向かいます!」

「了解!」

言うが早いか、エドはラズリフライヤーの周囲に不可視効果があるミラージュスキンを展開し、ミハルは高度を下げつつ直線を維持し続ける。やがてラズリフライヤーの前方に海上に建つ人工島が見えてきた。幸いなことにエドの調べた着陸可能と判断したスタジアムの前には余計な遮蔽物がない。条件は十分満たしている。

「ジャン君、ペダルを十度踏んでバランスをとって下さい」

「了解っス！」

「ラズリフライヤー、着陸地点との距離700メートル。ストレートインします！」

慎重かつ強く操縦桿を引き、着陸へ入る。このままの状態を維持できれば多少の損傷だけで回避できる。無傷は無理なら大惨事のみは避けなくてはならない。

しかし、それは突然の事だった。

(バキンッ)

「…? な、何だ? 今の…?!? ゲツ、コントロールが効かない!!」

「何やて!?!」

突如としてラズリフライヤーが右へ大きく回転し始め、そのままスタジアムの地面へ急接近してゆく。直後機首から地面に接触、それを皮切りに機体底面と右翼が叩きつけられ損壊。勢いに乗って200メートル程進んで漸く停止した。

(ガシヤアアアアアッ、ドガガガガガッ)

「「うわああああああっっ!!」」

「「キヤアアアアッ!!」」

「ガッ…ウっ…」

コックピット内にも強い衝撃が襲い、一同は各々何か掴まって衝撃に耐える。そして止まったことを確認し、エドがゆっくりと起き上がった。

「くっ…う、うう…皆さん、大丈夫ですか…?」

「何…とか」

「いっつえー…結局墜落しちゃったつスね…」

彼の呼び掛けに一人、また一人と起き上がる。それぞれ打ち身したところを押さえているところから、先程の衝撃の強さが伺える。エドもまた手や顔に擦り傷や打撲を負っており、痛々しく流血していた。だがメイランがあることに気付く。

「…！ あれーっ、ミハミハは!? おらんで！」

「「ええっ!?!」」

なんと、中央の操縦を担当していたミハルがいないのである。もしや衝撃に打ち負けて外に放り出されたのであろうか。慌てて周囲を確認してみると

「！ ミハル!!」

ゲオルクがいきなり操縦席を飛び越えて機首方向へ駆け出した。全員もその方へ視線を向けると、駆け出した合点がいった。

「「ミハル（兄）（君）（ミハミハ）（ミハっち）!!」」

何かがぶつかって蜘蛛の巣状にヒビが入った窓。その下にはゲオルクによって介抱されるぐったりとした姿のミハルが。窓についた血痕具合から察するに、衝撃に耐えきれず吹っ飛ばされ、コックピットの正面窓に頭から激突したらしい。

「ミハル兄！ ミハル兄！ しっかりして！」

「案ずるな！ 流血しているものの軽い脳震盪だけで命に別状はない。すぐに手当てしよう！」

「わかったツス！」



一命はとり留めているようだが念のためすぐに応急処置を施した方が良いと判断。ゲオルクの判断で自分たちの怪我よりも先にミハルの処置へ専念することに。

だがジャンが救急キットを持って戻ろうとしたその時だった。

「！ 皆、外にISがいるツス！」

「何!？」

驚いた五人が外を見ると、機械の翼と手足を持った女性らしき人影が数名見えた。左右をチラチラと見ていることから、恐らくラズリフライヤーの周囲を取り囲むように集結していると思われる。

「レーダーには……計10機。いずれも旧式量産機の打鉄とラフアー  
ル・リヴアイブです」

「旧式ツスか……それなら万が一やりあつたとしても勝算はこっちが  
高そうツスね。ある程度善戦できそうツス」

「いや、そうとも限らんぞ。もしここがISの重要拠点であるならば、  
警護用の厄介な兵器やら専用機がないとも言い切れん。ましてや今  
俺達は怪我をしている。まともに戦えるかどうかも怪しい。……現  
にミハルは気絶して戦えるどころではない」

ともかく包囲されている上に負傷している現状では勝算が低い。  
そんな状況の中、エドはリーダーとして決断を下した。

「エドやん……どないするん?」

「…わかりました。チャンネルが合うかどうかはわかりませんが、  
オープンチャンネルで包囲している人達の誰かに交渉を持ち掛けて  
みます」

一か八か、エドはこの時代の人間と対話を試みる手段に出た。左手のブレスレットに手をかざすと、中央のクリスタル部を白く点滅しはじめる。次にイヤークラスへ手をやり、落ち着いた口調で呼び掛けた。

「こちらラズリフライヤー、応答願います。我々の話を聞いてください」

暫く呼び掛けていると、小さなノイズ音とともに女性の声が返ってきた。

『こちら、IS学園の山田真耶です。そちらの所属国とあなたの氏名、現在の状況を教えて下さい』

「(IS学園：かつて駆け出した頃のIS専門の教育機関でしたね。)わかりました。国というより所属先になりますが、私は時間保護組織『TPS』のドラゴンエマージェンシー・チームリーダー、エドワード・オルコットと申します。我々の操縦する機体が故障し、このスタジアムに墜落してしまいました。尚墜落の際にクルーの数名が負傷し、内一名が頭部を強く打って重傷です」

通じるかどうか怪しいものの、とりあえず言われた通りの事柄と現状を述べるエド。反応を待っていると、先程と同じ女性の声で返事が来た。

『……わかりました。事情はともかく、まずは怪我の治療が最優先なので機体の出入口を開けてください』

受け入れを承認するともとれる内容に、エドは近くの操作パネルへ移動。ラズリフライヤーのハッチを開けた。

「こちらラズリフライヤー。正面向かって左側のハッチを開きまし

た。入って右手側の通路を進めばコックピットになります。そこに我々はいます」

『わかりました。すぐに向かいますので、出来るだけ無理をなさらず安静にしてください』

何とかファーストコンタクトがうまくいったことをメンバーに伝え、ゆっくりその場に座るエド。その間マツリとゲオルクがミハルの応急処置を施していたが、依然として目を覚ます気配はない。

程なくしてコックピットの開閉口が開かれ、ISスーツ姿の女性が数名入ってきた。彼女らはミハル達の姿を視認すると足早に駆け寄る。

「皆さんはこれで全員ですか？ 怪我の方は大丈夫ですか？」

「ええ……大した怪我はしていません。それよりも彼をお願いします」

「わかりました。では怪我の治療を行いますのでこちらへどうぞ」

目を覚まさないミハルは担架で、エド達は女性達に肩を貸してもらいながら機体の外へと脱出。

「うっひゃあ、完全に大破しちゃってるツスね……ラズリフライヤー」

無惨な姿で地に突き刺さるラズリフライヤーを見て、ジャンは悲しそうな声で呟いた。

「一つ尋ねるが、墜落した機体はどうするおつもりで？」

「一応学園の方で回収して、後々に精密な検査にまわされるかと……」

「そうですか……」

調べられると困ることでもあるのか、と問いただされそうな質問をするゲオルク。しかし実際その通りである。

ミハル達の住む2146年の世界とISが浸透して間もない20

46年の世界とでは、当然の事ながら使われている技術は全く違う。万一この時代の人間が未来の技術を会得しようものなら、たちまち歴史が変わって未来に悪影響を及ぼしてしまう。しかし技術がそれほど発達していなければ、仕組みを解析できず、真似できないのではないかと思われるだろう。

だが忘れてはいけない。この世界に大抵の不可能を可能に変えてしまう天災の存在を……

(いかん……ラズリフライヤーを解析されれば、当然そのデータが保有される。何かの弾みで漏洩しようものなら、他国が秘密裏に開発する恐れがある。ましてや……あの篠ノ之束博士の目に留まれば取り返しのつかない事になる！ それだけは何としてでも避けなくては……！)

そう、ISの生みの親である篠ノ之束の存在である。彼女の桁違いな技術力を持つてすれば、いくらでも再現や複製など容易な話。万が一そうなった場合、最悪の事態は免れない。

(……治療が終わったら掛け合ってみよう。でなければ……未来を守る事ができない！)

身近に迫る危機をいち早く感じ取ったゲオルクは、一人静かに強い決意を固めるのだった。

---

【次回予告】

---

……む？ 次は俺か。わかった……んんっ、

いよう皆！ セルティの敵は僕の敵、でお馴染みのおっ……森久○  
○太郎でえす！

なんと、ここで皆にアイムエンタープライズ・ゲストのご案内！

(ジャン：無言で近寄る)

(ジャンを手で指して) アイム・エンタープライズ！

(ジャン：無言でピースサイン↓ちよつとした注意)

…森久〇さんでいいからちゃんと、ね。うんうん……

なんとなんと！ 国民的人気俳優・羽島……森久〇〇太郎が！

(ゲオルク君でしょそれは…)

わかんなくなるね、うん。……なら普通にやるか。

((最初からやって!!))

えー次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は、視点を  
変えてIS学園側からの第5話の繰り返しとちよつとお送りする  
そうです。あー喉痛エ。

(物真似するからでしょうが……)

次回、File. 06 『招かれざる未来人』。

!! (グッ！  
それでは読者諸君。時が戻ったらkissして、good-bye

(それは歌の文句です…)

(もう突っ込みきれないツス……)

## File. 06 《招かれざる未来人》

2046年3月25日——日本。

従来の兵器を超越するマルチフォームスーツ・インフィニットストラトスが世に出されてから丸十年が経とうとしていた。未だ混乱や対立、偏見が根強く残るこのご時世の中、日本の首都湾岸に建設された人工島「IS学園」では4月に向けて教師陣が桜前線と並ぶ勢いの奔走ぶりを見せていた。

IS学園は日本政府が設立した未来のISパイロットを養成する国家機関であり、毎年他国からの代表候補生達が育成の為にこの学園に集う。無論彼女らだけでなく厳しい試験をクリアした粒揃いの一般生徒も在籍しており、卒業後には多くの生徒達が名だたるIS関連企業に就職した、ISの研究所へ就くことになった等の報告が多数寄せられている。

そんな世界で唯一の学園もやはりこの時期は多忙そのものだった。今年の入学予定の一般生徒や代表候補生達の書類作成やIS適正数値の統計等々、やらくてはならない仕事に教師陣は悪戦苦闘を強いられていたのである。

「ふう……粗方片付いたか」

それまで溜まっていた書類の山に勝利し、スーツ姿の女性はデスクワークで固まった関節を解す。隣の眼鏡をかけた女性も数枚の書類はあるものの、あとは簡単なものだけらしく隣の彼女に話しかける。

「この時期の書類は多いですからねえ。デスクワークばかりで体が鈍ってしまいます」

「そうだな……鈍ってしまっただけはいかな。どうだ？ 山田君、久々に手合わせしてみるの……」

「アハハ……それはご遠慮させていただきます」

悪戯な笑みを浮かべて眼鏡の女性をからかうスーツ姿の彼女。

名は織斑千冬。今や知らぬ人間なぞいない、元 I S 日本代表にして『世界最強』の名を持つ I S 操縦者のエキスパートである。現在は一線を退き、未来ある若き I S パイロット達の育成に励んでいる。最も空から机へと戦場を移したものの、やはり強敵と苦戦することに変わりはない様子で相当体は固まっているらしい。

「それにしても、今年は例年に比べて入学生が多いですね」

「ああ。実力で押し上がって来た者から様々な伝やコネで入ってきた者までな。無論、一切手を抜く気は毛頭ない。入ってきた以上は徹底的に叩き込んでやるつもりだ」

「手厳しいですねえ」

「むしろ当たり前のことでは？ 今の世の中をみる限り、” しようもない考え方” に囚われている者がちらほらいる。若い内からある程度の良識を教えていかなければ、この世界では生きていくことは出来ないと思いますけどね」

千冬はそう言つてマグカップの冷めたコーヒーに口をつけた。

彼女のいう” しようもない考え方” 。それは恐らく女尊男卑主義のことを指していた。要は「女は偉く、男は下等である」という理念であり、そのきつかけとなる I S の普及から広がり始めた考え方の一種だ。

街をちよつと歩けば、男性にあらぬ因縁を吹っ掛けては金を巻き上げる女性がすぐ目に入る。可哀想だなど思つても助けることが難しい。

悲しい事にこの考え方によつて人生を狂わされた男性も多い。それ故ただでさえあやふやだった男女関係が一層拗れる結果に。悪循環とはまさにこの事である。

千冬はそんな世の中を悲観し、とある理由から少しでも世の中を変えるために教師へと転身したのである。その理由については……

また追々話すでしょう。

デスクワーク後の何気ない談笑を交わす二人。だがその至福に割って入るかのように警報とアナウンスが轟いた。

(ビーツ！ ビーツ！)

「！」

『全教員に告ぐ！ 学園南部の海上から接近する不審航空機を確認。教員部隊は直ちにISを展開して迎撃にむかえ！ 繰り返す……！』

そのアナウンスを耳にした途端、千冬と真耶の目付きがガラリと変わった。それは教員室にいた全ての教員も同じ目付きとなり、次々と立ち上がったかと思えば、千冬の方へ目を向ける。

「…織斑先生」

「ああ、わかっている」

千冬も立ち上がり、彼女の方へ向いている教員達に指示を出した。

「各自、ISを展開して私に続け！ 行くぞ！」

「！！了解！！！！」

千冬や真耶をはじめとした他の教員達は一斉に教員室を飛び出し、一階上にある教員専用の緊急カタパルトへ向かう。それぞれ量産型IS『打鉄』や『ラファール・リヴァイブ』を装着し、次々と展開して出撃した。

警報アナウンスが指定した現場へ急行するまで時間は掛からない。しかし現場に駆けつけた一同は、首を傾げていた。

「おかしいな……アナウンスが正しければ、不審な航空機はこの辺り



で確認されたはずだが……」

「何もいけませんね。誤報でしょうか？」

そこには航空機はおろか、鳥一羽すら飛んでいなかったのだ。無論あのアナウンスが訓練の可能性はある。しかしその場合は訓練であることが最初に流れる筈である。それが無いということは、本当に不審な航空機が学園へ向かってきたことになる。

「！ 織斑先生、どうやら例の航空機は私達が駆けつけるちよつと前に姿を消したそうです。どうやらレーダーにも映っていないらしくて……」

「消えただと？ どういう事だ？」

「わかりません。今搜索している最中で、詳しい事は……」

そこまで真耶が言いかけたその時だった。

(ガシヤアアアアンツ、ドガガガガガツ)

「！！！！！！」

突如背後から、何かが地面に叩きつけられたような轟音が轟く。それに驚いた全員が一斉に振り返ると、なんと第二アリーナから煙が上がっていた。

「今度はなんだ!?!」

「織斑先生！ 例の航空機が、今度は第二アリーナに墜落しているそうです！」

「何!?! 総員、すぐに向かうぞ！」

「！！！！了解！！！！」

他の教員からの連絡で探していた航空機が第二アリーナに墜落しているという。真耶からそれを聞いた千冬達は今度はアリーナへ急

行する。

「あれか。例の航空機は」

「飛行機……なんでしょうか？ あれは……」

アリーナの地面を直線に抉り、中央で止まっている無惨な姿の航空機。周囲には翼の残骸などが散乱しており、破損具合から見て右翼から墜落したと思われる。

しかしこの航空機を見た一同は違和感を感じていた。というのも別に飛べない形状ではないのだが、墜落している航空機が特撮ものによく登場する防衛チームのマシンに酷似していたからだった。

「……タツ○ファル○ンか？」

「いや、どちらかというスカ○ハ○ヤーでは？」

「そういう問題ですか……？」

自分の弟が見ていたこともあつて既視感でもあつたのだろうか。しれっと天然ボケをかました千冬だったが、気を取り直して打鉄の武装である近接ブレードを展開。他の教員達も各々の武装をかまえ、慎重に航空機を取り囲む。

コックピットらしき方へ回り込んでみると、窓際に集まる数名の人影を見つけた。なにやら慌てた様子でいるようだが、その内容まではわからない。少なくともこちらの存在には気付いていないようだ。

「各自、警戒を怠らないよう注意せよ」

本来であれば呼び掛けてどこの所属か聞き出すのが常なのだが、それは相手が不審なISであった場合のみ。今回は航空機のため、コンタクトを取ろうにもどうにも出来ないのだ。

暫くして航空機側に変化が見られた。一人が窓に向かって指を指し、それにつられた残りの人間が漸く千冬達の存在に気がついたので

ある。

「こちらに気が付きましたね」

「ああ。だが油断するなよ。いくら墜落して怪我をしているとはいえ、攻撃してこない補償はないからな」

こちらに何度も視線を送っては話し合いを続ける彼ら。するとリーダーらしきブロンドヘアの少年が耳に手をかざして窓の前に立った。次の瞬間

『……ら、ラズ……れの…話を…さい』

「！ これは……まさかあの少年からの通信？」

「…のようだな。しかし、何故ISのシステムを彼が……」

ISは男性には扱うことが不可能。それは女尊男卑主義が広まった要因の一つであるが、目の前の少年は紛れもなくISが持つシステム・オープンチャンネルを使っている。一体どうしたことなのだろうか。

だがその謎は後回しだ。通信手段がわかった以上いつも通りの呼び掛けができる。真耶は代表して通信の鮮明化と対応を引き受け、少年の正面へ回った。

『こちらラズリフライヤー、応答願います。我々の話を聞いてください。こちら……』

「……こちら、IS学園の山田真耶です。そちらの所属国とあなたの氏名、現在の状況を教えて下さい」

『わかりました。国というより所属先になりますが、私は時間保護組織『TPS』のドラゴンエマーゼンシー・チームリーダー、エドワード・オルコットと申します。我々の操縦する機体が故障し、このスタジアムに墜落してしまいました。尚墜落の際にクルーの数名が負傷し、内一名が頭部を強く打って重傷です』

通信相手の少年：エドワード・オルコットと名乗る少年は真耶の呼び掛けにそう返す。だがそのやり取りを聞いていた千冬達は一様に疑問符を浮かべていた。彼が所属するという時間保護組織『TPS』など、彼女らが知る限りでは耳にしたことがないからだ。気になった一人が検索をかけてみたものの、該当するものはやはりない。

しかし墜落の衝撃で怪我人が出ているのは事実のようだ。現にエドワードの顔にはその時に負った傷がついており、しかも彼の話から重傷者もいるという。千冬は彼らの救出を最優先にすることを決定。その意を伝えるよう真耶へ指示した。

「山田君、事情は後回しだ。先に怪我人を救助する意を伝えてくれ」

「はい。……わかりました。事情はともかく、まずは怪我の治療が最優先なので、機体の出入口を開けてください」

『了解しました』

その返信で一旦通信が終わり、内容を聞いていた一同は武装を解除。一部の者が担架を用意しに一時帰還して再び入り口らしきところへまわる。暫くして油圧音と共に扉がせり出し、ガルウイング状に開いた。

「こちらラズリフライヤー。正面向かって左側のハッチを開きました。入って右手側の通路を進めばコックピットになります。そこに我々はいます」

『わかりました。すぐに向かいますので、出来るだけ無理をなさらず安静にしてください』

千冬の指示で待機していた教員達が機体内へ進入。一方の千冬らは管制室の教員達と連絡を取り合い、機体を回収する話し合いを行う。というもこの機体、意外にも大きくてISの力だけでは運びきれないからだった。

とりあえず重機の搬入を待つということで、機体は現状を維持するとのことで話し合いはすぐに解決した。

▽△▽△▽△▽

「すみません、ありがとうございました」

「いえいえ、お気になさらず。今のところ打撲や擦り傷等の軽傷だけです、出来るだけ無理はなさらないで下さい」

墜落した航空機から救助された乗組員は全員で六名。いずれも歳が15〜18程の少年少女達だった。六名とも医務室へ搬送されて治療を受けており、手当てを受けて丁寧に敬礼を述べるその姿から少なくとも今の風潮に当てられた人間ではないようだ。

一方頭部を強打したという少年はベッドに寝かされ、目を覚ます気配はない。

「……………」

「マツリン、ミハミハなら大丈夫やで。きっと忘れた頃に目覚まして復帰してくる筈や。それにマツリンが手当てしたんやから問題ないで」

「……………ありがとうございます、メイランさん」

今にも泣き出しそうな表情で横たわる少年を見つめる少女を、のほんとした少女が頭を撫でて心配ないと慰めている。他のメンバーも神妙な面持ちで目を向ける。

そんな中の様子を、廊下から千冬はじっと眺めていた。

「……………」

「織斑先生、どうかなされましたか？」

「……………いや、あの寝ている少年がどうもうちのバカに瓜二つだなど思っていますね」

「ひよつとして、織斑一夏君のことですか？」

「ええ。何故か彼の顔を一目見た時にすぐに脳裏に浮かんだんですよ、あのバカの顔が。ただのそっくりならそこまで感じませんが……」

自分でもこんな感覚に苛まれるのは初めてだ、と彼女は付け加える。

墜落した航空機を手早く回収し、その調査やアリーナの整備を押し付けていち早くここへ駆けつけた千冬。その目的は彼らが何者であるかを探る為であった。

というのも担架で搬送される重傷の少年が、彼女の九歳年下の弟・織斑一夏によく似ていたからである。無論この世には似た顔立ちの人間なんてごまんといる。しかし千冬はそれだけでは説明の仕様がなないシンパシーを感じていた。そのため最低限の命令を下した後、現在に至るのである。

「しかしこれからどうします？　彼らは一応部外者ですし、放っておくわけにも……」

「ああ、放っておくつもりはない。一人はまだ目を覚まさないが、あとの五人からなら話を聞き出せる。……行くぞ、山田君」

「えっ!?　あ、はいー」

聞き耳を立てることに痺れを切らしたのか、遂に医務室へ突撃することになった。いきなりの行動に戸惑いながらも真耶も続く形で千冬はドアを開けた。

(ガラッ)

「失礼するぞ」

「「「「ー」」」」

突然の訪問者に揃って戸口に目を向けた乗組員達だったが、次の瞬

間各々が目を見開いた。

大方、世界最強の名を持つ自分がここに驚いていることに驚いているのだろう。そう彼女は思っていたのだが……

「貴女は……と、”東方不敗”のっ！」

「「そっち（かい）（ですか）（っすか）！」」

相手はその斜め45度上を行く予想をしていた。

「ん？ どうした？」

「ゲ、ゲオルク先輩。東方不敗も最強の称号っすけど、それを言うなら世界最強っす」

「あれ…？ 俺テンパってマス〇ーア〇アの通り名の方言っちゃった？」

「ええ、思いつきり……」

「緊張の糸切れましたよ、全く……」

何の話かはさっぱり不明だが、いずれにせよ彼らが驚いていることに間違いはない。軽く嘆息した千冬は一步彼らに近づき、話を切り出した。

「その様子なら、怪我の方は問題なさそうだな。私は織斑千冬。こちらら後輩の山田真耶だ」

「山田真耶です。よろしくお願いします」

「早速事情聴取を……と思っていたのだが、まだこちらもやらなくてはならない仕事や作業が山積みだ。なので君達を別室に待機することにした。こちらの作業が終了次第、事情聴取を執り行うつもりだ。それまでもう暫く待機してもらおうが、構わないか？」

「ええ、構いません」

他の仲間に顔を向けて反応を見るエドワード。それを見て他のメンバーはそれぞれ了承の頷きを見せる。

すると、一番千冬に近い席に座っていた銀髪の乗組員が口を開いた。

「織斑千冬さん。一つだけよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「我々が乗ってきたあの機体の事なんですが、詳しく調査するのは、我々の事情聴取を行ってから検討して頂けないでしょうか」

その言葉に二人は疑問符を頭に浮かべる。

「? どういう意味だ？」

「……率直に申し上げれば、”機体を調べられるのはこちらとしても不味い”んですよ」

「ほう」

「詳しい事は事情聴取の際に必ずお話しします。これは我々だけではない、あなた方にも関わる重大な事柄なのです。どうか調査の方だけは待つていただきたい」

「……………」

普通に聞く限り、こちらに知られてはならないことが彼らにはあるととれる。だがあからさまな隠蔽ではなく、きちんとした根拠とその説明をすると彼は話している。その目や様子から嘘は見受けられない。

一拍置いて、千冬はその要求を飲んだ。

「……わかった。機体の調査は一時中止するよう手配しておく。その代わり事情調査ではきちんと理由を話してもらおうぞ」

「恐れ入ります」



銀髪の少年は頭を下げて礼を述べた。

「山田君、調査担当の教員達に調査は待機するよう連絡してくれ」  
「わかりました。すぐに伝えてきます」  
「それから君達は別室の方へ移動してもらおう。ついてきてくれ」

千冬は乗組員達に立ち上がるよう促し、別室へと案内するため医務室を退室。真耶も調査の停止指示を伝えるべく部屋を出て、医務室には医務担当の教員と眠る少年だけが残された。

---

【次回予告】

---

とりあえず自分で一通り一巡したって事っすかね。それじゃあ張り切って、自分が次回予告していくっす！

(少し思っただけけど、ジャンって英語得意だったっけ？ STRA TOSPHEREってちゃんと言えるのかな？)

(いや、確か苦手だったはずだぞ。『great』を”グリート”つつってたから……)

(真の覚悟はここからだあ〜?)

ハイ、そこ喧しいっす。あとメイラン先輩それは拳銃使いっす。……次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は、ミハつちと千冬さん達を中心に話が進んでいくそうっす。つー事は次回自分たちは一回休みっすか。まーた結構な期間空きそうっすね〜。

次回、File. 07 『スプリング アンド ウィンター』。

(因みに”訪れる”という意味の『visit』を”ビスタ”と読んだこともあるらしい)

(。パスパスパス!!)

それも拳銃使いつス！ 寄ってたかって自分の英語をいじらない  
でくれっス！！

File. 07 《スプリング アンド ウィンター》

「ん……ぐっ、ううう……」

マツリ達が部屋を退室してからおよそ数十分後。苦悶の表情を浮かべながら、ようやくミハルは目を覚ました。

「？ ……あれ？ 俺は…確かラズリフライヤーを操縦してて……！  
そうだ思い出した!!」

断片的な記憶を頼りに何があつたのか痛む頭で考えること一分。やっと墜落した事を思い出して飛び起きた。が、打ち身した箇所や後頭部がすぐに悲鳴をあげて悶絶。今度は痛まないようゆっくり身体をベッドに腰掛けさせてから冷静に記憶を整理し始める。

「ラズリフライヤーが制御不能に陥って……そしたら変な音がして、  
気を取られて踏ん張るのを忘れて……吹っ飛ばされたんだっけ、俺  
……」

微かにフラッシュバックするその時の光景。自分自身どのくらい意識を失っていたかは定かではないが、辺りをぐるりと見回してハッと気付いた。

「つーかどこだここ……？ なんか学校の保健室みたいな所だけど  
……って、そういや皆がいねえ!? おーいどこだーっ!」

同じくラズリフライヤーに搭乗していたメンバーがいらないことに動揺するミハル。もう痛みに慣れたのか、医務室内を大慌てで探し始めた。しかし当の本人達は既に退室している事など彼が知る由もなく、ベッドの下やら窓の外、果ては引き出しや戸棚の中を探し出す始

末。いくらなんでもそんな所には隠れてはいないと思うのだが。

暫く探してここにはいないと判断したミハルは(遅えよ)、今度は別の場所を探そうと医務室らしき場所を出ようとした。

と、その時、

(ガラツ)

「わッ!？」

「きやつ!？」

ミハルが開けたのとほぼ同時にドアが開き、緑髪のショートヘアーに眼鏡の女性と鉢合わせに。女性はいきなり眼前に現れた少年に驚き、対する彼は開けた先にあつたW斬〇に思わず仰け反つた。

「びっくりしたく……うわデツケエ……」

「び、びっくりしたのはこちらの台詞ですよ……というか目が覚めたんですね! 急に動いて大丈夫なんですか?」

「へっ? あっ、あああだだっ、大丈夫っすよ!?! もう慣れちゃつたんでナハハハッ!」

やましい視線を悟られまいと、ミハルは即座に起き上がって笑い飛ばす。そしてふと当初の目的を思い返し、目の前の女性——山田真耶にマツリ達の所在を尋ねた。すると

「あ、そういうえ俺の他にも五人くらいメンバーがいたと思うんですけど、どこにいるか知りませんか?」

「ああ、その方達なら——」

「大した怪我は追っていないかった為、応急処置を施した後に別室で待機してもらっている。ついでお前達が乗っていた機体はそちらの希望で手をつけていない。調べられたらマズイらしいからな」

真耶の言葉をつなぐように聞こえてきた、凜とした第三者の声。そ

の方へ顔を向けると黒スーツを着こなした別の女性が佇んでいた。黒真珠の如き瞳で固まるミハルを見つめる彼女は嘆息し、呆れた様子で部屋のドアに寄りかかる。

「しかしまあ、普通なら重傷だというのによく動けるな。よほど頑丈な体質と見える。お前のメンバーが大丈夫だと言っていた理由が何となく理解できた」

腕を組んで、その細い切れ長の相貌はミハルを捉えて逃さない。そしてミハルの方は蛇に睨まれたカエルの如く硬直し、まるで未知と遭遇でもしたかのような引きつった表情をしている。異様に感じた真耶が恐る恐る声をかけた……次の瞬間

「あ……あの？　どうかなさいました？」

「……………」

「うっ？」

「うわああああああああっっっ!?　ぶ、ブリュンヒルデエエー

——  
ツツ!？」

「ツツ!？」

突如ミハルがこれでもかと言わんばかりの音量でソニックブームを引き起こした。いきなりの大音響に千冬は思わず耳を塞ぎ、反応出来なかった真耶は目を回してその場にへたり込む。

一方音源のミハルはというと、その場から数歩程引き下がってわなわなと身体を震わせて千冬を凝視する。

「そんなじゃ……………ここはIS学園なのか!?　世界初のIS教育機関の!？」

マジで!?!」

「……そうだが、少し落ち着け」

先程から声といい仕草といい、喧し過ぎるミハルに終始呆れる千冬。

「やっぱりラズリフライヤーのタイムカウンターぶっ壊れてなかったんだ! スゲエスゲエ! 織斑一夏がIS動かした時代にやって来たんだ!!」

「……ちよつと待て。なぜお前が私の弟の名を知っている? それに一夏がISを動かしたとはどういう事だ?」

「えっ?……あー!」

興奮気味になっていたせいか、ミハルは思わず口を滑らせてしまった。その痛恨のミスに気付いて口を塞ぐが、時既に遅し。千冬は物凄い形相のままツカツカとミハルに歩み寄り、これでもかと言わんばかりの鋭い視線をぶつける。

「それに交渉した金髪の少年も『TPS』とかいう組織の名前を口にしていた。言っておくがこの日本や世界にそんな組織はない。加えてお前達が乗ってきたあの機体。飛行機にしては飛ぶために必要なエンジンやら尾翼が見つからない。そんな機体をまだ年端もいかない少女が操縦していたのか。不可解な事だらけで意味がわからない」

「え、あ……いやー、その……」

「お前は、いやお前達は……一体何者なんだ?」

ちゃんとミハルも説明する気はある。したいが誰だつてメンチ切られた状態でまともに話なんぞできやしない。この環境下で説明できたらそれこそ英雄ものである。

どうしようかとミハルが思考を巡らせていると

「……………ん？」

ふと耳に違和感を覚えた。触ってみるとつけていたはずの通信イヤークラスがなくなっていた。もしやと思い、手首を確認するとカフスと同じくらい大切なブレスレット…テクノブレスもない。話の腰を折る覚悟でミハルは恐る恐る千冬に尋ねた。

「そ…その、前にブレスレットとか…イヤークラスって知りませんか？  
一応それがないと困りますというか…それがないと説明できないんですけど……」

「チツ……お前が寝ていたベッドの枕元に外して置いてある。手当する際に邪魔だったからな」

千冬の気迫に気圧されながらも、ミハルは教えられたベッドの枕元へ向かい、カフスとテクノブレスを身につけて戻ってきた。

「…それで？ そのカフスとブレスレットは本当に説明に必要なのか？ お前の仲間達も共通して身につけていたようだが」

「まあ一応、自分達の通信機器つてところですかね。中には色々大事なデータとかが入ってるんで、そう簡単には解析できないような作りになってます」

「ほう……」

墜落した衝撃で壊れてなければいいですけどねと、カフス进行操作して管制室とチャンネルを合わせる。事情を説明するには自分たちの上司であるアキナの判断を仰ぐてはならないのと、メンバーや自分の無事を伝える必要があるからだ。最後の通信からどのくらい時間が経ったかは不明だが、とにかく今は連絡をとるしか方法がない。

ひとまず合わせたチャンネルに発信をかけて返答を待っていると

……

『——こちら管制室！ ミハル！ ミハルなのか!?!』

通信に応じたのは慌てた様子のトウキだった。

「こちらミハル！ 時空間からの脱出には成功しましたが、ラズリフライヤーが墜落し大破。現在そちらに帰還するのが困難な状況です！」

『他のメンバーの安否は!?!』

「救出してくれたIS学園の教職員の話によると、自分を除いたメンバーは軽傷で無事。自分は墜落の際に気絶したみたいで、現在他のメンバーとは別行動です」

『IS学園…だと？ ——了解、今からラズリフライヤーの発信ポイントを検索する！ 折り返し連絡をかける為、暫く待機せよ！』  
「了解！」

トウキとの連絡の最中、その後ろからは安堵する声や歓声が微かに聞こえてきた。心配をかけて申し訳ない気分になるも、ミハルは一旦千冬たちに向き直って現状を報告する。

「今、上層部が情報やら何やら整理しているみたいなので、もう少し待ってて下さい」  
「わかった」

しばらく経って管制室から連絡が入った。

『——こちら管制室！ ラズリフライヤーの発信信号をキャッチ。ポイントは西暦2046年、JSE—069の公立IS学園で間違いないな?!』

「……はい、間違いありません。あ、それとなんですけどIS学園の教職員が事情説明を要求してまして、至急オリムラ司令と回線を繋いでほしいんですが」



ミハルがそう要請すると、トウキが声のトーンを落とす。

『……それがラズリフライヤーの墜落音を聞いて体調を崩されてな、現在医務室で療養中なんだ』

「そ、そうですか……」

『だがそれを理由に説明をしない訳にもいかんな……わかった。今回は司令代理として私が説明役を引き受けよう。カフスのデイスプレイ機能を立ち上げて、管制室のチャンネルに設定を合わせてくれ』  
「了解」

アキナがその場にいないため、代わりにトウキが事情説明をかつて出た。カフスの設定を操作して管制室とチャンネルを合わせたミハルは、千冬達に向き直って準備が出来たことを告げた。

「今からウチの上層部と回線を繋ぎます。詳しくはその人間に聞いてください。一隊員の俺には説明出来る範囲に限られてるんで」  
「うむ」

了承を得て、彼は投影デイスプレイを展開。デイスプレイには管制室内のトウキが映り込み、千冬と真耶はその前に立った。二人の姿を視認したトウキは軽く会釈し、話を切り出す。

『初めまして、IS学園の教職員の方々。私は時間保護組織TPSの時空間制御管理室室長、トウキ・ヤマダと申します。此度はお忙しい中ご迷惑をおかけして申し訳ありません』

「いえ、お気になさらないで下さい。私はIS学園教職員の織斑千冬です」

「同じく山田真耶です」

『ほう……と申しますと、貴女がかの初代世界最強の称号をお持ちである織斑千冬殿で間違いありませんか？』

「ええ、そうです。ですが普通に名前で構いません。そちらの名前で呼ばれるのはあまり好んでいませんので」

『これは失礼致しました。では早速本題へ移りましょう。まず我々の組織がどういったものかを、ご説明いたします……』

トウキは出来るだけ自分の立場で説明できる範囲を話した。自分やミハル達は2046年の現在から100年も経った遠い未来の住人である事。時間転移の安全と秩序を守る国際管理組織の一員である事。そしてその調査中にトラブルが発生し、止むを得ずこの時代へ不時着した事等々……。

その間千冬は顔色一つ変えず話に耳を傾け、逆に真耶は荒唐無稽すぎる内容に目を回し、途中から魂が半分抜け出たような状態だった。一通り説明が終わり、暫し瞑目していた千冬。やがて考えがまとまったのか、トウキに向き直ってこう持ちかける。

「……成程、少々信じられない話ではあります。ですが事が起こっている以上は信じざるを得ませんね……わかりました。この件については一先ず現状保留という形にして、また日を改めてこちらの上の人間も交えて話し合いをしましょう。双方が非常事態である事に変わりはありませんから」

『勿論ですとも。こちらも手短かに説明しただけです、ご理解頂けなかった部分もあるのではないかと思っております。しかし私も立场上話せる部分が全てというわけではありません。これが精一杯であると思っただけならば幸いです』

千冬もトウキも、IS学園やTPSの重要な役割を担う人間である。当然この一件をなかつた事には出来ない。

となれば互いにやれることと言えばただ一つ。お互いの情報を共有し合い、今後について話し合うことだ。

「承知しました。ではそちらの隊員6名は一時的にこちらで保護する

という形でよろしいでしょうか？」

『ええ。事情の方は私がお伝えしておきますので、隊員達のことをどうぞよろしくお願い致します』

「わかりました」

そう締め括られ、時空を超えた対談は終了した。

「えーつと…早速で悪いんですけど、仲間と合流させてもらえないですかね？ 多分会って話した方が皆安心すると思うんで……」

「そうだな、その様子ならもう怪我の方は心配ないだろう。これから事情聴取をするつもりだったし、お前を交えられるなら手間が省ける」

ラズリフライヤーの墜落により、2146年に帰れなくなったミハル達はしばらくの間公立IS学園のお世話になる事になった。とりあえず上層部に自分達の無事は伝えられたので、次はミハル自身の無事をマツリ達に伝えなくてはならない。ミハルは通信を切つて千冬にそう持ちかけた。彼女も彼女で事情聴取を行いたかったようで、ミハルの要求をすんなり了承。彼に医務室を出るよう促した。

「ついてこい。彼らは今、別室に待機してもらっているからな。早く会ってその元気な姿を見せてやれ」

「……わかりました。ありがとうございます」

さりげない気遣いに感謝しつつ、ミハルは真耶と共に小走りで千冬の後を追った。

---

【次回予告】

---

ミ)さーて、次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』はー？

(うーわ、どっかで見たことあるわよこの口調……)

(某長寿アニメですよ、完全に……)

ゲ) どうもお、海○商事のア○ゴですう。しゃい(最)近フ○田く  
んとの付き合いが悪くう、しばらくの間兼ね役の居酒屋でひとり酒を  
エンジョイしていますう。フ○田くうん、今日はどおだい? 久々に  
一杯やらぬあいか?

(ぶっ!?)

(持ちネタじゃねーっすかそれ……)

ゲ) さて次回はあ、File. 08 『セカンドコンタクト』の一本  
ですう。

ミ) 次回もまた見てくださいねー!

ミ・ゲ) ジャン・ケン…

(させるかアツ!!)

ミ) エルメスツ!?

ゲ) ティ○・フィ○ーレッツ!?

(結局次回の内容喋ってないじゃないっすか……)

File. 08 《セカンドコンタクト》

「…私達、これからどうなるんだろう」

「とりあえず話せばわかる方々のようですから、大事に越した事はないかと……でも不安に思えてしまいますよね、やっぱり…」

「あとは本部の司令達っスよね。俺たちの安否は絶対知らないだろうし、ミハっちに至っては怪我して寝てるし……」

IS 学園の職員室隣にある会議室。

外で数名の教職員に監視されながら待機するエド達の空気は酷く重苦しいものだった。事情聴取はするとは言っていたものの、話す真実を信じてもらえない確証はつきり言っていない。あの有名な偉人・織斑千冬が相手だったとしてもその不安は拭いきれることはなかった。様々な心境が巡って、彼等は先程からずっとこの有様なのである。

再び沈黙が室内を満たすかと思われた時、それまで黙っていたゲオルクが足音を聞きつけた。

「……来たようだな」

その一言に全員の顔が一気に強張る。音から2、3人程度。それが近づいてくる度に彼らの表情に真剣味が帯びてゆく。

そして、会議室の扉が開かれた。

(ガチャツ)

「待たせてしまってますまなかつたな。こちらの準備不足で少々時間が掛かってしまった」

入ってきたのは千冬と真耶だった。二人は座る五人の前に立ち、話を切り出す。

「さて、これから君達に対する事情聴取を行う」

「「「「……………」」」」

不穏と静寂が拍車をかけ、一気に会議室内が緊迫した雰囲気と化する。生唾を飲み込む者、玉のような汗を流す者、いずれもこの環境にただならぬ心構えをする者がほとんどだった。

次の一言は一体何なのか。エド達が注目する中、千冬が放った言葉は……

「……とその前に。ようこそ、TPSからやってきた未来人の諸君。君達の事情は大体把握している。だからそこまで緊張した表情をしなくてもいい」

((((…あれ?)))

まさかの歓迎だった。

「あ、あのー、ちよつといいですか?」

「なんだ?」

「確かに僕達はあなた方からすれば未来人に当たりますが……どうしてそれを知っているのですか? 僕らは一言も未来からやって来たなどと口にはしていませんが……」

「ああその事か。実は先程、君達の仲間の一人を介してそちらの上層部との情報交換を済ませた。だから既に君達の身分確認は取れている。六名ともTPS実行部隊の緊急事態処理班『ドラゴンエマージェンシー』のメンバーであるとな」

千冬はトウキから説明された内容の一部を口にす。その彼女の一言に、ゲオルクが何かを察した。

「仲間の一人……? ってことはまさか!」

「その通りだぜゲオルク!」

待つてましたとばかりに扉を開けたのは、復帰して千冬達と共にやってきたミハルだった。次の瞬間重苦しかった室内が一変し、メンバーの表情が明るさと安堵に彩られる。

「ミハル（君）（兄）（ミハミハ）（ミハっち）!!」

全員が席を立って、罰が悪そうに笑うミハルに駆け寄った。一番初めにマツリが飛びついて顔を埋め、その後には手に手を置いたり小突いたり、各々彼の無事を喜んだ。

「悪いな皆、色々心配かけちまって」

「もうっ！ 心配かけさせないでよこのバカ兄!!」

「ごめんなマツリ。だからって泣かなくてもいいんだぞ?」

「バツ!?! なっ、べ、別に泣いてなんかいいわよ!!」

「マツリちゃん、目尻に涙浮かべて反論しても説得力g（ゲシッ!）」

「イツデエツ!?!」

「うっさい！ 涙なんか浮かべてないっての!!」

余計な一言でマツリに向こう脛を蹴られるジャン。しかもそこは怪我をした場所でもあり、患部を抑えてのたうち回る始末。これは痛い。

「…あー、再会の喜びを堪能しているところ悪いがそろそろ事情聴取をしたいのだが? 後でたっぷり時間をとらせてやる」

「あ、忘れてた」

ひとまず千冬の一言で全員着席。窓側にミハル達が一列に並び、対面した通路側に千冬達が座る。そんな形で落ち着いたので、改めてミハル達の事情聴取が始まった。

「では君達六名の氏名と年齢、出身地を聞かせてもらおう。…そうだな、最初に山田君と通信を交わした君から」  
「わかりました」

千冬に指名され、まずはエドから順に自己紹介をすることに。

「エドワード・オルコットと申します。出身はイギリスで、15歳です」

「ゲオルク・ボーデヴィツヒです。歳は18でドイツ出身」

「メイラン・ファンヤでく。中国生まれの大阪育ちでく、16歳やく」

「自分はジャン・デュノアッス。生まれはフランスで歳は15っス」

「俺はミハル・オリムラ。日本出身で15歳だ。んでこいつが…」

「妹のマツリです。年齢は14歳です」

一通り自己紹介を終えると、内容を書き取っていた真耶があることに気づく。

「えっと、ミハル…君とマツリさんは日本出身と仰いましたが、漢字の方はどういった表記なんですか？」

「あー、漢字表記はこれだ」

渡されたメモの切れ端にミハルがペンで二人分の名前を記入し、真耶に手渡す。

「 織斑三春 織斑祭」

「あれ？ この苗字ってまさか…」

「そうだけ。実は俺達兄妹、千冬さんの生家の子孫なんだ」

「ええっ!？」

「まあ正確に言えば、千冬さんの弟さんである織斑一夏さんと篠ノ之東博士の妹さん・篠ノ之箒さんの子孫なんですけどね」



「…やはりそうか」

これで千冬が感じた、妙な既視感の正体が判明した。二人は千冬の弟と親友の妹との子孫だったのだ。確かに二人の顔立ちやパーツのつき方は千冬と相違する箇所がある。多少の違和感は篠ノ之家の血によるものだった。

「驚くのはまだ早いで。うちらも少なからず関わったり、これから千冬やん達が関わる事になる先祖の子孫なんや」

「え、言っちゃっていいんすか？ それ」

「別に構わないと思うぞ。現に俺達の姓は先祖のそれと変わらない。恐らく大体察しがついていると思うぞ？ 特に…俺なんかは、な」

隠す必要はないと、ゲオルクは千冬に顔を向ける。

「…ああ。ボーデヴィツヒ、君の言う通りだ。教職に就く前にいたドイツ軍で教官をしていた頃の教え子に、”ラウラ・ボーデヴィツヒ”という軍人が確かにいた」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ…：間違いなく俺の先祖です。ドイツ軍のIS配備特殊部隊『シュバルツァ・ハーゼ』隊長とドイツ代表候補生の肩書きを持っていて、後にドイツ軍の事実上トップにまで登り詰めたと両親から聞かされています」

ゲオルクの話聞いて、僅かだが千冬表情が明るくなった。まるで心残りが少し解消されたかのように短い溜め息をつき、静かに瞑目する。

「むう。教え子やんの事もええけど、ウチのことも忘れてたらあかんで？ ウチの先祖も千冬やんと関わってんねんやから」

置いてけぼりを食らいたくない、ここでメイランが割って入って

きた。体を大きく揺らして存在をアピールするものの、千冬と真耶の視線はおよそ16歳とは思えぬ豊かな産物に行ってしまうわけで。千冬はともかく真耶まで目を見張ってどうする。

「む、すまないな。少し出しゃばり過ぎたか」

「そら、ゲオルグやんのご先祖様に比べたら影は薄いけどなく。ん？

どうしてん二人とも。口開けっぱにして」

「あ…あぁいや、何でもない。それでメイランは中国人なんだな？」

「せやで。4歳くらいに日本の大阪に移り住んだんや。あ、これウチの漢字表記なく」

メイランはミハル達と同様に、「鳳美蘭」と記入して手渡した。

「鳳…成程、鳳鈴音の子孫か」

「確か鳳鈴音さんは中国の代表候補生でしたよね？でも織斑先生とどんな関わりが…？」

「鳳鈴音は一夏の幼馴染なんですよ。ちょうど篠ノ之箒が政府の保護プログラムで転校した入れ違いでやってきましてね。私も何度か顔を合わせています」

「そうやで。一つよろしゅうなく」

ほんわかとした笑みを浮かべるメイラン。それに思わず口元を緩める真耶だったが、今は事情聴取中。千冬の咳払いが意識を現実に戻した。

気を取り直して真耶は書き取った紙に目を落とす。すると

「オルコット…そういえば」

何かに気づいたように手持ちのファイルを一冊取り出し、手早く中の書類に目を通してゆく。しばらくしてあるページで手を止めると、そのページの書類を取り出してエドに差し出した。

「エドワード君、この女性に見覚えはありませんか？」

「…ええ、勿論。僕はこの女性の子孫ですから」

それを見たエドはにつこりと答える。

差し出した書類には一人の女性のプロフィールが記載されていた。ブロンドヘアに縦巻きドリルロール、澄んだ碧眼の相貌をした顔写真の女性は確かにエドの顔つきとよく似ている。その隣には上流階級の人間が持ちそうな経歴や資格がズラリ。

「成程、メイランが言っていた関わることになる先祖とはこの事か」

「セシリア・オルコットさん…：確かイギリスの代表候補生で、この当時新開発だったBT兵器を積んだISが専用機でしたよね」

「ええ。第三世代型の最新鋭機で、主力であるBT兵器は操縦者のイメージを反映・具現化することで複雑な独立可動ユニットを操作する事を目的とした『Blue tears innovation trial』——ブルー・ティアーズ革新型試作機の頭文字をとって『BIT』とも言われています」

「よく知っていますね。100年も前のISのデータだというのは」「いえいえ、先祖と僕の戦闘スタイルは似て非なる部分が多いので、参考までに覚えていただけですよ」

「このような過去の機体のデータのみならず、我々TPSは過去のありとあらゆる情報を保有しています。万一の事件事象の際はそう言った過去の類例が大きく役立ちますから。実際に保有する情報で解決した事案は全体の解決数のほぼ七割を占めています」

「ほう…」

この2046年の世界でも十分な発達を遂げているというのに、その100年後の世界はさらに今より発展した世界らしい。そう考えると今この世界が抱えている問題が霞んで見えてしまう。千冬は軽く頭痛を覚えた。

「情報保有はTPSだけの専売特許じゃないっすよ？　自分が元々勤めてたIS企業『デュノアコーポレーション』はISの開発やメンテナンスのみならず、TPSと連携をとって情報やデータを保有したり共有しているっす」

そうやってジヤンはテクノブレスのクリスタル部に手をかざし、とあるエンブレムを投影する。それは“DCL”のアルファベットに翼と電子回路、地球を象ったロゴデザインで、その下には『デュノアコーポレーション』と表記されている。

「デュノアコーポレーション……？　ひよつとしてこの時代のデュノア社の事ですか？」

「ええ、こつちじゃ改名してデュノアコーポレーションとして新たにIS企業として持ち直したんす。2046年の現在だと経営難で傾いていることは知ってると思うっすけど、その後継いだ新社長の工夫やアイデアで何とか持ち直したんす。そしてTPS設立と同時期に協力体制に入って、現在はISに関する製造や修理に設計、各地の研究所から寄せられたIS関連の研究内容を保有しているっす」

TPSの情報統括管理センターが保有する情報は過去に起こった出来事や報告書などが大半で、IS関連の情報はそれほど保有していない。ISに関する情報は膨大すぎて、TPSの管理センターだけでパンクしてしまうからである。そのためISに関しての情報が必要な場合は、デュノア・コーポレーション内の情報統括管理センターに問い合わせる必要があるのだ。

「まさにIS企業のトップにまで登り詰めたという事か……。ちなみにデュノア、先程『元々勤めていた』と言っていたが、どういう意味だ？」

「あー単純な職場交代っすよ。デュノア・コーポレーションは年に一

回社内アンケートをとって、今の所属先からTPSへ配属したい人を調査するんす。自分もその一人で、前は情報管理職に身を置いていたっす」

彼は胸ポケットから一枚のカードを取り出して机の上に提示する。カードはかつて彼がデュノア・コーポレーションにいた頃の社員証だった。いずれ戻る時のためにと、彼は肌身放さずに持ち歩いているのである。

一通りミハル達の素性を聞き、背もたれに寄りかかって小さく溜息をつく千冬。無理もない。まさか全員がこの時代を生きる人間の子孫で、内二人が自らの生家の子孫だったのだから。いくら彼女でもあまりに情報量が多く処理が追いつかない。恐らく書き取りをしている真耶も同じであろう。

次の聴取項目をどうしようかと悩んでいた千冬だったが、ふとゲオルクの顔が視界に入った時、ある事を思い出した。

「…成程、君達がこういった人間かはよくわかった。全員IS学園に何かしらの関わり合いを持つ人間を先祖に持っていること、そして君達の所属するTPSや未来のデュノア社の事についても。——さて、ここから本題に入らせて貰おう」

それまで頭の中を巡っていた混乱を振りほどくように、千冬は上半身を起こしてミハル達に向き直る。その相貌には先程とは違った真剣味が帯び、ミハル達も思わずそれに動揺。互いに顔を見合わせて耳を傾ける。

「ゲオルク・ボーデヴィツヒ」

「はい」

「君は確か医務室で私達にこう持ちかけたな。『乗ってきた機体を調べられるのは不味い』と」

「ええ、確かに言いました」

「では約束通り話して貰おう。君達が何故あの機体を調べられるのを恐れているのかを」

千冬と真耶が最初に接触した時にゲオルクが待ったをかけたラズリフライヤーの調査。学園側は彼の要求通り調査せずにそのままにしている。

頼んだ当人はエドとアイコンタクトを交わすと、真剣な表情で話を切り出す。

「——わかりました、お話ししましょう。でもその前に一つだけ、これに関連したある事故についてお話しさせてください」

「ある事故だと?」

「はい。あの時ゲオルク君が口にした事の根拠ともいえる世紀の重大事故が、我々から見て過去に起こりました。これはあなた方の判断次第では、この先の未来で起こってしまうかもしれない大事故です。それを踏まえた上で聞いて貰いたいんです」

そう口にする彼らだけでなく、残りの四人も神妙な面持ちを向けている。只事ではないことは明白だった。

「……いいだろう」

「ありがとうございます」

礼を述べ、静かな口調でゲオルクが語り出したのは衝撃の内容であった。

「——『ユニバース・ラグナロク世界終焉の日』。それが、我々人類史上最も最悪とされた大事故の呼称です」

【次回予告】

はい、マツリ・オリムラです。今回こそはまともに次回予告させていただきます。

(あれ？ 今日ミハル君達は来てないんでしょうか？)

(いや、来てる筈っスよ？ 自分が来た時には三人ともいたのを見てるっスから)

今回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は、かなりシリアスな展開になっています。何故ラズリフライヤーを調べられてはいけないのか、そしてゲオルクさんが口にした『世界終焉の日』ユニバース・ラグナロクとは一体どんな内容なのでしょう？

次回、File. 09 『ユニバース・ラグナロク』

(あ、そういえば舞台の裏手に何やらモゾモゾ動く、粗大ゴミと書かれたゴミ袋が三つあったような……)

(……………それ、中身アレなんじゃ……?)

次回もお楽しみに！

## File. 09 《ユニバース・ラグナロク》

……事の発端は、2046年よりずっと未来。ミハルたちの暮らす2146年から約50年ほど前の出来事である。

国立IS研究所の所長として在籍していた科学者：リュウゴ・アサミネ博士は、子供の頃から夢見ていた時間転移タイムスリップの実現に向けて研究を続けていた。

その手法として彼が着目したのはISの運用に用いられるイグニッションブースト瞬間加速。この直線加速を数千倍の速度で飛行することが出来れば、過去や未来に到達できるかもしれない。リュウゴ博士は研究所から選りすぐりの科学者たちを招集して研究チームを組み、瞬間加速について更なる研究を重ねていった。

「その中には当時研究所に出入りしていた俺たちの先祖、織斑一夏もいたんだ」

「男性でも操縦できるISの制作に成功した一夏さんは、更なるISの発展を目指す意味合いでその研究に携わりました。宇宙を目指した翼を、今度は時間を超える翼に進化させるために」

そして年月をかけて研究チームは時間転移が出来る試作機を完成させた。転移できた時間はたったの秒単位だったが、それでも人類にとっては大きな進歩。この時のメディアはこの話題で持ちきりであった。

そこで博士はもっと速度を上げるにはISだけではなく、それをサポートするものも必要だと考察。研究チームの指揮を一夏に託し、一人時間転移を円滑にするための機器開発に専念した。

「時間転移を円滑にするための機器？」

「はい。ISの拡張領域だけでは秒単位しか転移ができないという壁がありました。そこでリュウゴ博士は発生するエネルギーを一気に増幅できるオリハルコンゲートの制作に乗り出したんです。これが



後に僕らが時間転移するための時空間ゲートになるんですが……問題はその制作過程で起こったんです」

「? 一体どういうことですか?」

オリハルコンゲートの試作品として『ウラシマ』を制作したりユウゴ博士は早速それを稼働させた。ところがオリハルコンゲートのエネルギー量はあまりにも凄まじく、熱暴走を誘発。温度に耐えられなくなつたウラシマは大爆発を起こしてしまった。

研究所は吹っ飛び、大勢の科学者が死傷するという大惨事。そして件のリュウゴ博士は……

「遺体が見つからなかったけど?」

「ほんまらしいで。試作品が熱暴走起こした時、別室飛び出して確認しにいったらしいねんけど、そのすぐ後にドツカンしてしもうて」

「消し飛んだという可能性はなかったっす。リュウゴ博士の着用していた白衣は特注品で、そこそあらゆる衝撃に耐えた実験用の白衣だったっすから。もし博士が消し飛んだとするならば、その白衣だけが残っている筈っす。ところが現場にはそれすらも残ってなくて……」

「事故後、奇跡的に科学者の一人が息を吹き返しましてね。証言を取ったところ、驚くべき事を口にしたそうです」

——リュウゴ博士が、オリハルコンゲートに吸い込まれていった——

「! するとリュウゴ博士は……」

「ええ。恐らく試作品の爆発に巻き込まれて、生身のまま時間転移してしまつたんです。原因は未だ不明ですが、いずれにしろ博士が亡くなつてしまつた事には変わりはありません」

事故後、時間転移はやはり無理な話ではないかという声が多数上

がった。資金を提供する企業も次々と去っていき、もう研究は続けられないと誰しもが思った。

しかし国立IS研究所の所長に出世していた一夏は諦める事なく、博士の意思を受け継いでISとオリハルコンゲートの両方の研究に熱を注ぎ続けたのだ。それに感化した科学者達も協力し、事故から約三年後。遂にオリハルコンゲートと時間を超える為のISを完成させたのである。

「凄いですね！ 織斑一夏君が後にそんな偉業を成し遂げるなんて！」

「一度やると決めたら絶対諦めない。私と似て頑固ですからね、あいつは」

「研究を始めてから丸15年。途中リユウゴ博士の死もありましたが、一夏さんは自分の理想を遂に実現させることができました。そしてその初稼働を兼ねた式典が東京で行われることになりました」

だが、真の災厄はここからだった。

東京の国立平和広場にて開かれた式典にて、一夏の演説を行っていた最中である。それまで真っ青だった空がまるでガラスが割れるように突然裂けたのだ。

「空が割れるって……?」

「表現としては空間の裂け目、といったところですよ。当時その場にいた人々は下から見上げていたので、そう見えたのではないかと」

巨大な裂け目は物凄い吸引力を發揮し、下にいた人々、路面、信号機に車、果ては建物までも次々と吸い込んでいった。

裂け目の向こうに消えてゆく人々を見た一夏は、その先に揺らめく

未知の空間を発見。すぐさま調べた結果、裂け目の向こうからオリハルコンゲートと同じ成分が微量ながら検知できたのだ。

「裂け目の向こうは、俺達がここに来る時に通ってきた時空間だったんだ。わかりやすくいうと……四次元空間っていったらわかるかな？」

「四次元空間!？」

「まあざっくばらんに言うと、です。時空間に関しては専門的な分野になるので、細かい説明は省きますが」

一夏はもう一つその成分の端子がマイナスである事を突き止める。その時彼はかつて博士からオリハルコンゲートの開閉についての推論を思い出し、一か八かの賭けに出た。

——マイナス端子が溢れる裂け目の向こうに増幅させたプラス端子をぶつければ中和でき、この裂け目を閉じる事が可能ではないか、と。

「! でっ、でも! それじゃあ一夏君の身が……!」

「ええ、明らかな自殺行為っす。無事帰って来られる保証なんてないし、第一成功するかどうかも……。周りは必死に止めたっすよ。僕らの先祖も当然ね。結局最後まで聞き入れてもらえなかったらしいっすけど……」

彼は式典で見せる筈だった時間転移専用IS『ヴィーナス・セレナーデ』に急ピッチでオリハルコンゲートのプラス端子を増幅させるモーメントエンジンを組み込み、それを纏って単身裂け目に突入。

直後裂け目の奥から眩い光が溢れて吸引が停止。裂け目は両端から閉じてゆき、空は元の状態に戻った。宙に浮いていた人や物は落下し、間一髪吸い込まれる事はなかった。

「……………」

「被害総額推定2億4000万円、死者行方不明者数は1万5000人以上に及ぶ大惨事。その中には各国の首脳達も含まれていました。裂け目の吸引力は凄まじく、広範囲にその被害を及ぼしました。これが人類史上最も最悪と呼ばれた『世界終焉の日』ユニバース・ラグナロクの経緯です」

「事故後、日本や各国から調査委員会の人間が招集され、裂け目の向こうである時空間を詳しく調査しました」

科学者達はリュウゴ博士と一夏が残した資料と論文を元にオリハルコンゲートと時間転移用のIS、同技術を採用した飛行艇を制作。調査班とともに原因を突き止めるため、時空間へと突入した。時空間への進入は重ねてきた実験で既に実証されており、この時間問題は発生しなかった。

だが突入した彼らは、そこでとんでもない光景を目にしたという。

「時空間内に無数に漂つとんたんや〜。裂け目に吸い込まれた人や〜、車や〜、建物がな〜」

「時空間内は事故当時のような赤黒い歪みではなく、むしろ穏やかな波の揺らぎのようだったそうです。後の調査でオリハルコンゲートのマイナス端子は時空間の壁を破壊する性質があつて、プラス端子は逆に修復する働きがある事が分かりました」

彼らは調査を必要最低限に留め、時空間に漂う瓦礫や人々を回収するために人員を派遣。大型の飛行艇を複数急造して再び時空間へと乗り出した。残念ながら誰一人として生存している者はいなかったが、漂っていた遺体は「ただ一人の身元不明者」以外は全て遺族の元へと返されることが出来た。

「……その身元不明者というのが気になるな。未来の情報網ならそれくらい見つけられそうな気もするんだが」

「ああいや、それならすぐに特定できたんだ。ただ当時の登録リストには存在しない人物で、唯一ヒットした年号が……2050年だったんだ」

「えっ、2050年？ それって今から4年後の年号ですよね？」

「そうっす。最後に生存が確認された、ね」

「最後？」

その人物の名は朝峰隆一。調べてみると、彼はなんとリュウゴ博士の先祖であった。

「リュウゴ博士のご先祖様!? それってどういう……?」

「その謎を解く鍵は、その遺体があった場所にあるんや。朝峰やんは何故か飛行艇の一人用のコックピットに乗っかって、しかもその機体は吸い込まれたにしてはえらいボロボロやったんや」

「吸い込まれただけにしてはおかしいと睨んだ調査班は、回収した飛行艇を細かく分析しました。その結果、彼の乗っていた機体の構造や仕組みが未来の技術と全く同じであることが判明したんです」

飛行艇からは大量のオリハルコンゲートのマイナス端子が検出され、いずれも機体のあちこちに入っていた亀裂からだった。この事からあの裂け目は、この欠陥だらけの機体がマイナス端子を撒き散らしながら時空間を飛行した事により発生したものだ結論づけられた。

「でもここで疑問が出てきました。何故未来の技術を過去の人間が習得することが出来たのかと。そこで思い出してほしいのが、オリハルコンゲートの実験失敗により亡くなったと思われたリュウゴ博士の存在です」

「……成程、読めてきたぞ」

「織斑先生？」

「リュウゴ博士はオリハルコンゲートに吸い込まれたが奇跡的に生還していたのだろう。そして過去に飛ばされ、未来の世界に帰ろうと開

発している時に朝峰隆一という人物がその技術を盗用し、飛行艇を開発。時空間に突入して世界終焉の日を引き起こしてしまつた……というところかな？」

「まあそんなところですよ。まだ不明な箇所が多くて一概には言えませんが……」

調査班の報告を受けた各国政府はリュウゴ博士を重要参考人として手配。その行方を追つた。だが2050年やどの時代を探し回つても、痕跡や手掛かりを掴むことはできていないという。

「リュウゴ博士は今どこに……？」

「そこまではわからねえな。今も搜索は続けてるみたいだけど進展がないらしい。兎にも角にも、そう結論づけた日本や各国政府は時間転移に関する法案を作ることを決定したんだ」

各国は時間転移を一般化する前の下準備として、時間転移保護法案制定や技術の盗用防止システムの開発、オリハルコンゲートや時間転移対応ISの量産や改良が念入りに行われた。

空間の裂け目が発生した国立広場はその後、慰霊碑と記念館が建てられた。もう二度とあんな事故があつてはならない。そんな意を込めて、今も時間転移に携わる人間や各国の政府関係者が献花にやってくる。

この数年後。歴史改竄による犯罪者を取り締まるための法律の追加やTPSの設立などが行われ、ミハルたちの住む2146年の世界へと繋がっていくのである……。

「……これでお分かりいただけただけでしょうか。我々がラズリフライヤーを調べられるのが不味い理由は、こういった経緯があつたからなんです。もし何かの拍子で未来の技術を過去の人間が悪用した場合、再びあの惨劇が起こりうる可能性が高いんです」

「皆さんが未来の技術を悪用するような方々ではないというのはこちらでも理解しています。しかし我々の住む世界を守るためには致しかたない事なんです。どうか、我々の要望を承認していただけないでしょうか」

千冬と麻耶に告げられた衝撃の未来。ただ聞いているだけなら仰々しい作り話だと一笑に付していただろう。だが彼らの顔は真剣そのものだ。嘘とは思えない。

「織斑先生……」

「……よし、わかった」

しばらく思考を巡らせていた千冬の出した答えは……

「山田君、調査はとりやめだ。ひとまず機体を收容するよう他の職員達に手配してくれ」

「はいっ、わかりました！」

YESだった。

「ありがとうございます。織斑女史」

「常人として当たり前前の判断を下したまでき。気にするな」

確かに現代に生きる人間にとって未来の最新技術は魅力的に思えるだろう。しかし手を出した場合、未来の世界を一変させてしまうかもしれない。自分たちの子孫の生きる世界を侵してまで得るものなど、この世にありはしないのだ。

千冬の判断を聞いた真耶は力強く返事し、会議室を出て行く。その様子を見ていたミハル、マツリ、ジャンが脱力して机に突っ伏した。

「良かったあ……わかってもらえて」

「緊張の糸が切れたっす……」

「心臓に悪いわね……」

「不安になるのも、しゃあないわな」

一番席が近かったジャンの頭を撫でるメイラン。

「しかし安心はできんぞ。ここからが正念場になる。俺たちの存在を嗅ぎつけて、どこぞの連中が狙ってこないわけがない。そいつらに対する警戒も強めていかないといけないからな」

「ゲオルクの言う通りだ。我々も全能ではない。君達の戦いはこれからだぞ」

そう口にしたゲオルクと千冬は互いに顔を見合わせ、笑みを浮かべた。

「さてと、事情聴取はまだ続いているからな。お前達が話せる程度ギリギリまで聞かせてもらおうじゃないか。未来人共」

「へへっ、上等だぜ。教師イ！」

「何の張り合いをしているんですか二人共……」

セカンドコンタクトは、まだまだ続く。

---

### 【次回予告】

---

読者の皆様、長らくお待たせしてしまい申し訳ございません。今回の次回予告は私、エドワード・オルコットが務めさせていただきます。

（今回はエドさんだから安心ね。三人共、ちゃんとお手本をみるように）

（（はーいー））



(何スカねえ、この小学校感……)

今回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は、2046年の世界で問題視されているISが未来でどのような発展を遂げているのかについて触れていきます。果てさて、僕らのIS事情を知った織斑先生達はどんな反応を示すでしょうか？

次回、File. 10『Category—TPS』

(わかった？ ああゆう風にやる……っっていない!? さては逃げたわね!?)

(こんな短時間で脱走とは……三人共脱走をやり込んでるっスね!)

(感心しとるバイイか!)

……おい、なんか絡んできてくださいよう。

ミハル達の住む2146年の事情を知ったところで、事情聴取の話は未来のISについて触れることに。

「そういえば、お前達の住む未来の世界ではISはどうなっているんだ？ さっきの話にもISが深く関わっていたようだが」

「ISのことですか？ そうっすね〜……」

千冬の疑問は最もだった。

ISが出回り始め、10年が経過したこの世界でも未だに解決できていない問題が山ほど存在する。未来の世界でISは一体どんな進化を遂げているのか、気になるところだろう。

「確か…まだこの頃は男性が乗れなかったんだっけ？」

「せやで〜。あとは〜第三世代が最新で〜、コアの数が467個なのと〜、宇宙開発に全然熱心やなかった頃やんね〜」

「軍事転用も付け加えておくぞ。IS運用協定、俗にいうアラスカ条約によってな」

この時代の事情は全員が把握していた。

「えっと…まず、男女兼用化が一番大きいですね。あとは量産型コアの代等、稼働には国際IS統制機構の発行する正式な許可証の必須、各地域の警察組織やレスキュー隊への配備、宇宙開発用に特化したISの開発…などでしょうが」

「大まかな点は改善されたのか」

2146年ではISが男女兼用になった事でより身近な存在となつている。言うなれば車や携帯電話のような馴染みのあるツールといった所だろう。しかし使い方を誤れば危険である事は変わらない

いたため、危険な運用を避けるべく各地域に国立の専門教習学校が導入された。

またコアについても詳細説明によって改良と量産化に成功しており、女尊男卑の要因ともなっていた篠ノ之束製のコアは完全撤廃とはいかないものの、今では殆ど使われなくなってしまった。

まあ未だにあの思考を引きずっている人間や団体はちらほらいるようだが、移り変わったミハル達の世の中では通用するはずもない。

「国際IS統制機構って何ですか？」

「この時代のIS委員会ですよ。あまりにも不正が多過ぎて、各国の話し合いから一時解体して新たに組み直されたんです。そのポストに籍を置くことができるのは人格者、実力ともに優れた人間だけで、汚職といった不正の再発防止のために様々な処置が施されています」  
「フツ、遂に解体までされたか。この時点でどれだけの悪事を働いているのかは知らんが、どのみち粛清される事にならないようだな」

フンと鼻を鳴らし、IS委員会を皮肉る千冬。IS委員会は彼女自身快く思っていない組織であり、それが解体されたと聞いて多少気が晴れたようだ。最も解体自体は未来形ではあるが。

「一新されたといえは、確かあっちじゃ世代の括りがなかったんだっけ」

「世代の割り振りがありませんか？」

「ええ。理由の一つとしてはそもそも区切る必要がなくなったことです。この2046年の世代というのは、既に退化した兵器ISを第一世代、拡張領域を使用した用途多様化が第二世代、特殊兵器を搭載した実験機を第三世代と呼んでいます。我々の世界ではISの一新に伴って稼働中のもの以外は全て廃止になり、代わりに登録名称として『Category』が採用されたんです」

ゲオルクはカフスを操作して投影ディスプレイを表示すると、ある

画面を二人に見せた。

「これは現在我々の世界で流通しているCategory版のIS登録情報の参考資料です。わかりやすく言えば企業の登録商標：ブランドとほぼ同じといっているでしょう。例えばデュノア・コーポレーションの製作したISなら”Category—DNC”として実際IS統制機構に登録されます」  
「ほう…」

千冬は表示されたディスプレイをしげしげと観察する。やはり100年後の未来だけあって細かい情報まで記載されている。これだけでもISに対する向き合い方が全く違っていた。

「凄いですね。圧巻の一言です」

「ああ。それともう一つ、男女兼用になったということはお前達もこのCategory版のISを所持しているのか？」

「持っています。TPSに所属する人間は事務員や隊員を問わず全員所持が義務付けられているんですよ。このテクノブレスをね」

そういつてエドは、ラズリフライヤー内で使用したあのブレスレットを机の上に置く。

「テクノブレスは自分たちTPSの共通装備で、この中にはISが電子変換されて収納されているっす。そして中身のISはデュノア・コーポレーションが保有するもう一つのブランド、その名も”Category—TPS”っす！」

「Category—TPS？」

「TPS独自のISではないのか？」

千冬の問いにマツリは首を横に振る。

「いえ。確かに時間転移とISは根強い関係がありますが、組織自体は全く別物なんです。そのため連携をとっているデユノア・コーポレーションだけはTPSへの配備を目的としたISブランドを持つことを正式に許可されているんです」

「一般的なCategory版のISは従来発展型専用機とか量産機が大半だけど、Category―TPSはデユノア・コーポレーションの最新技術を惜しみなく施した新造機体や先行改良機が主なんだ。まあその分使いこなす為に猛特訓しなくちゃいけないけどな」

彼らの手首には配色こそ違うが、同形状のテクノブレスが巻かれていた。TPSに属する全員がこのデザインで統一されているという。

「未来製…その中でも特殊なIS群、ですか……」  
「ふむ……」

千冬は考えた。話を聞く限りミハル達は全員専用機持ち。加えてISに関する知識は新旧共に豊富。恐らく実力も相当と見ていいだろうと。

彼女の中に眠る闘争が、その片鱗を見せた。

「……………フツ」  
「[[[[[?]]]]」

突然の含み笑いに困惑する一同。そして千冬がポンと柏手を打つと

「――よし。ではこれにて事情聴取を終わる。これから君達が寝泊まりできる場所を手配するから、もう暫くの間ここで待機しててくれ」

満足げな笑みを浮かべ、事情聴取を終わらせた。

部屋を用意すると言い残し、彼女は真耶を連れて会議室を出ていく。突然の聴取打ち切りに戸惑うミハル達だったが、とりあえず話は理解してくれたのだらうと判断。言われた通りにこの場で待つことにした。

▽▽▽▽▽▽

「…でも、大丈夫なんでしょうか」

「何がですか？」

「ミハル君達のことですよ。確かに彼らや上層部の方からは悪い感じはしませんでした。それでもこんな簡単に受け入れていいのかと」

ミハル達を学生寮三階の使われていない三部屋に案内し、様々な説明をした後。職員室に向かう廊下で真耶がそんなことを呟いた。どうやら規模の大きな話がトントン拍子に進んでいることが腑に落ちないらしい。

この意見に対し、千冬は至って落ち着いた様子で話し始める。

「山田君、彼らの住む世界は今よりも向上した未来だ。しかも未来の最新技術を用いた兵器を所持している。万一、彼らに危害を加えるような真似を取ろうものならきつと彼らはその力で抵抗する筈。それに過去に位置する我々のこともよく知っているし、振り返りにあう可能性は否定できない」

「……………」

「しかし彼らは進んで、我々とコミュニケーションを取ろうとしている。あの友好的な姿勢は賞賛に値する。それならば我々にも、彼らの誠意に応える義務がある……。そう思わないか？」

「それは…むう」

その場で足を止めた千冬は真耶に向き直り、さらに論ずる。

「自分の子孫の言うことを信じなくてどうするんだ？ 山田君」

「えっ!? わ、私の子孫ですか!? でもあの六人は……」

「もう一人いただろう。我々に事情説明をしてくれた彼らの上司、トウキ・ヤマダさんだ。思いつき”ヤマダ”と名乗っていたじゃないか」

「あの男の人が、私の……」

「それに、病室でミハルが口にした”オリムラ司令”という人物は恐らく私の子孫……。数奇な事に私達の子孫が、自分達の教え子を託したんだ。我々先祖を信頼して」

千冬はずっと思っていたことがあった。ミハル達の間には偏見のような隔たりがなく、むしろ心の底から強い絆で結ばれている。さらにはISの知識も豊富で抱える問題の重さも理解し、正面から向き合おうとしている。教育者の立場からしてこれ程模範になる人間はそうそういない。そんな彼らを、自分達の子孫がよろしくと任せた。ならばやるべき事はただ一つ。

先祖として、教師として、子孫の信頼に応えること。

「我々教師は、教え子を正しい方向へ導くことが使命だ。彼らがこの世界の悪影響に侵されないよう、しっかりと教育していこう」

「…そう、ですね！ 頑張りましょう！」

真耶も納得し、二人は改めて情報共有のために職員室へ歩を進める。今年度の仕事がより忙しくなるのは覚悟の上。絶対に醜態を晒すわけにはいかないのだ。

だがこの時、年長者らしく真耶を諭した千冬の中には、もう一つの目論見があった。

それについては……また後々に明かすでしょう。

「フッフ……」

——【次回予告】——

ゲ) それじゃあ、次回予告を始めて行くニヤスよ。

メ・ミ) ニヤスニヤス〜!

ゲ) 次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は、第三の原作キャストのご登場ニヤス。満を持してつて奴ニヤスね。一体誰ニヤス〜? 楽しみニヤスね。

メ) ヒントは、この喋り口調ニヤス。

ミ) ニヤ〜スニヤスニヤスニヤス!

次回、File. 11 『襲撃の生徒会長』

ゲ) お相手はドラゴンエマージェンシー所属、ゲオルク・ボーデ  
ヴィツヒと、

メ) 同じくメイラン・ファンと、

ミ) 一応主人公ポジションのミハル・オリムラでしたっ!

ゲ・メ・ミ) バイバーイ!

(それはぶ〇らじの締め括りじゃアアア——ツツ!)

ゲ・メ・ミ) ギャ——ツ!?



File. 11 《襲撃の生徒会長》

『よゝがだあゝあゝつ！ ぼんどのよゝがだあゝあゝつ！ みんなぶじでよくおびびでだばあゝ!!』

(訳：良かった！ 本当に良かった！ みんな無事でよく生きていたな)

『……アキナ、気持ちはわかるが泣くか話すかどっちかに絞れ』

『うつつうつつ……ぐずつ。……うおおおおくんつ!!』

『よりによってコミュニケーション放棄すんな!!』

「」「」

——調査中のアクシデントから100年前の時代へと流れ着き、その先で邂逅したIS学園に保護してもらったこととなったドラゴンエマージェンシー。現在は急遽用意してもらった寮部屋にメイラン以外のメンバーが集まり、改めて司令のアキナとチャンネルを繋いで報告をしていた。しかし……

『うつつ……ぐずつ』

『全く……鼻かめ鼻。おい誰かー！ テイツシユの箱もう一つ頼む！』

「……話、進まねえな」

「うん。そう……だね」

「気持ちはわからなくもないっすけどねえ」

先程からアキナの号泣で報告が一向に出来ていない状態が続いていた。

彼女は立場上厳格な性格で通しているのだが、その本質はとても涙脆く仲間思い。平たく言えば熱血漢なのだ。それ故に何か任務中にミハル達が怪我でもしようものなら誰よりも早くお見舞いや治療にあたるなど、若干過保護な面が目立つ。

『ぐすつ……本当に良かった。危うく私は部下を一気に無くすところだった。生きていて嬉しいよ』

話を戻して、ようやく会話が成立するまで泣き止んだアキナ。バンバンに腫れた目で通信に応じる彼女を見て一層報告しづらくなる一同だったが、代表してエドが口を開く。

「ご心配をおかけしました、司令。ミハル君の咄嗟の判断がなければ、今頃僕らはここにいなかったでしょう」

『そうだな。いい判断だったぞ、ミハル』

「いやーそれほどでも」

『だが承知の事だと思うが、本来であれば処罰事項である事を忘れるな。今回は私の権限でお咎めなしたが、次は十分考えてから行動することだ。いいな?』

「はい、了解です」

素直に敬礼をとり、ミハルは忠告を噛みしめる。

(ガチャツ)

「ただいまやで〜。ラズリフライヤーから例のもの、とってきたで〜」  
「おかえりなさい。メイランさん」

と、そこへメイランが帰ってきた。

ボテボテの袖越しに掴まれていたのは、A3サイズのアタツシユケース。ゆったりとした動作でみんなの前に移動すると、それをテーブルの上に置いて留め金を外し、中身を見せる。

「とりあえず中身確認してや〜」

中に収められていたのは、大きめの拳銃のようなグリップに分割された銃身やマガジン、その他細々としたアイテムが数点。ケース蓋の

裏にはその使い方を記したプレートがはまっている。

「おお、リムービングセットか!」

「せやで〜。TPSの所有するフライヤーには必ずこれが積んであるから、なんか使えるかもしれないと思うてとってきたんや〜」

「これは心強いですね。回数は限られますが、ISが使えない環境下では大いに役立ちますよ」

『備え付けのリムービングセットを使うのはいいが、場面だけは気をつけるよ? こちらにいた時と違って定期的なエネルギーパックの補給がないのだからな』

メイランが持ち込んだのは、デノア・コーポレーション製のアタッチウエポンツール・リムービングセット。ISの剥離機を一般化させたもので、ラズリフライヤーに積んであったものを引っ張り出してきたようだ。しかしアキナの忠告通り、使用には付属のエネルギーパックを消費する。供給が断たれているこの状況では使う場面が限られてしまう。

「極力、事は未然に防げか」

『その通りだ。……ん? そうか、わかった。では一旦通信を切るぞ。これから忙しくなるのでな。風邪など引いてくれるなよ?』

「」「了解!」「」

通信を切り、やや脱力した様子を見せる一同。だがゲオルクとメイランだけがその目に真剣味を帯び、顔を見合わせた。

「……いつからだ?」

「多分、ラズリフライヤーを格納しとる地下倉庫を出た時からやな〜。せやけど尾けとる人間に大体察しはついとるし〜、いずれ関わる人やからほつといたで〜」

「まあ、そうだな」

二人の会話で察したのか、全員の目が一齐にドアの方へ向けられる。

「……誰だ？」

「思い当たるとすれば……あの方ぐらいでしょうか。確か时期的にもまだ在学中だったはずですし」

「あー、成程……」

一拍置いてゲオルクが立ちあがり、部屋の扉近くまで歩み寄る。そして一拍開けて、外で盗み聞きしている人物にこう呼びかけた。

「いつまで立ち聞きしているつもりだ。とつとと出てこい、更識の当主」

すると

「流石……といったところかしら？ まさかおねーさんの気配を随分前から察していただなんて。同年代でも未来人の感覚って鋭いのね」

丁寧に扉を開け、水色のショートヘアーの女生徒が入室してきた。手にした扇子を口元に当ててパツと開き、達筆の良い”お見事!”の文字を見せる女生徒。どこかつかみどころの無い雰囲気を漂わせる彼女に、ミハル達は一樣に微妙な表情を見せる。

「……とりあえずテンプレになるっすけど、名乗って欲しいっす」

ジャンが名乗るように言うと、女生徒は待ってましたとばかりに目を細めて扇子を閉じ、要求通り自己紹介を始めた。

「私の名前は更識楯無よ。IS学園の生徒会長であるとともに……」

学園最強”の名を名乗らせてもらっているわ」  
「「「「！」「」」」」

更識楯無と名乗った彼女は腕を組み、彼らの前に立つ。どうやら自分を大きく見せようとそれなりに気取っているらしいのだが……少々穴が大きすぎた。

「……ってあれ？ それじゃあ織斑先生はどうなるの？」

「へ？」

「たしかに”学園最強”なら、”世界最強”の織斑先生に勝ったことになるな」

「あ……いや、その……」

「それだけじゃありませんよ？ 山田真耶先生も、かつては日本代表候補生だったデータも残っています。加えてこの先生方もかなりの強者揃いですし、教鞭を振るう者としては妥当な方々ばかりです」  
「ああ……あうう……」

引き立たせるつもりが、かえって思わぬ墓穴を掘ってしまった楯無。そしてトドメを刺す一言がミハルの口から放たれた。

「あ、わかった！ つまり”自称学園最強（笑）”ってことか！」

「ちよつと!？」

身も蓋もない言動であえなくK.O。その場にへたり込んで涙目になってしまう。

しかし正論といえば正論だ。彼女の口振りからは他の教師陣に勝利したという様子は見られない。明らかな楯無の妄言と見て間違いないだろう。

「更識家……この時代の対暗部として存在した家系だったな。最もその当主であるこの女に関するデータは、色々皮肉ったものしかなかった

たが」

「いい面と悪い面がはつきりと浮き彫りになった人物として我々の中では認知されていますけど、未だに賛否両論が激しい方なんですけどねえ」

例のごとく、未来人側は楯無のことを熟知していた。はやくもメンタルが磨り減った楯無もなんとか復帰し、いつものペースに戻る。

「そ、その辺りは周知なのね……。まあいいわ。今回おねーさんが素直に出てきたのは単なる興味本音よ。遠い未来からやってきたのなら、良い機会だし色々なことを教えてもらおうと思ってるね♪」

切り替えが早いというか、場の主導権を握ろうと再び妖艶な笑みを浮かべる楯無。反応が良さそうと睨んだジャンのとなりに座って身を寄せ、取り入ろうと企む。……が、早々にメイランが割って座り直し、色仕掛けは失敗に終わった。

「お聞きしたいこととはなんででしょうか？ 最初に断っておきますが、こちらの機密的な事はご遠慮願いたいのですが……」

「冗談よ。本題はここから。——あなた達、特殊な専用機を持っているって事情聴取の時に言っていたわよね？」

恐らく事情聴取に話した事も彼女には筒抜けになっているようだ。

「はい。そうですけど」

「実はさっき先生方の話し合いから、あなた達TPSとIS学園とで協力関係を築かないかっていう案が出たの。TPSの保有する数多のデータや行き過ぎた譲歩をしない代わりに、保護している隊員のあなた達に学園の有事対処に協力してもらえないかって。あとはそのための戦闘データの取得かしらね。勿論データの漏洩を防ぐためにプロテクトをかけるわ。心配なら立ち会っても構わないわよ」

「つまり、俺たちをIS学園の護衛に利用できないかと考えた訳か」「うーん、わかりやすくすればその通りかしら？ 別にあなた達を軽視しているわけではないわ。ただ未来のISの力を、この学園を守るための力として貸してほしいだけ。私もいつも有事に乗り出せるわけではないから、人手が欲しいのよ。ダメかしら？」

彼女の申し出にミハル達は顔を見合わせる。確かに自分たちの力は未来の最新技術を用いた産物。既存データや立ち回り方を把握すればある程度の有事には対処が可能だ。しかもIS学園には救出と保護の恩がある。これを仇で返すわけにはいかない。

全員の答えはすぐに一致した。

「——よっしゃ、なら一肌脱いでやろうじゃん！ こっちには助けてもらった借りがあるし、オリムラ司令達もきつとわかってくれる。それに俺たちの専門は非常事態の対処。ドラゴンエマーゼンシーの縄張りだ！」

「ああ。プロテクトの件ならジャンやメイランがいれば安心だろう。幸いIS学園には理解者が多い。活動拠点としては整った環境だ。こちらこそよろしく頼む」

2046年の時代で動くには、最初にミハル達を受け入れてくれたIS学園の協力と支援が必要不可欠。考えがまとまった彼らは楯無に受け入れの意思を示した。

「……ありがとう。感謝するわ」

彼女も頭を下げてミハル達に礼を述べる。これで仮組みではあるものの、TPSとIS学園の協力体制が成立した。後の詳細をどうするかはアキナ達の仕事になる。

ひとまず現時点での進行状況を報告するべく、エドが一度席を立つ

て部屋から退室。そして残されたメンバーでフリートークへと洒落込むわけなのだが……

▽△▽△▽△▽

「……………何があつたんです？　これ……」

一仕事終えたように満足げな表情のメイラン。

呆れた様子のマツリ。

ベッドの上で仰向けになり、息を荒げている楯無。

その三人に背を向けて耳を塞ぎ、整列&正座する男子ーズ（一名たんこぶ付）。

帰ってきたエドの視界に飛び込んできたのはそんな光景だった。

「エドさん、連絡出来ました？」

「ええ、何の問題もなく——じゃなくて！　こつちの方がよっぽど問題ですよ！　一体何があつたんですかこれは!?!」

「いやー、まあ……………何といえますか……………」

エドが通信の為抜けているほんの数分間、メンバーのいる部屋ではこんなことが起こっていた。

ミハル達とスキンシップをとろうとした楯無は、まずミハルに寄り添ったり耳打ち等の行為を行った。異性にそこまでされた経験がないミハルは興奮して鼻の下を伸ばすも、すぐにマツリの放ったハリセンアタックで成敗。続けて楯無はマツリに狙いを定めた。しかしアキナ直伝の瞬○殺のモーションで回避されてしまい、やむなくメイランにターゲット変更。素早く背後を取って胸を揉む行動に出た。

ところが感じるどころか全く反応がなく、焦った楯無は隙を作ってしまう。そこを突いたメイランが背後を取り返し、お返しとばかりに胸を揉みしだいた。それも延々と。



しばらくして楯無が感じ始めた為、マツリが男子ーズに後ろを向くよう指示。結果楯無が果てるまでメイランの攻めは止まらなかった。

「メイランさんも何やってるんですか……」

「いや、あない徐ろにやられたら、やり返さな気が晴れへんもん」

「だからと言ってやり過ぎですよ。ああもうこんなに着衣を乱して……楯無さん？ 大丈夫ですか？」

「ハア……ハア……な、なんとかね……それにしても恐ろしいわ。あんなに大人しそうな見た目のに……」

（チーム内でも裏番長的な立ち位置にいますからねえ、メイランさんは……）

改めてメイランの恐ろしさに畏怖しつつ、エドは未だ沈黙する三人に声をかけて復活させる。楯無の介抱にはマツリをつかせ、TPS上層部からの返信を口頭で伝えた。

「オリムラ司令は緊急会議の為席を外しているそうなので、代わりに出たトウキさんがオリムラ司令に伝えるそうです。詳しいことはIS学園との話し合いまでに決めるとの事ですので、今ここでの返答は出来ないということでした」

内容を全員が把握し、楯無は扇子を広げて”受諾”の文字を見せる。

詳細は後日設けられた話し合いに持ち越しとなり、ミハル達は一旦小休止に入る事に。各々やるべきことやIS学園の施設探検などに時間を割く事だろう。

すると唐突に楯無がこんな提案を持ち出した。

「そうだ、せっかくこれから仲良くなる間柄なんだし、あだ名のつけ合いっこしましょうよ！」

「えっ、あだ名の……つけ合いっこですか？」

「ええそうよ。楯無さんって言われるのは嫌じゃないんだけど、ちよつと距離を取られている感じがするのよねえ。もつと気軽に『たっちゃん』って呼んで欲しいな♪」

「というか、自分の呼び名が既に決定されているような気がするんスけど」

どうやら暫く厄介になる関係上、堅苦しさを取り払おうとしているらしい。しかしドラゴンエマーゼンシー常識陣は困惑する一方で、混沌勢は円陣を組んでヒソヒソ話し合う。後者は何を企んでいるのだろうか。

「いや…今日会ったばかりの人にそう馴れ馴れしく呼んでくれと言われなくても、ねえ?」

「変な違和感の方が勝って言いづらいですよ」

「んもう、お堅いわねえ三人とも。じゃあ一人づつでいいから、ちよつと言ってみましょうか! ハイ、じゃあ最初はエド君から!」

「えーっ!?! 僕からですか!?!」

断るわけにもいかず、結局エドから順に愛称を口にしていく羽目に。混沌勢がそそくさと後半の方へ回り、まずは常識陣からスタート。

「うーんと……じゃ、じゃあ…楯無さんで」

「あ、私も楯無さんで……」

「自分も同じっス……」

「ちよつとー? それじゃあ意味ないでしょう? 後でやり直し」

「やり直しって……」

続けて混沌勢の番になった。

楯無の視線がミハルに向けられると、彼は一步前に進み出る。そして

「うおみー！」

「へっ!？」

一文字も引つかかかっていない愛称を出した。さらに

「ベツキーー！」

「ちよっ!？」

「斎藤千〇さん」

「待て待て待てッ!!」

メイランもゲオルクも変化球並みの愛称を持って来る始末。まあ関係がないといえば嘘になるが、それはさておき。

「三人とも！ それ私と全然関係ないじゃない！」

「ありますよ？ 主にゲオルクが言ったあだ名で」

「CVを出すなCVを!!」

「リア充はいねが〜！」

「リア充って何よもうっ!!」

「千〇さん、第二子ご出産おめでとうございます。一年ぐらいたったけど」

「えっ？ あ、ありがとうございませ……じゃなくて！ そうだけど違うって言ってるの！」

「ええ——!？」

「タダ〇ニを持ってくるなー!!」

もうペースは完全にミハル達混沌勢に移っていた。これを狙っていたかどうかは定かではないが、いずれにしろ楽しそうで何よりである。

「……結局やり直しはしなくていいのかしら？」

「もう……それでいいんじゃないですかね」

「そうっスね……とりあえず気晴らしに何か飲みにも行きます?」

「賛成」

---

【次回予告】

---

はい、マツリです。毎度毎度疲弊していて突っ込む気力も失せています。

さて、今回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は、IS学園に保護された私達の日常をちよつとだけお見せします。特にやることは決まっていませんが、ミハル兄達ができることは大体想像できますけどね。趣味多彩な面々ですから。

次回、File. 12 『未来人の小休止』

私は何をしようかな?

## File. 12 《未来人の小休止》

それから数日後経ったある日。

この日は前々から予定されていたIS学園とTPS、両者の正式な話し合いが行われた。

当事者代表としてリーダーのエドと最年長のゲオルクが出席し、朝から昼過ぎにかけて情報共有や今後のやり取りについて議論が交わされた。本来であれば全員出席が望ましいのだが、あくまで上層部同士の会議のためメンバーは最低限の出席に留められた。その間の他のメンバーは千冬から学園内の施設を自由に使つていいと許可が下りているためそれぞれ自由な時間を過ごすことに。

今回はそんな彼らの普段の様子を観察していこう。

—ミハル・マツリの場合—

「フツ、ハアッ！」

「ぬっ！ とりやあつ！」

早々に朝食を済ませたミハルとマツリは早速剣道場を訪れ、共通の日課である手合わせを行っていた。

二人とも2146年まで続く篠ノ之流剣術の使い手であり勿論戦闘スタイルは剣道……なのだが、そこは兄妹。同じ篠ノ之流剣術でも違いがあつたりする。

マツリは師範代の肩書きもあつて典型的な一刀流がメイン。しかし得物の持ち方を変えたり剣道ではありえない得物を手放しての離れ業等々、その立ち回りにはやや独創的な要素が取り入れられている。

一方のミハルは二刀流用の竹刀二本で戦う双剣型で、縦横無尽に駆

け回るトリツキータイプ。本人曰く篠ノ之流剣術をベースにしているとのことだが、殆ど彼自身のオリジナルとっていいくらいベースの欠片が見つかからない。一応正式な篠ノ之流剣術もできるのだが基本ミハルの戦闘スタイルはこの双剣型である（これも本人曰く『ミハル流二双剣術』と名付けられている）。

「もーらいー！」

「あたっ！……のツ、よくもやったわね！」

一瞬の隙をついたミハルの竹刀がマツリの後頭部を叩き、彼女の闘争心に火がついた。先程よりも立ち回りに精密性が増し、ミハルも段々と追い込まれてゆく。そして

「お返しー！」

「おわわっ!?!」

着地した瞬間を狙われ、ミハルは足をすくわれて背中から転倒。大きな隙を作ってしまった。チャンスとばかりにマツリが上段構えで竹刀を振り下ろす。

「てえええいつつ!!」

「なんのツー！」

だがミハルも負けていない。咄嗟に竹刀の一本を足元に投げて左足でキャッチ。眼前に迫る竹刀の切っ先をもう一本の竹刀で防ぎつつ、蹴り上げるようにマツリの首元に切っ先を突きつけた。

「……………」

互いの竹刀はギリギリ届かず、寸前で止まっている。誰がどう見てもこの手合わせは引き分けだった。

「…はあーっ！ また引き分けかよ！」

「これで何回目かしらね……。私達互角の勝敗が多過ぎてはつきりした決着ついた記憶がないわ」

引き分けとわかって脱力し、畳の上に大の字に倒れる兄妹。この時代に訪れる前からずっと手合わせをしている二人だが、ここ最近一向に決着がつかず引き分けばかりが続いているのだ。もつと言えばISを用いても結果は同じらしく、かれこれ五年程この膠着状態が続いているという。

「でもまあお互い、おんなじペースで強くなってるってことじゃねえのか？ これだけ互角が続くとさ」

「まあ…いい意味では、ね」

起き上がった二人は壁際に置いてあるタオルやスポーツ飲料を手にし、汗を拭くなり水分補給をするなどして体を休める。

先祖が代々受け継いできた由緒ある剣術をミハルとマツリは幼き頃から憧れてきた。他の門下生たちと共に切磋琢磨する日々を送り、年も鍛錬も重ねて二人は篠ノ之流剣術を習得。そこから二人は違う道を歩みだした。

ミハルは己の特性と向き合って新たな道を切り出し、マツリはベースをそのままに多少のオリジナルを加えた道をそれぞれ歩みだしたのである。

「それにしても俺達のISデータを取得する流れはわかってたけど、対戦相手って誰だろ？ 少なからずチームメンバー同士じゃないっというし…やっぱ教員の人かね？」

「そうじゃない？ 楯無さんを除いた生徒会メンバーや上級生は色々忙しいらしいから。その辺りは調整しておくから心配しないでいって千冬さんが言っていたわ」

一呼吸入れつつ他愛もない会話を交わす二人。するとミハルがふと思いついたようにこんな話題を切り出した。

「あとは……あ、丁度明後日だったけか？ 例の”Xデー”って」  
「え？ ……あー、言われてみればそうね」

ミハルの言葉にマツリは剣道場のカレンダーに目を移す。そして彼の言う日付を見た時、彼女にも合点がいった。

『織斑一夏さんが世界初の男性IS操縦者として発見された日』ね  
……」

そう。この2046年が第二の激動の時代と呼ばれるようになった所以はもう一つある。それがミハルが口にした”Xデー”。二人の先祖である織斑一夏が男性で初めてISを起動させた日である。この出来事があった事で2046年は今後の未来が大きく変わるターニングポイントとして位置づけられ、そのきっかけである明後日はXデーと称されているのである。

「未だに謎なんだよなー。俺たちの先祖がISを動かしたメカニズムが。データベースにも解析した類がなかったし」

「今までにも調べた学者はいたそうだけど結局分からず終い。遺伝子配列はこの時代の人達と何ら変わりはないかつたし、ある所じやこれは篠ノ之束の陰謀じゃないかって言う人もいるみたいよ。色々囁かれてるけど、結局のところはつきりとしたことはわかっていないのよね」

未来の技術を持ってしてもその真実は暗中であり、未だ解明には至っていない。2146年時に稼働しているISはコアの仕組みが根本から違うため男女共用が可能なのだが、この時代はまだ篠ノ之束



しか製作できない完全なブラックボックス状態なのだ。

「この際だし調べてみるか？　せつかく2046年に来てるんだし」  
「無理よ。千冬さんは学園から出ちゃダメだって言ってるんだから。あくまで私達は保護扱い。ある程度の自由は許されても活動範囲は限られているわ」

それもそうだと、ミハルは納得してスポーツ飲料をくつと飲み干す。

「つまり現状維持で織斑一夏をここに連れてくるしかねえと……。ま、そうしないと何も始まらないか」

空になったペットボトルを器用にリフティングしつつ、剣道場の開いた窓から外のゴミ箱に向かって投擲。入ったことを確認し、ミハルは小さくガッツポーズをとった。それをマツリはやれやれといった具合で眺めつつ、再び竹刀に手を伸ばす。

「じゃあミハル兄。一呼吸ついたし、もう一試合しよっか」

「おっしやあ！　今度こそ決着つけてやらあ！」

「フフツ、つけばいいけどね」

ミハルも二刀流用の竹刀を両手に持って畳の上に立つ。既にやる気満々でマツリに早くしろと言わんばかりに催促する。元氣一杯でよろしい。

それに応えて得物を構え直し、彼の前に立つマツリ。先程よりも真剣な表情となった二人が静かに一礼した………直後

「おおおおオツ!!」

「たあああアツ!!」

(バシーン!!)

—エド・メイランの場合—

「……………」

「んふふ〜……………ジュルツ、ゴクツ」

会議も終わった昼食後の昼下がり。

陽光が差し込む校内の図書館には、読書にふけるエドとメイランの姿があった。

(イギリス国営鉄道の脱線事故……………今から二年前の出来事のようなですね。この頃だとはわかっていましたが……………彼女と出会ったら僕はどうすればいいのでしょうか……………)

「……………ほああく〜！ んふふつ、ゴクツ」

情報統括管理センターでも、これまで収集された情報やデータを閲覧することは可能である。しかし基本は電子化して管理されているためタブレット端末や投影ディスプレイ越しにで見ることができない。逆に言えばこのみならず、2146年では紙製の本や新聞から情報を得ることが薄弱の一途を辿っているのである。しかしこの時代の若年層は今こうしたアナログ方式が流行りつつあり、エドもメイランもそんな流行に興味を抱いていた。

そのためアナログ方式で調べられると知った二人は早速校内の図書館へと足を向けたのである。

「ジュルルルツ、ゴククンツ」

「……………あのー、メイランさん？ 先程から生唾を飲み込む音ばかり聞こえてきますが……………一体何をお読みになっているんですか？」

「ん〜？ ああ、これやで〜♪」

メイランの調べ物が気になったエドがそう尋ねるとメイランは読んでいた本の表紙を見せる。それは2046年で発行されているスイーツ専門の雑誌であり、いかにもスイーツ好きの彼女が食いつきそうな書籍だった。

「この時代で最先端& a m p ;期間限定スイーツのチェックやで〜！  
ウチらの時代のスイーツもええけど、やっぱりウチとしては過去のスイーツも捨て置きへんわ〜！ 今からでも千冬やんに掛け合ってみようかな〜？」

「本当にスイーツに目がないですね…メイランさん」

まあ情報の閲覧といっても人それぞれである。任務関係もあれば趣味も好みの情報を調べることも含まれる。そんなメイランが2046年のスイーツを調べている間、反対にエドが読んでいたのは数年間の新聞記事をまとめた書籍だった。

「それでエドやんは何を読んどの〜？」

「僕ですか？ 僕はこちらの本を……」

そういつて読んでいるページを彼女に見せた。

「……コドモダカラ、ヨメマセーン」

「いや読めないのは仕方ないですよ？ 全文英語ですし。あと某教育番組のキャラクターの真似をしないで下さい。方々から怒られるので」

纏めた新聞記事は全て英国の新聞で当然のことながら中身は英語オンリー。メイランがわかるはずもなかった。目が点になる彼女にやんわりとツツコミをいれつつ、エドは開いているページの記事を簡単に代読することに。

『2044年2月9日。イギリス北西部を走行中の列車が陸橋上で脱線事故を起こし、転落。乗員乗客全員が亡くなった』……という悲惨な事故の記事ですね」

「ありやまあ可哀想やなく。でもその記事がなんで気になったんや？　そこからずーっとページめくってへんし〜」

「この記事の隣にはその事故で亡くなった方々の名前が明記されてまして、もしかしたらと思って探していたんですよ。そうしたら、ホラ」

記事の隣には確かに全員分と思しき人名がズラッと書かれている。エドはその中で左列側の真ん中あたりを指差した。

「え〜つと〜、何やろ〜？　マリーと……トウマス〜？」

「マリー・オルコットさんとトーマス・オルコットさん。当時この列車に乗り合わせていた方々です。そしてこの姓を見ればお察しだと思えますが……」

「エドのご先祖様かいなく〜？」

「ええ。父から同じ名前の先祖が列車事故で命を落としていると聞いたことがありますし、ちょうど時期も重なりますので、間違いないかと……」

記事にはテロの可能性はなく、レールの歪みが引き金となって発生した整備ミスと締め括られていた。更にエドが言葉を繋ぐ。

「……実はこのお二人、後のイギリス代表生であるセシリア・オルコットさんのご両親なんです。お二人が亡くなってしまったことで彼女はオルコット家を継ぐ羽目になり、遺産目当てで近づく親戚が追い討ちをかけた結果、誰も信じる事が出来なくなってしまうんです」  
「それ辛い話やなく……。ご両親の事故死だけでもいっぱいはいっぱいやのに、金の亡者の波が押し寄せてしもうたから〜……」

波乱万丈な先祖の道のりに湿っぽい空気になる二人。

しかしエドは考えていた。信じる心を失った先祖の前に、自分は何が出来たのかと。どうすれば考え方を変えることができるのか。一見して歴史の改変に繋がることではないかと思われがちだが、今や未来を守るためには時に子孫が先祖に意見や助言をすることも必要な事なのである。

「エドやん、男としても子孫としても一肌抜いだらなあかんわ〜！」  
「ええ、勿論ですよ。このまま悲しい思い違いをさせるわけにはいきませんからね」

先祖の心を救う覚悟を固めたエド。手にした本を閉じた彼の目に、一点の曇りはなかった。

「さつてと〜、ウチは引き続きスイーツ調査やで〜！ 目指せスイーツ全国制覇や〜！」  
「アハハ……頑張ってください」

―ジャン・ゲオルクの場合―

「いやー、まさかIS学園でTVゲームができるとは思ってなかったっすねえ。しかも殆どがファミオンとかメガド○イブとか、通からすれば熱くなるものばかり」

「織斑女史曰く、数年前に女生徒から没収したものを準備室にほったらかしにしていたらしいな。その女生徒はかなりのレトロゲーマーらしくて、準備室にあったカセットの中にはプレミア物もあるらしいぞ」

「いいっすねー。せっかくだし譲ってくださいませんかねえ」

「二応学園の備品扱いらしいから難しいぞ。まあ譲ってくれるのなら、俺はありがたく頂くがな」

学園の校舎三階にある視聴覚室。

そこを借りていたジャンとゲオルクの二人は、準備室に置いてあった前時代のゲーム機でTVゲームを楽しんでいた。二人とも筋金入りのゲーマーであり、特にこうしたレトロ&amp;アナログ系のゲームは大好物。なので見つけた時の反応は某船○市非公認キャラクター並みのテンションまで引き上げられた始末である。まあすぐに案内役の千冬の制裁が下されたのは言うまでもない。

『勝者、○影!』

「あつ、やられちゃったっス」

「しっかし檜○さんは相変わらずいい声だな。こつちまで気分がノつてくる」

大型モニターのTV画面で贅沢にレトロゲームを楽しむ二人。二人並んで胡座をかいてコントローラーを握り締めるその姿は、さながら某番組感を彷彿とさせる。

するとそこへ。

「(ガラツ)：随分と楽しんでるみたいだな。最も私はそういうのに疎くてわからんが」

「あ、織斑先生」

仕事を終わらせてきた様子のゆうk：もとい千冬が合流。二人の隣に立つと、TV画面を眺めながら溜息をつく。

「未来の世界にはゲームとかはないのか?」

「あるにはあるんすけど：ありや殆ど一種のスポーツ扱いされてるんすよ。技術を盛り込みすぎちゃって。対象的にこういったレトロゲームなんかはこつちだとゲーム機カセット共にメチャクチャ高いつス。それこそ初代ファ○スタやゼビ○ス、スト○ートファ○ターなんて平気で6、7ケタぐらいの値がつくぐらいで」

「買えないこともないんですが、生憎自分もジャンも他方面で金がかかるものでして。なので数年に一回できるかできないかのレベルなんですよ」

2146年の世界では主に臨場感追求やプレイアブルキャラクターとの一体化技術など、規模の大きいものが殆ど。そのため殆どスポーツとして捉えられていて、このようなインドアかつコントロールを握り締めて画面内で楽しむといった光景が希少となっているのである。

「スポーツ、か。因みにお前達という他方面とはどういうものだ？」

「自分は本国の方で考古学研究所の特別研究員として出入りしてしまっています。その関係で遺跡発掘や器具の調達に修理など、かなり出費が嵩みます。一つの遺跡を調査するのは楽しいものなのですが、それにはとてつもない金額がかかるんです」

「TPSに勤務しながらも考古学に携わっているのか。両立するのは大変じゃないのか？」

「慣れれば問題ありません」

何の意味かは不明だが、サムズアップしてドヤ顔するゲオルク。そんな彼に千冬はやれやれと瞑目するしかなく、流れでジャンにも話題を振る。

「ジャンはどうなんだ？」

「自分は主にPCや端末とかの電子機器いじりっすかねえ。データのキャパ量増加や取り込み時の負荷軽減とか、この手の改造ってハマると結構楽しくなっちゃうんすよ。でも改造にはそれそうなの部品が必要になるわけ」

「そしてその部品や、ついつい使えそうな部品まで買い込んでしまう……といったところか？」

「アハハ……凶星っす」

現代においても未来においても、電子機器をオリジナル制作や改造を施したりする人間の思考は変わらないようだ。

再びTV画面に目線に戻すと、キャラクター選択をしていたゲオルクがジャンにこう持ちかけた。

「ここから先はジャン、口調は分かっているよな？」

「あーあれっスか。いいつスよ」

「あれ？」

そう言って二人が咳払いし、一拍置いた次の瞬間。

「んどのキャラだっけえ〜？ あこれだなあ〜」

「ん最後にいく、全員耐う〜」

「いってみよかあ〜」

「!？」

一斉に若本○夫ボイスになった。

「空気を読むとお、二人ともこのキャラになるう！」

「なるう！」

「なんなんだその間延びした口調は……」

「どうもお、みんな大好き若本○夫ですう」

「自分達二人があ、彼が演じるキャラクターアを使うときはあ、いつもこの口調に統一されますう」

「どうでもいいが無性に腹が立つなその口調……」

引き気味の千冬を置いてけぼりに、続けて二人はステージを選択する。



「んん〜ステージ魔界〜」

「おお〜、魔界でみんな耐しようぜえ！」

プレイヤーの收拾がつかないまま、ゲームは戦闘画面へ。

「俺の耐どれえ？」

「俺のお、俺の耐どれだあ？」

「どれなのお？ わ、わからないい」

「おどれだあ？ わつからねえ」

「これか？ これかあ？」

「おお前かあ！ どお…ぶるああ！」

まあ当然のこと、同キャラクター同士で戦うことになればそうなるわけ。二人とも操作するキャラクターが分からず混乱状態。それでもモノマネだけは決して緩めない。

「……………」

そしてどう反応すればいいのかわからず戸惑う世界最強が一人。  
ブリュンヒルデ

「どおーだいフ○田くん、麻雀やらないかあ」

「また、サザ○さんに怒られたのかあい」

「どおーだいフ○田くん、この後一発う」

「うしよく痛い」

「オイ、○子お。あ、それ兼ね役だ」

もはや言いたいだけだとツツコミたくなる程、二人のモノマネもヒートアップ。目の前の作品枠を乗り越してご長寿アニメのキャラクターにまで手をつけ始めた。

「危ない危ないまだ、死ななあ〜い」

「ん〜このキックう」

「ところがばつこおくん」

「そんなん言つてたつスか？」

「……………」

ツッコむ気力の失せた千冬には最早この二人のモノマネを聞き続けるしか道は残されていなかった。

ちなみにこの戦いはジャンが勝利を収めた。

「プレイに集中出来ない」

「ぶるああ！」

「誰勝ったのお？ ……あ俺の耐があ、勝ったあ」

（疲れないのか？ この二人は……）

残像だ☆

---

【次回予告】

---

ほな、いつ出るかわからん次回予告始めていくで〜。

（メイランさんメタイ！ メタイからそれ！）

次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は〜、ついにウチらの専用機が活躍する模擬戦やで〜！ アギヤー！ いてこまずでワレ〜！

（それ口調似てるだけでCV違うわよね……）

（メイラン先輩張り切ってるっスね〜）

（某ソーシャルゲームやってないとわかりませんよそのネタ……）

ウチの出番はまだ先らしいから、それまでウォーミングアップしとこかな〜！アチョー！

（それも違うわよ……）

（あす〇んのキャラっスね、それ）

次回、File. 13 『影差す模擬戦』。

ウチの相手は誰やろなく？ 早く拳を交えたいわく!!

(と、その前に自分らの模擬戦が先っス！)

(乞うご期待だッ！)

## File. 13 《影差す模擬戦》

「Xデー…ですか」

その日、ミハルとマツリを除いた四人は一つの部屋に集まり、TV画面を神妙な面持ちで眺めていた。

そこに映し出されていたのは一人の少年の顔写真。一見するとミハルに似ているようだが、顔写真の下にはその少年の氏名が明記されていた。

「西暦2046年2月24日。都内某所で行われたIS学園受験会場にて順路に迷った織斑一夏が、偶然入った部屋に置いてあったISに触れて起動させた。この出来事は後に共用稼働に繋がる重要なデータとして永久保存が決まることになる…。彼の存在がなければ今頃俺たちもここまでたどり着く道を歩むことはなかっただろうな」

彼の名は『織斑一夏』。IS学園で勤務する織斑千冬の弟であり、”つい今しがた”ISを動かしたとして速報のニュースが流れたのである。放送している番組は詳しいことはわからないと報道しているものの、既にこうなることを知るエド達からすれば遂にこの日を迎えたのかという微妙な雰囲気は漂っていた。

「でも未だにわからんやね〜。いくら作者の篠ノ之東博士と接点があったとはいえ、当時の織斑一夏さんはどこにでもおるような中学生やで〜？もし噂通り篠ノ之博士のカラクリがあったとしても、一夏さんを世界初のIS男性操縦者として祭り上げる明確な理由もないで〜？」

「ただの親友の弟自慢にしてもたちが悪過ぎるっスね」

「ですが、彼がこの学園に来ること自体が間違いというわけではありません。彼がふれあい、時に拳を交えた事でその影響を受けた人々は多い。現に僕たちの先祖がそうであるように」

「せやなく。みんなみんな、一夏やんと出会って変わっていったんやね〜」

「行動や考え方は多少理解しがない部分が目立つが、少なくとも彼が周囲の人間に与えた影響は大きい。少年誌の主人公にも劣らぬ熱さと、分け隔たりなく手を差し伸べる優しさ。今の世の中のような乾いた環境には、彼のような存在も必要なのかもしれないな」

織斑一夏がこのIS学園で過ごすことはわかっている。しかし具体的にどのような過ごし方をしてきたかについてはわからない。過去にいる彼らには、未来人として本来の正しい歴史に繋がるように先祖達を導く義務があるのだ。

で、肝心の子孫は何をしているかというところ……

「（ガチャ） お待たせみんなー」

「あ、帰って来たっス。結局ミハっち何処にいたっスか？」

「……それが寮の大浴場が今日から使えるって聞いて朝早くから入ってたみたいで、まさかと思っただけに見に行ったら「水泳大会だーッ!!」とかいってバシャバシャ泳いでたから水面の底に沈めてきた」

「「はっ!?!」」

実の妹に溺死されかけていた。

「いいいいいやいや!? し、沈めてきたって、一体どういう事ですか!?!」

「安心して下さいエドさん。その後保健室に放り込んでおいたので大丈夫でしょう。3分もあれば復帰できます」

「そういう問題ではないかと……。本当に大丈夫なんでしょうか、ミハル君」

「毎度毎度馬鹿やってシバかれるのはいつもの流れっスからねえ。多分今回も問題ないと思うっスよ、エド」

メンバー内ではとつくにミハル⇨ター○ネー○ーという謎の方程式が成り立っている様子。そんな彼の復帰を待ちつつ、戻ってきたマツリを加えたメンバーは各自テクノリングを取り出した。

「とりあえずミハミハが帰ってくるまで、各々ISの点検やカスタマイズといった方がええなく。対戦するんはこの学園の先生方やし、過去の時代の人間といえど油断は禁物やで」

テクノリングに手をかざすと、投影されたディスプレイの中に各自の専用機のデータが写し出された。各自真剣な表情で操作し、この後の模擬戦に備え始める。

因みにミハルが戻ってきたのはそれから数分後の事である。

「……………O o o h ♪ きつと来るうう♪」

「髪乾かしてこい阿保兄がア！」

(ドガシヤアツ!!)

「ジ○ングッ!?!」

▽△▽△▽△▽△

世間が『世界初の男性IS操縦者が発見された!』という前代未聞のニュースで騒ぐ中、ここIS学園ではさらに前代未聞な模擬戦が行われようとしていた。

IS学園内に建設されたスタジアムの内、太平洋沿岸部側に位置する第三アリーナ。その管制室ではいつもよりも慌ただしい様子で教職員や生徒会の面々が様々な担当にあたっていた。

「まるで蜂の巣をつついたような忙しさですね……………」

「無理もないですよ。未来からやってきたISとそのパイロットの

データ取りだけでも一大事なのに、追い討ちとばかりに一夏さんの件が舞い込んできたんですから。方々からいろんな対応に追われるのは無理ありません」

「I S委員会に対する説明や応対に日本政府との話し合い、織斑一夏を編入させる手続き……やることは山積みだからな。そういえばさつき、生徒会の手伝いとしてミハルとメイランが更識に連れ去られていたぞ」

「うーん、あれ連れ去られたって言うより釣られたって表現があつてるんじゃないっすかね？ あのと二人お菓子と耳打ちで喜んでついていっちゃったっすから」

「アハハ……」

「あんのアホ兄……」

用意されたパイプ椅子に座ったり壁に寄りかかったりして、忙しく動く教職員たちを眺める未来人ズ。ちなみにミハルとメイランはデータ取りの確認役という名目で楯無に引き抜かれてここにはいない。現場を目撃したゲオルクとジャンの証言を聞き、マツリは静かに兄を粛清する意を固めた。

「それはそうと、データ取りの順番ってどうなつたんですか？ 一応山田先生の話だと時間短縮のためにペア3組で学園の先生方と対戦するらしいですけど」

「あーそれならさつきペアを聞いてきたっす。トップバッターが自分とゲオルク先輩、二戦目がエドとメイラン先輩、ラストがミハっちとマツリちゃんの組み合わせで行うみたいっすよ」

「偶然というかなんというか、互いにやりやすい組み合わせになつたな」

「そうですね。テクニク面に強いゲオルクさんとジャン君、兄妹ならではの阿吽の呼吸が持ち味のミハル君とマツリさんのペアなら、これに勝るものはありませんね」

「それをいうなら、エドさんとメイランもですよ。遠距離狙撃と近接

格闘、一見相性が悪いように見える戦闘スタイルですけど、お二人の手にかければ些細な隙を見せないほどの素晴らしい戦い方を見せてくれるんですから。私たちの比じゃありません」

「フフ、ありがとうございます」

そんな感じで和気藹々と雑談を展開しているエドたち。……そこへ、

「やあやあ、君たちが未来からやってきたというIS操縦者達かね？」

「ん？」

黒服の男女を引き連れた禿頭の男がエド達に話しかけてきた。

「報告は聞いているよ。なんでも乗ってきたタイムマシンが壊れてこのIS学園に不時着したそうじゃないか。大変だったねえ」

「……概ねあつていますが、あなた方は？」

「おお、これは失礼。私は油北治といって、IS委員会の日本支部長を務めている」

「IS委員会だと……？　ちよつと待て、織斑教諭の話では我々のことは内密にされていたはずだぞ」

「いやいや報告はキチンと包み隠さずするものだよ。君たちも組織に属する人間なら当然のことだろう？　勝手な行動や隠蔽は周りや組織に迷惑をかけてしまうからさ」

いかにも柔和で親身に話しかける油北。しかし4人とも彼の真意を既に見抜いていた。

後ろの屈強そうな男達に見下すような視線を向ける女性が数名。そして油北の目から感じる悪意。彼らから感じる全てがあまりにも不自然極まりなかった。十中八九、この連中は自分達のC a t e g o r y—TPSのISを狙っている。エド達はそう判断した。



「きつとどこかから情報が漏れたんスね」

「盗聴されたのか、もしくは委員会に金を握らされた第三者の仕業か……。いずれにしろ僕達の存在がIS委員会に知られてしまった。とても危機的な状況ですね……」

過程がどうであれ、この時代のIS委員会の人間にエド達の存在が知られてしまった。まだメディアに嗅ぎつけられていないのは幸いだが、それも時間の問題。いつまで持つか。

と、委員会の回し者と対峙しているその現場へ

「油北支部長、ここは関係者以外立ち入り禁止ですが？」

千冬がやってきた。忙しさも相まって、その表情はかなり険しいものだった。かなり苛立っているようにもとれる。

「これはこれは織斑先生。困りますなあ、こんな重要事項の報告を怠るなんて」

「報告する必要があることでしたので報告しなかつたまでです。今は例の男性操縦者が発見されたことが最も重要事項です」

「何を仰っているのです。確かに弟さんの潜在能力は我々としても素晴らしいものです。しかしIS技術の発展には未来の先進技術が非常に重要なのですよ。今世界は混乱の真っ只中。少しでもそれを正しい方向に戻すために、未来からやってきた彼らの協力が必要なのです」

「分かっていきます。ですがその話はここでする事ではありません。これから模擬戦を行いますので、早々にお引き取り下さい」

わざと千冬の機嫌を逆撫でしているのだろうか。油北は不敵な態度を変えようとせずニヤニヤと笑うだけ。いざとなれば権力と立場を振りかざしてどうにかしようとも考えているのだろうか。なんと

も不愉快な男である。

「おお、怖い怖い。やはりブリュンヒルデには敵いませんなあ。わかりました、今はこの辺にしておきましょう。あとくれぐれも今回の模擬戦の報告を怠らないようお願いしますよ？　では……」

そういつて油北は黒服達を引き連れて管制室を出ていった。

「何というか……いけすかない人間でしたね。あの油北とかいう男」「そうっスね。あいつが何考えてんのかすぐ分かったっス。一応気を付けておいた方がいいっスね」

和気藹々から一転、張り詰めた緊張感から解放されたエド達。また面倒事が増えたと頭に手をやる千冬だったが、すぐにエド達に歩み寄った。

「遅れてすまない。色々立て込んでしまっただけ……。全くあの馬鹿者め、ただでさえ例年より慌ただしい中だということに」

「織斑一夏さんがI Sを動かした件ですネ」

「ああそうだ。お前達にとってはわかりきっていた事だと思うが、知らぬ身からすれば寝耳に水だ。対応が追いつかん」

どうやらイライラの根本は実の弟・一夏にある様子。だが起こってしまったものは仕方がない。メディアで大々的に報道されれば尚更である。

「しかし……あの油北という男、どこから俺達の尻尾を掴んだんだ？　織斑教諭、TPSと連携する話が持ち上がった時に何か反対意見などは出ませんでしたか？」

「ああ、確かに出了。反対したのはいずれも教職員数名で女尊男卑主義に取り憑かれた連中ばかり。もしその中の何人かが連携の妨害を

企てたとしたら……」

「密告……IS委員会の人間に情報を横流しした可能性が高いってわけですね」

ゲオルクの問いに顔を曇らせる千冬。

「ああ、今山田君をはじめとした肯定派の教師達が横流しのルートを洗っている。加えてお前達の仲間や更識も手伝っているらしいから、じきに犯人も見つかるだろう」

そう言っただけで彼女は腕を組み、瞑目する。

未来のISは男性でも搭乗が可能、そのきつかけともいえる織斑一派が早くも行動を起こしたようだ。Category—TPSのISを没収し、一夏を委員会に引き渡すことが出来れば永久にISは女性しか乗れなくなる。反対派が考えた筋書きは大体そんなところだろう。なんとも欲にまみれた連中が企てそうな所業である。

ふとゲオルクが管制室の扉付近に目を向けると、一人の教職員がこちらを睨みつけていた。彼女はゲオルクと目が合うと「チッ！」と舌打ちをして退室していった。

「……………」

「話を戻して模擬戦の開始時間を告げる。これより5分後だ。順番はジャンに話した通りで執り行う。試合時間は30分を3試合。対戦相手は学園の教師だ。どちらかのSEが0になるか、降参した時点で勝敗を決する。以上だ。何か質問は？」

「問題ありません」

「私も大丈夫です」

「自分もっス」

「問題ない」

「よし。それでは各自、準備を整えておくように！」  
「了解！……あ」

つい自分達の祖先のノリで、いつものように敬礼をとってしまったエド達。それを見てギョツとする千冬だったが、すぐに笑みが浮かんだ。

「…フツ、フフツ！ まあいい。好きにしろ」

奇妙な上下関係を感じながらも、千冬は自分の持ち場へと戻るのだった。

▽△▽△▽△▽

第3アリーナの更衣室では、ISスーツに着替えたジャンとゲオルクがテクノリングを操作。模擬戦に向けての最終調整を行なっていた。

二人のISスーツは2046年版のタイプとは大きく異なり、首元までをびっちりと覆う全身タイトのような形状をしている。ライトグレーを基調とし、全身を巡るようにシアンの子回路のような絵柄が入っている。そして肩や手甲、膝や脛には小さな装甲が装着されていた。脇の下から腿にかけてラインが入っているが、ジャンはオレンジ色でゲオルクは黒とそれぞれ配色が分かれている。

「ゲオルク先輩、”腕”の調子は万全っスか？」

「フ、愚問だな。問題ない。お前も”鎧”の方も抜かりがないようにしておけよ」

「メンテもカスタムもパーペキにしといたっス。いつでもやれるっスよー！」

「ナイスよナイス！ ヴエエエリイイナイス！」

「波紋使いはお呼びじゃないっス……」

まあいつも通りだろうと判断し、ジャンはテクノブレスのウィンドウを閉じる。準備運動のストレッチを終え、二人は更衣室を出てカタパルトに向かう。

「待たせたな！」

「何処の段ボールアーミーよ……」

「どっちかといえばだましの手品好きの人間ですよ。段ボールアーミーの方は柱の男側ですし」

「何の話だ何の」

アリーナのカタパルトには仲間の見送りのためにエドとマツリが待機していた。そのほかには作業を一時抜けてきた真耶、タブレット端末を手にした千冬が居合わせている。ゲオルクは何食わぬ顔で大塚○夫ボイスを口にし、エドとマツリからやんわりとツツコミをもらう。

「これが未来のISスーツですか」

「C a t e g o r y — T P S はより機体とパイロットとのより強いコネクティングが重要になりますから、体表部にはこうしたシステムペイントが施されています。これは男女両スーツに共通するもので、あるのとないとでは大きな差が出るほど重要なシステムなんです」

真耶は二人のISスーツに興味を抱き、物珍しげに観察する。一方見られているジャンは一々揺れるダブルメロンアームズに視線を注ぎ、察したマツリと千冬の咳払いがその意識を呼び戻した。それはさておき、ゲオルクが一步千冬の前に歩み寄って準備が終わった意を伝える。

「こちらは既に万全の状態です。いつでも出られます」

「わかった。ならすぐに出撃してもらおう。スタジアムにはもう対戦

相手がお待ちかねなんだが……念のため注意しておけよ」  
「えっ、それどういう意味っスか？」

ジャンの問いに真耶が表情を曇らせて代答した。

「実は、その教師は反対派の一人なんです。みなさんがやって来る前から色々と話題に上がる人物でして、委員会の人間と裏で繋がっているという噂もあるみたいで」

「成程。ひよつとすると俺達の存在が委員会の人間にバレたのも、そいつの仕業かもしれませんね」

「ああ。中々尻尾を出さない奴でこちらも手を焼いているところだ。だから今までマークだけで留めていたんだが……」

「あ、ならこの勝負の後にその教師のパソコン見せてくれないっスかね？ 消しきれなかった証拠が必ず残っているはずっスから」

サイバー系で影差す相手ならジャンの得意分野である。ここは彼に一任した方がいいと判断し、千冬はこの件を彼に一任させることに。

「いいだろう。試合直後ですまないがよろしく頼む」

「了解っス」

気を取り直し、ジャンとゲオルクは射出レール付近に移動。そして顔を見合わせると

「よし。ジャン、行くぞー！」

「はいっスー！」

テクノリングに手をかざしてクリスタル部を光らせ、前に突き出した。

「デイメンション・スリッパ時空転送!!」

刹那、二人の周囲を投影されたディスプレイや数式、ゲージバーが映し出され、二人を起点に光の粒子の渦が迫り上がる。その間粒子が寄せ集まって実体化した装甲が次々と装着されてゆき、投影されていたものが一斉にシャットダウン。展開に有した時間は時間僅か0.05秒だった。

「ミッション・エグゼキューション！ Ready Go!!」

ジャンは赤・青・黄を基調とし、両肩に豹と兎、胸に逆転したゴリラの頭を模した飾りが特徴の大柄な機体。

「アーベントイヤー・コンプリート転送完了！ ファーストギア・イン!!」

ゲオルクのは機械的なモールドが全身の装甲に施され、右腕にシヨベルカー、左腕に潜水艦を模した腕部装甲が目を惹く。そして掛け声と共に各関節や接合部から蒸気が噴出する。

「これが…未来のIS……!?!」

「なんとというか特撮系に出てきそうな合体ロボみたいだな……」

「これがCategory—TPS版のISにしてお二人の専用機、『DN—CM006 ミッション・エグゼキューション』と『DN—CM005／RE アーベントイヤー』です！」

高さやアーマーフレーム、アンロックユニットの位置はそのまま。しかし全身装甲とまではいかないもののそれなりに多い装甲。千冬の言う通り、その容姿は特撮番組に登場する合体ロボ宛ら。

「じゃ、そろそろ行ってくるっス！」

「ひと狩り行ってくるぜ！」

「もう突っ込まんぞ」

二人はレールの射出装置に足底部をセット。真耶はカタパルト奥の小部屋へ向かい、中の機器を操作。二人が出撃する準備を整える。

『それでは発進カウントに入ります。よろしいですね？』

「問題ないっス！」

「いつでも構わん！」

出力スイッチをオンにしてレバーに手をかけ、真耶が口頭でカウン  
トを数える。

『10……9……8……7……』

ジャンとゲオルクは前屈みに姿勢を低くし、数刻後の発進に備え  
る。

『3……2……1……0！ レール射出!!』

「発、進ッ!!」

一気に発進口へ押し出され、二人はカタパルトからスタジアムへと  
飛び立った。

未知なる翼が今、現代の空を駆ける。

---

【次回予告】

---

どもっス！ ジャン・デュノアっス！ 早速『過去と未来のSTR  
ATOSPHERE』の次回予告を始めていくっスよ！



(三人共、ちゃんとジャン君のお手本を今回こそ見習うように！途中で逃げるんじゃないわよ?)

((はい！))

(嫌な予感しきませんね……)

次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』はFile. 13のラストで漸く登場した、自分とゲオルク先輩のISが大暴れ！いくら学園の教師が相手でも女尊男卑に染まった相手に負けられないっス！

ゲ) 俺たちに勝てると思うなよ！ アバレアバレアバレまくれ！  
Get up!

うわっ、ゲオルク先輩いつのまに!?

(あっコラ！ ゲオルクさん！)

次回、File. 14 《冒険者、特命を帯びて》

(あっ、ミハル君とメイランさんまたいなくなってます！)

(また逃げたな！ どこいったコラアツ!!)

ちよつとー!?! ゲオルク先輩どこ行くんスカーツ!?!

ゲ) 逃げるんだよオオオオーオーツ

File. 14 《冒険者、特命を帯びて》

「エドさん、織斑先生達にも話しますか？ 二人や私達のISのシステムについて」

「？ ええ、そのつもりですが」

ジャンとゲオルクがスタジアムに出払った後、管制室に戻ったエドとマツリ。そこである事をずっと気にしていたマツリがエドにある相談を持ちかけていた。

「だとしたら少し漏洩対策をしておいた方がいいんじゃないでしょうか？ さつきみたいに反対派の教師が情報を横流しする可能性も出てきますし」

未来人の存在を知っているのは、現在一部を除いてIS学園の人間のみ。それを外部の人間や組織に知られれば手を出される可能性が極めて高い。マツリは先程の油北の件を気にしているようだった。

それを察したエドはにっこり微笑むと、彼女の不安を拭うようによく返した。

「マツリさん、それなら問題ありませんよ。情報はそこまで横流しされている訳ではないですから。少なくともこの模擬戦でのデータは漏洩しないと思います」

「……？ 一体どういうことですか？」

「さつき、ミハル君とメイランさんが学園のシステムを操作して外部との連絡を遮断したそうです。最低限TPSと連絡ができるよう調整はされているみたいですが。あと楯無さんのご家系である更識家からの追伸によると、油北治やその関係者全ての通信履歴には我々に関する情報がなかったとのことでした」

「更識家も動いていたんですか!?!」

「事態が事態ですからね。当主の楯無さんが秘密裏に動かしていたみ

たいです。内容から察するあたり、油北は自分の手柄にするために敢えて情報を流していないのかもしれない。不幸中の幸いといったところででしょうか」

IS学園、ブリュンヒルデと続いてさらに暗部のバックアップがあった。マツリ達がどれほど大切にされているのかが垣間見える。

「ですがマツリさんのいうことにも一理ありますね。我々のISを知って頂かないことには今後の連携に支障をきたしますし……。とりあえずお二人に掛け合ってみましょうか」

「わかりました」

ひとまず話に区切りをつけ、二人は作業を終えて戻ってくる千冬達を待つことにした。

▽△△▽△△▽

「図に乗るんじゃないわよ、男風情が」

スタジアムで対峙するジャンとゲオルクに発せられた第一声は、とても教師らしからぬそんな暴言だった。

(やはりというか……敵意むき出しできたな)

(女尊男卑主義……しょーもない考え方で勝てると本気で思っているみたいっスね。あほらし)

反論の代わりに向けられた冷ややかな視線に、相手の教師は舌打ちして睨みつける。彼女は先程ゲオルクが目撃した教師であり、纏っている機体は第2世代のラファール・リヴァイブ。汎用性に富んだ量産機である。

それ故に二人は警戒を緩めない。いくら量産機とはいえ、積んでい

るものがまともかどうか怪しいからである。だからこそ二人の表情は真剣そのもの。下らない風潮にあてられた輩に負けるわけにはいかない。

『それでは、所定位置について下さい』

真耶のアナウンスに一旦睨み合いを打ち切り、三人は所定位置に移動。各々の武装を構える。

教師はラファールの標準武装であるマシンガン一丁を呼出<sup>コール</sup>。一方ジャンはタービンらしき機械を二台取り付けたそこそこ大きい近接ブレードを、ゲオルクは大型のツルハシとスコップを両手に携えている。

『それでは……始めッ！』

真耶の掛け声の直後、攻撃を仕掛けてきたのは教師の方だった。

「食らえエッ！」

まずはマシンガンを乱発し、二人を怯ませる策に出る。しかしそれはマニュアル通りだと言わんばかりにジャンが前に出た。

<sup>システム・オープン</sup>「回路開通！ ゲオルク先輩！」

「ああ！」

ジャンがブレードの切っ先を突き出すと、まるでねじれるように空中に歪みが発生。飛んできた弾丸は歪みに触れた瞬間、突如進行をやめて空中に縛りつけられた。

その隙にゲオルクがジャンの背後から左手甲を突き出した状態で右へ飛び出す。直後手甲から三発の魚雷が発射され、まっすぐ教師へと突き進んでいく。

「ふん、そんなもの当たらないわ！」  
「いいや当たるねッ！ この弾は！」

教師は瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速で上昇し、魚雷から身を守ろうとする。しかし

「!? ついてくる!? 何よこのミサイルは！」

なんと魚雷も鯉の滝登りの如く急上昇。教師のあとをしつこく追  
い回してゆく。

「こんなものつ、すぐ撃ち落として……！」

「させないっス！」

ここで弾丸を弾き飛ばしたジャンが攻撃参加。教師の瞬間加速よ  
りもさらに速く上昇し、魚雷に追いつくと再びブレードを突き出し  
た。

「回路開通！ 磁場反発発動っス！」

「キヤアアアッツ!?!」

すると歪みに触れた魚雷が一気に加速。教師が反応できない速度  
で距離を詰め、次の瞬間には全ての魚雷が命中した。

「使わせてもらう！ 現状維持を！」

「了解っス！」

すかさず弧を描くようにジャンの上をゲオルクが通り過ぎる。そ  
して歪みの上へ躍り出ると、彼もまた加速して上昇。あっという間に  
教師の懐に潜り込んだ。

「ハッ、タアッ！ セイツ！」

近接格闘に入ったゲオルクは手にしたスコップとツルハシの二刀流で、胴と腕を狙って斬撃を繰り返す。距離を置かずガンガン攻めた後、急に左へ飛び退いたかと思うと

「てええええいッツ!!」

「キャアアッ!?!」

その背後からブレードを上段に構え、急接近してきたジャンの縦一文字が繰り返された。たまらず後方に吹っ飛ばされる教師だったが、すぐさま再接近してきたゲオルクが追い打ちをかける。

「バケット展開！ こいつも持っていけエツ！」

「うぐあっ!?!」

スコップとツルハシをしまった彼は、次に右腕装甲からブルドーザーのバケットを展開。ラリアットの要領で教師の胴体に強烈な一撃を叩き込む。およそ女性が発するとは思えない呻き声を上げ、彼女はなす術なく地面へとダイナミック着地をかました。

▽△▽△▽△▽

「息のあった連携プレー……!! お見事です！」

「互いに機体や武装の性能を熟知しているようだな。流石特殊な機体乗り慣れているだけある」

「お二人共テクニクやトリッキーな戦い方を得意としていますからね。あの程度はまだまだ序の口といったところでしよう」

一方、管制室には千冬と真耶が合流。エドやマツリと肩を並べて模擬戦の様子を観察していた。

「ゲオルクが放ったミサイルは追跡式か。だがジャンの武装はなんなんだ？ マシガンサイドワインダーの弾をその場に縛りつけたり加速させたりしていたが……今ドイツが開発しているAICの類か？」

「いえ、あれは磁場フィールドを展開できるシステムを備えた近接ブレード『グラヴィティ』です。ミッション・エグゼキューションのマニピュレーターと接続することでエネルギーを充填して、ブレード周囲に磁場フィールドを発生させることができます。引き寄せたり逆に反発させたりと、汎用のきく設計が施されています」

ジャンの武装について解説を行うマツリ……なのだが、その口は一切開かれていない。しかもよく見ると他の三人も全く口を開かず、会話を成立させているではないか。

実はこれこそエドやマツリが打ち立てた漏洩防止策なのである。予め千冬と真耶にISの待機状態を身につけてもらい、プライベートチャンネルの周波数をエドやマツリと同じ値に設定を施したのだ。そうすることで誰にも邪魔や盗聴ができない四人だけの声なき会話が実現しているのである。

「ゲオルク君の機体……アーベントイヤーでしたっけ？ 随分変わったブレードですね」

「ブレードというより……ただのツルハシとスコップじゃないのか？」

「あれは……」

「たしかに『G・O・スコッパー』と『G・O・ツルハシシャー』という呼称ではありますけど、あれもれっきとした武装なんですよ。合体させることで『G・O・タイケン』になって、エネルギー循環システムが起動します。そこから放たれるチャージ攻撃は中々強烈ですよ」

「元々アーベントイヤー自体が工事を目的とした建設特化型の先行機を改良したものですからね。あれはその名残とご愛嬌と受け止めてもらえれば幸いです」

そんな一幕が管制室で行われている中、渦中のスタジオムでは。

「この……ちよつと強いからって大きく出しゃばって！ 男は男らしくさっさと引っ込んでなさいよ！」

ダイナミック着地を決めた場所からすぐに復帰した教師。その表情は憤怒に満ちており、上空で見下げるジャンとゲオルクを鋭く睨みつける。

「お断りだ。少なくとも今の下らん風にあてられたあんたにだけは負けたくないからな」

「まあそうじゃなくても一緒っすけどね！」

「ふざけんなアア—— ツツ！」

それをサラツと遇らわれたことでブチギレた教師は遂に切り札を呼出。

その手に現れたのは四連装の大型多目的ミサイルランチャー。本来は実戦などで使用されるほど強力な破壊力を誇り、今回のような模擬戦では使用が禁じられている武装だ。やはり反対派の人間が一計を案じていたようである。

「死ねエエエツツ!!」

だがその程度は二人も分かりきっていたこと。目には目を、歯には歯を。策にはそれを越す策を。二人は顔を見合わせ、こちらも切り札を出す決意を固めた。

「ジャン。例のやつ行くぞ！」

「勿論っす！ 合わせましょう！」

ミサイルが到達するその直前、二人は各々の単一仕様能力ワンオフアビリティを発動。



刹那、ミツシヨン・エグゼキューションの装甲とアーベントイヤーの両腕装甲がパージ。ミサイルを迎え撃つように撃破したそれは瞬時に再結集と独立可動を開始し、片や青い装甲車と黄色いヘリに、片やブルドーザーと潜水艦に早変わり。本体二機と共に反撃を開始した。

「入りましたね、二人の本気スイッチ。ここから面白くなりますよ」「ふええっ!? いっ、一体何が起こったんですか!? どうか他の機体はどこから出てきたんですか!?!」

「山田先生落ち着いてください。……見る限り両機共装甲に仕掛けがあるみたいだが、あれが二人の単一仕様能力なのか?」

「はい。個装甲独立稼働支援システム『G・O・マルチドッキング』と、それを発展させた外装甲独立稼働式支援機『オペレーション3MD』です。前者がアーベントイヤーに、後者がミツシヨン・エグゼキューションにそれぞれ搭載されています、纏っている装甲にAIを組み込み、本体機の指示によって支援機に変換し戦闘をサポートするシステムなんですよ。まあ元々は建設特化型の仕様をベースに戦闘用として考案された新仕様なんですけどね」

益々特撮色が強まったが、戦闘中に増援を呼べる点は大きな利点である。数の暴力というわけではないものの、立ち回りには幅が出る戦法だと千冬は分析した。

▽△▽△▽△▽

切り札であるミサイルはあつという間に防がれた上に、戦闘中にいきなり増援が出現したことで教師は焦っていた。それ故先程からスタジアム上空を旋回する倒しやすそうな相手から撃破を企てるも全く上手くいかない。

(ダダダダダダッ!)

「くそッ、落ちろつての!!」

教師を嘲笑うかのようにスタジアム上空で轟々とプロペラ音を響かせるのは、底部に備えつけられた機銃で攻撃する黄色のヘリコプター型支援機『ゾード03』。教師が発射するマシンガンの弾を持ち前の機動力と常時展開のバリアで防ぎ、一方的にガリガリと機体のSEを削り取ってゆく。

「おっと、ゾード03だけに構っているとバックがガラ空きつスよ!

ゾード02、ファイア!」

「キャア!?!」

すると教師の背中がいきなり爆ぜる。スタジアム地上を走行する青色の装甲車型支援機『ゾード02』が砲撃を浴びせかけたのだ。その上にはジャンが纏う本体機『ゾード01』が搭乗。教師との距離を測りつつ、ゾード02・03に指示を送って攻撃を行う。ジャンらしい計算を主体とする戦法である。

その切れ目に割り込むように、もう一人のトリッカー・ゲオルクが教師に牙を剥いた。

「ドリルウウウツ、ハリケエエエツツ!!」

「イヤアアツ!」

「先輩それゲッ○ーの技っス!」

某ロボットアニメを彷彿とさせるモーションで”右腕をドリルに変えた”ゲオルクが打突攻撃を繰り返す。さらに”シヨベルバケットに変えた左腕”で追い討ち乱打をかけ、バケットに引っ掛ける形で教師を地上に向けてスパークキング。

その着地点に先程アーベントイヤーの右腕部装甲を担っていた『G・O・ドージャー』が急行。地面に激突寸前の教師をドリフトを効かせたバケットで殴打し、さらに左腕部装甲だった『G・O・サブマ

リン』が魚雷をお見舞いする。

「ギャアアアアッ!!」

容赦ない怒涛の連撃をほぼともに食らった教師。そのSEは底をつきかけ、機体の損傷もかなり激しい。

だがその程度で許す二人ではない。再び一つと元の腕に戻り、ジャンとゲオルクは満身創痍の教師と対峙する。その手に各々の得物：グラヴィティとG・O・スコツパー& a m p；ツルハツシヤーを携え、トドメを刺す準備に入った。

「それじゃあゲオルク先輩、トドメはやっぱり……」

「必殺技でフィニッシュだな！ 行くぞ!!」

「了解っス!!」

呼吸を合わせ、ジャンはグラヴィティにエネルギーを送ってその刃を輝かせ、ゲオルクは二本の得物を合体させてG・O・タイケンを完成。各自の必殺技を放つ段階を踏む。

「!! ま、まずい……! 負ける……!?!」

教師もトドメを刺されることを察して回避しようとする。しかし先の攻撃の影響からか、バーニアもシステムもやられたらしく全く動かない。

「オオオオオオ……ッッ!!」

「ハアアアアア……ッッ!!」

準備が整い、改めて標的である教師を見据える。輝く磁場の刀身に、円を描いて天を指す剣に、それぞれの闘志を乗せた二人は一気に間合いを詰めた。

「いつ…イヤ…ツッ！ 来ないで…!!」

「バスタアア——ッ、カットラス!!」

「アーベントドライブツッ!!」

「キヤアア——ッッ!!」

教師の懇願も虚しく、ジャンとゲオルクの強烈な一閃は正確に彼女をぶった切り、残りのSEを削り取った。

その瞬間ブザーが鳴り響き、真耶のジャツジが下される。

『ラファール・リヴァイブ、シールドエネルギーエンプティにより続行不可！ よって勝者はジャン・デュノア、ゲオルク・ボーデヴィツヒペア!』

「イエーイ！ やったっス！」

「正直あの程度の相手に遅れを取ってではドラゴンエマーゼンシーの仕事は務まらない。軽い肩慣らしにはなったがな」

スタジアムの地面で伸びている教師を尻目に、二者二例の反応で勝利を喜ぶ二人。するとすぐにアナウンスを変ったエドから帰投要請が入った。

『お疲れ様でした。教師の方は救護班が担うとのことですので、一度ピットに戻ってきてください』

「了解した。戻るぞ、ジャン」

「はーいっス」

帰投する二人の視界に、機体を外された教師が担架で運ばれる様が映る。だがあの思考で勝てると思いついていた低俗者のことなど眼中になかったため、二人共一瞥することなく背を向けるのだった。



「たーだいまっス！」

「戻ったぞ」

「二人共お疲れ様。相変わらずいい連携だったわ」

ISを解除して管制室に戻ると、笑顔で出迎えるマツリとエド、千冬と目を輝かせて興奮気味の真耶が出迎える。

「お二人共凄いですね！ 息のあったプレーに一度も被弾しないで勝利するなんて！」

「いやいや、たまたま相手がアレだったただけっスよ。あとはペアの相手がゲオルク先輩だったっていうのもあるっスけどね。向こうの方でもよくペアを組んで戦ってたっスから」

「こうした運も実力の内…とも言えますし。最も相手の思考の問題もありましたかね」

「いずれにしろ相当な時間動かしているのは確かだ。並大抵の実力で緊急事態の対処に見合わんのだろう」

「そう思っていただければ幸いです」

しつこいようだが、ドラゴンエマーゼンシーは緊急事態対処を主な活動としている。こうした特殊機体を与えられ、使いこなせなくてはいざという時の対処に遅れるだけではなく、仲間の足を引っ張り兼ねない。だからこそ彼らの鍛錬や稼働時間は並大抵のレベルではないのだ。

「エド、先に更衣室の方に行って着替えてこい。俺はメイランを呼んでくる。ついでに交代してくる」

「そうですね。それではお言葉に甘えて、お願い致します。ゲオルクさん」

次の勝負に向け、ゲオルクはエドに配慮を利かして管制室を出て

行った。

「それじゃあ、自分はちよつと調べ物があるんで抜けてくるっス。……あとトイレ」

「早く行つてきてよもう……」

遅れてジャンも一礼してそそくさと退室。機体のコンディションは良かったものの、体の方はそうでもなかったようだ。

「ではマツリ、次の模擬戦前にデータの保存とプロテクトの立会いを頼む。ついでにミハルも呼んできてくれ」

「了解です」

そう言われてマツリは管制室のコンピュータにテクノブレスを繋いで操作し、データのプロテクト作業に取り掛かる。そして同時並行でテクノブレスのメールウインドウを立ち上げると、短い単語を素早く打つてミハルに送信。

その文面にはこう記されていた。

『天誅』と……

---

【次回予告】

---

ミ（　）ハアハア……こゝ、ここまでくればもう大丈夫だろ？　ファン姉。

メ（　）せやねろ。あ、ついでに次回予告しとこうやろ。カメラまわってるで〜。

ミ（　）あ、ホントだ！　どもどももオーっ！　ミハルでーっす

!

メ) ウチやで〜!

ミ) 次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は模擬戦第2ラウンド。エドとファン姉が大活躍の話だ! チームリーダーと元特技班の実力は伊達じゃねえぞ!

メ) ホイツ! ハアイ! 飛○流は無敵だあ〜!

次回、File. 15 《炸裂! 虎の拳と警衛の弾丸》

マ) 見つけたわよ二人共ツ……!

ミ) ゲツ、見つかった!?

マ) 覚悟はよいかツ! 一・瞬・千・撃! イイヤアアアツ!

ミ・メ) ピヤア——ツツ!?

File. 15 《炸裂！ 虎の拳と警衛の弾丸》

Category—TPCを用いた模擬戦一戦目はテクニッカー二人の勝利で終わり、次なる二戦目はチームリーダーエドとメイランの出る番となった。

「もぐもぐ♪ うふふっ」

「模擬戦前に何を食べているんですか一体……」

先に着替えていたエドは入ってきたメイランに開口一番呆れたような台詞をかけた。

無理もない。彼女はリスかハムスターかと突っ込みたく頬を膨らませ、幸せそうな表情で入ってきたのだから。恐らく楯無辺りから報酬として菓子をたんまりもらったのだろう。それをいっぺんに平らげるとは、もはや人間の域を逸脱している気がするのだが。

「さくさくさく……んつくんつと。なにっってお菓子やで。何事にも糖類は必需品やからな」

「はあ……。何にせよ程々にしてくださいね？ 虫歯になって辛い思いをするのはメイランさんなんですから」

「歯磨きはしっかりしとるでもうまみたいやで」

一切の説得力が感じられない脱力した様子で、今度は自前の菓子に手をつけるメイラン。それを見たエドは歯磨きだけでは足りませんよとだけ言い残し、女子の着替えということで一旦外に出る。せめて気持ちだけでも落ち着かせようとテクノリングを操作しようとしたのだが……

「…………… (ズルズル)」



「……ジイ〜ムウ〜……」

「……………見なかつたことにしましょうか」

制裁を食らって連行される兄と下した妹のワンカットを見て余計に不安になるチームリーダーであった。

▽△▽△▽△▽

しばらくして着替え終わったメイランが更衣室から出てきた。

「着替え終わったで〜。お待ちせや〜」

メイランのISスーツは先の二人とデザインの共通した箇所があるが、女性用なのか半袖半丈に手袋とニーソを身につけていた。そして特徴的だったポニーテールは位置を上げて結び直し、おっとりした雰囲気から一転した機敏な動きで準備運動をし始める。

「わかりました。それでは待たせてはいけませんし、早速行きましょうか」

「せやなく、れつつらごーや〜!」

移動しながらもメイランはシャドーボクシングでアップを続ける。どうやら彼女は肉弾戦がメインのようだ。

カタパルトに到着すると、既に千冬が操作室で射出準備に取り掛かっていた。

「展開してすぐ出撃しろということですね」

「せやったら早よ行かなな! エドやん!」

「え、ええ…… (相変わらず好戦的ですねえ、メイランさんは……)」

二人は千冬にアイコンタクトを交わし、テクノリングを突き出して跳躍する。

「デイメンジョン・スリッパ時空転送!!」

投影ディスプレイやゲージバーなどに囲まれ、光の渦に飲み込まれるエドとメイラン。実体化した鎧を全て装着すると、二人もまた違ったISを身に纏っていた。

メイランのIS『ドゥ・バイフー闘白虎』は虎や豹、ジャガーといったネコ科の動物が胴や脚部にあしらわれた、細身で暖色カラーの機体。一方エドのIS『メトロパトロール』は全体的に白を基調とし、所々に黒いラインと肩や胸の赤色灯といった警察車両を連想させる機体を展開。それぞれレールの射出装置に足底部をセットして出撃準備を整える。

『両機、準備はいいか?』

「こちらは問題ありません。いつでも出撃できます」

『了解。それではカウントに入る』

千冬は手早く操作し、カウントを刻む。

『3……2……1……0!!』

「**発進!!**」

二人同時にカタパルトを離脱し、スタジアムへと降りてゆく。それを視認した千冬は小部屋を出て管制室へと足を向ける。管制室ではマツリが既にデータ取りの準備を手早く済ませて彼女を待っていた。無論その傍らにはミハルがいたが、なぜかデスクを支えに立っているしフラついている。

「織斑先生、次の模擬戦の準備は整えてあります。口頭説明は先程と同じです。ミハル兄のテクノリングもチャンネルを合わせてあります」

「ご苦労。ミハルも問題ないな？」

「も、もーまんたいっす……」

プルプル震える手でサムズアップは非常に説得力が乏しかった。しかしミハルのタフさは千冬も認めているため、とりあえずその言葉を信じてマイクを手取る。

「それでは、これより模擬戦第二回戦を執り行う。双方、前へ！」

▽▽▽▽▽▽

「お二人とも、お待ちしていました。二戦目は私がお相手します」

「山田先生が相手ですか。これは相手にとって不足はありませんね！」

「ウチは誰でもかまへんで。矢でも鉄砲でも持つてこくいや〜！」

スタジアムでエドとメイランを待ち受けていたのは、ラファールを纏った真耶であった。彼女は千冬にこそ及ばなかったものの、日本代表候補生まで上り詰めた実力者。それを知っている二人からすれば対戦相手には最も相応しい人物だ。

『それでは、これより模擬戦第二回戦を執り行う。双方、前へ！』

改めて気合を入れなおし、所定位置に移動した三人は一礼した後に各々の武装を呼出する。真耶はアサルトカノン『ガラム』、エドはそれよりも二回り小さく銃口が三基の拳銃『ゴールドデンチエリーmk.3』を、メイラン至つては何も武装を手にはせず功夫の構えをとる。

そして、戦いの火蓋が切られた。

『試合開始!』

「ホッ!」

先陣を切ったのはメイラン。瞬間加速イグニッションブーストでいち早く真耶の懐に入り込み、勢いに乗せた回し蹴りを繰り出した。その間僅か0.5秒以下。あまりの速度に反応しきれず、真耶はまともに攻撃をくらってしまった。

「ぐうっ!?!」

「ハイッ!」

「キヤア!」

さらに続け様に蹴り上げが放たれ、鋭い一撃が顎を捉える。三撃目に移行しようとメイランが拳を突き出すが、流石に持ち直した真耶がこれをガラムで防御、不発に終わった。

しかしこれを皮切りにメイラン怒涛の連撃が開始。次々と繰り出される功夫が襲い掛かった。

「ハイッ! セアッ! ホアッ! ウオアタッ!」

「くっ、ううう……!! (は、速いだけじゃない……! 一撃一撃がとてつもなく重い! 当たれば確実にSEを大きく削られてしまう!)」

既に盾代わりのガラムは原型を留めないほど歪みきり、真耶は防戦一方。反撃しようにも次の攻撃までのラグの短さと攻撃の重さに圧されて手出しが出来ない。

だが脅威はこれだけではなかった。それまで微動だにしなかったエドがゆっくりと顔を上げると、何やらUFOのようなビットを六機発進させた。六機はバラバラに散開すると、ちょうどメイランと真耶を取り囲むように浮遊する。

「……………全弾命中」

刹那、エドが飛ばした内の一機に向かってエネルギー弾を数発発砲した。レーザー弾は真つ直ぐビットへと突き進み、なんと接触する直前で全ての弾が別々の方向へ湾曲。その先はまた別のビットが浮遊しており、レーザー弾は次々と軌道を変えてはメイランと真耶の周辺を駆け巡る。

次の瞬間、全てのレーザー弾が一斉に真耶に襲い掛かった。

「キヤアアアッ！」

メイランは攻撃の手を止めて後退したため回避することに成功。レーザー弾は全て真耶に着弾し、そのはずみでガラムの盾が弾かれた。

「隙ありやー！」

「ぐううっ!?!」

その一瞬の隙をメイランは逃さず、再び瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速で急接近して蹴りを放つ。某赤い○星を彷彿とさせる一撃はガラ空きの胴体をしつかりと捉え、真耶をスタジアムのシールドに叩きつけた。

「ナイス援護射撃やで、エドやん！」

「……………恐悦至極」

メイランのサムズアップに、エドは終始無表情でゴールデンチェリーmk.3を握り締める。今までの優しい面影は何処へやら、その相貌は狩人そのもの。鋭い目つきで真耶に対する警戒を緩めようとなし。

「…おい。エドのやつどうしたんだ？ 明らかに性格が変わっているぞ」

「あー…あれは気にしないで下さい。エドさんの癖らしいので」

「アイツ、いっぺん銃とか握っちゃうと確実に狙い撃つために色々考えるらしいんすよ。風向きとか射程距離とか諸々……。んで周囲を詳しく把握するために余計なことを一切喋らなくなって、唯一口にするのが今みたいな短い言葉なんです。まあ俺は一種のトランス状態だと認識してますけどね」

千冬の問いに半ば呆れ顔で説明するミハル。ついでに補足として彼の機体に関する解説を話す。

「ちなみにエドの機体はREタイプって言って、量産型とか流用専用機をデュノア・コーポレーションで特殊改良したCategory | TPSの機体なんだ。その仕様は偏向射撃フレキシブルを簡易修正した中継射撃で、あのUFOビット『シャトルズ』がレーザー弾を反射して狙撃する仕組みなんだ」

「本体機からの攻撃を”繋ぐ”ビットか……。あのビット自体に攻撃手段はないのか？」

「ありますよ。中継する際は”リフレクトモード”に切り替わって支援に徹しますが、”アタックモード”は俊敏な動きと共にレーザー弾を発射します。一機ごとに切り替え可能なので、ほかのUFOビットが発射したレーザー弾も中継狙撃することができます」

一方スタジアムでは、エドが再びUFOビットに指示を送って出撃させていた。三機を真耶の付近に、もう三機を自身の周囲へ常駐させ、追撃の準備を整える。

「……………追撃続行」

「さつきは不意を突かれましたが…もう食らいません！ 行きますよ！」

真耶もエンジンがかかったのか、もう一丁のガルムを呼出して銃口をシャトルズへ向ける。だがシャトルズは弾丸をスルスルと回避する上にエドやほかのシャトルズのレーザー弾を中継して相殺。一進一退の攻防を繰り返す。

（同じ場所に居続けるのは得策ではありませんね。中継されるレーザーは確実に私を狙ってきますし、何より……！）  
「フッ！」

飛び交うレーザー弾に紛れるようにメイランの功夫が飛んでくる。それを直前で回避しつつガルムを連発するも、多少の被弾を覚悟しているらしく、ある程度弾いてすぐに接近。

（肉弾戦で挑んでくるメイランさんの猛攻をどうにかしないと！ というかそもそもISで肉弾戦は自殺行為じゃ…!?）

ISが武装し、使うことに関して幾多の説がある。その一つに”素手でやりあうと同等のSEが削られる”というものがある。故にこれは自殺行為とされ、好き好んでやる者はいなくなった。しかし……

「大技！ 虎廻廻拳ッ！」  
フーホイホイチユアン

現にメイランはその自殺行為で挑んできているのだ。しかもSEが減っている様子はなく、そればかりか彼女は全身を高速回転させながら両拳を左右に突き出し、真耶へ突貫してきた。

「くっ、ならばこれです！」

真耶は対策としてグレネードランチャーを呼出<sup>コール</sup>。メイランに向けて乱発した。このグレネードは接触すると起爆するタイプで、思惑通りメイランの手にグレネードが接触して爆発。ほかのグレネードを巻き込んで爆炎の花が咲いた。

(ドカアアアン!!)

「当たったー!」

着弾して爆破したことで安堵する真耶。しかし動きを鈍らせたことが仇となった。

「たああアアアツツ!!」

「キヤ——ツツ!」

速度も回転も一切緩むことなくメイランが爆炎から飛び出し、強烈な回転拳が真耶をぶっ飛ばした。

「あー山セン駄目だつて。あの特技はグレネードなんかで止められるようなヤワなもんじゃないんだから」

真耶の対策にミハルはあちゃーと頭を抱える。

「……メイランの戦い方を見る限り、機体は格闘型に長けているように見えるが、あれだけ打撃を繰り返して機体に何のダメージもないのか?」

「ええ。メイランさんの闘白虎<sup>ドゥ・バイフー</sup>は殆どと言っていい程武装が積まれているだけで、その分の拡張領域<sup>パススロット</sup>が仕様<sup>仕様</sup>にまわされているんです。まあ仕様については追々として、闘白虎<sup>ドゥ・バイフー</sup>の武装は両拳と両脚のガントレットと具足だけです。両方とも打撃の際に発生する自己ダメージを無効化するシステムが施されていて、メイランさんを始め、格闘技を主体とする方達用に開発されたんです」



「最初に言ったと思うけど、こつちじやこの時代の欠陥として問題視されていた部分は粗方改善されているんだ。だから俺達男も乗れるし、殴る蹴るも傷の内に入らないんだ」

「……そういえば、そうだったな」

自分たちの常識がまるで通じない相手と試合う。この戦いがいかに柔軟な対処で挑まなくてはならないのかを千冬は改めて痛感していた。

それはスタジアムにいる真耶も同じだった。

(う……迂闊だった……！ よくよく考えてみれば、この子達の I S は私達のそれとは違う！ もう S E も少ない……必死にならざるを得ませんね……!!)

立ち回りや回避のコツを徐々に掴み始めてきた彼女は、先程のメイランの技以降攻撃を殆ど食らっていない。手持ちの物を駆使して応戦する見事な大立ち回りで反撃に出たのだ。

「……………本領発揮」

「せやな、ウチらの動き方を早くも掴みよった。ほんならこつちも行くでー！」

「……………了解」

流れが変わり始めたことを察したメイランはエドに合図を送り、彼はシャトルズをスタジアム全体へ拡散させる。そして遠くへ行つた一機に向けてレーザー弾を集中連射。

「なにか仕掛けてきましたね……！ なら私も！」

真耶はライフル『ヴェント』を呼出して上空へ飛び、中継されたレー

ザー弾をまとめて迎え撃つつもりらしい。シャトルズと同位置、もしくは下にいると回避しづらいが、シャトルズよりも高い位置にいればレーザー弾を打ち落としやすい。そう判断したのだ。

さらにメイラン対策とばかりに煙幕弾に切り替えたグレネードランチャーをもう片手に呼出し、得意の狙撃に持ち込もうとする。

だが

「さあ、どこからでもかかってくるなさい！」

「ほな、遠慮なく!!」

「えっ!? キャアアアツツ!!」

ヴェントとグレネードランチャーをかまえた次の瞬間、いつのまにか背後に回り込んでいたメイランが真耶の胴体に足を引っ掛けてバックヘ一回転。さらに両手を固めてそのまま地面に急降下した。

「エドやん、今や!」

「……………全弾命中」

その過程で中継された全てのレーザー弾が次々ヒットし、二人の落下地点にエドが素早く回り込む。そしてメイランが拘束を解いてドロップキックをお見舞いし、素早く飛び退く。

「そおーれっ、よいしょっ!」

「……………三撃必中」

ゴールドデンチエリーmk. 3をかまえ、その三つの銃口にエネルギーを充填。そして落下してくる真耶の身体を中心に狙いを定め、躊躇なくトリガーを引いて発射した。

「キャ————ツツ!」

赤、黄、青の鮮やかな三発のレーザー弾は全て真耶を見事貫き、残りわずかのSEを完全に削り取った。

「……………任務完了」

「よっしやあ！ ウチらの勝利や！」

『そこまで！ 勝者、エドワード・オルコット、メイラン・ファン！』

ブザーと共に千冬のジャッジが下り、第二試合はエドとメイランの勝利に終わった。しかしまだ二人にはやるべきことが残っていた。

「……………制御不能」

「へ？ ……あー、エドやん狙い所良すぎて変なトコ当たってしまってたみたいやなく」

「ひやあああああつつつ!? とつ、止まりませええんつつ!!」

そう、先程エドが放った三発の強力レーザー弾『シグナリツシュ・ブラスト』。そのうちの一发がラファールのシステム系統を傷つけてしまったらしく、機体の制御が出来なくなってしまうのだ。それを見たエドはゴールデンチエリーmk.3をしまう。先程よりも穏やかな目つきになった彼はその場で瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速し、墜落する真耶のもとへ駆けつける。

「ひやあああああ——むっ!?」

「もう大丈夫ですよ。山田先生」

「ふええっ!? エ、エドワード君!」

「すみません、軽い手合わせのつもりだったんですが……少し熱くなりすぎてしまいました」

「い、いえいえ。とてもお見事でしたよ。お二人の連携は流石でした」

真耶を抱き抱えてゆつくりとメイランのもとへ戻った。彼女をお

ろすと管制室から通信が届いた。

『こちらミハル。メトロパトロールと闘<sup>ドウ・バイフー</sup>白虎のデータプロテクト終  
わったぜ。すぐに帰投しろだつてさ』

「了解しました。Aピットのカタパルトの方が近いので、そちらから  
山田先生と共に戻りますね。それでは二人とも、帰投しましょうか」  
「さんせーや。ほな次はウチが運んだるでー！ よいしょつとー！」

「えっ、ちよ、キャツ！」

「ちよつと!?!」

SEがすつからかんのラファールを、今度はメイランが運ぼうとする。だが真耶がまどつているにも関わらず、抱き抱えるどころか担ぎ上げてしまう。

「そーらいくで〜！ ほりやあつ！」

「ひゃ——つ!?!」

「いや速度速度！ 速すぎますつて！」

イグニッション・ブースト  
瞬間加速ではないと思うのだが、近いカタパルトまで一気に距離を詰められれば誰だつて驚く。担ぎ上げられているのなら尚更。遠ざかる二人の姿を眺めつつ、エドは軽く嘆息してカタパルトへ戻るのだった。

---

### 【次回予告】

---

(キョロキョロ……)

ハア、ハア、もうここまで来ればいいだろう。

どうも、ゲオルクだ。前はミハルとメイランが逝ってしまったが、俺は年長者だからな。年季の違いというものを見せてやる。

次回の『過去と未来のSTRATOSPHERE』は遂に第三戦目の模擬戦、ミハルとマツリのISがお披露目だ。そんな二人と相見え

るパイロットはまさかのあの人物。勝てるかどうか、俺は内心ヒヤヒヤしているぞ。

次回、File. 16 《兄妹の阿吽 前編》

(意外とまともですね……これは肅清なしですかね)

ウェイク・○ツプ！ 運命の鎖を、解き放て！

(あ)

(ウェイク○ツプ・2！ 死ねエい!!)

じゅん○オオオ—— ツツ!?